

---

# 王妃様は逃亡中

遊森 謠子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王妃様は逃亡中

### 【Zコード】

Z1247Y

### 【作者名】

遊森 謠子

### 【あらすじ】

『異世界から召喚された黒髪黒目女性は、その國の王妃になり世継ぎを生みましたが、郷愁の思いに耐えかねて元の世界へ帰つて行きました』。そんな筋書きになるはずだつたんでしょうねえこの状況。「あなたの役目は終わつた、元の世界に帰れ」？「じょおっだんじやない、日本に帰るのなんかまつひら」「めん！」強制送還回避のため城からの逃亡を余儀なくされたけれど、実は日本での経験から「逃亡慣れ」していた王妃。さてどうする？ 2011・9・9に投稿した短編『王妃様は逃亡中』の長編版です。

## プロローグ（前書き）

短編版『王妃様は逃亡中』、たくさんの方に読んでいただき、さらに続編リクエストいただきありがとうございました！ 長編版スタートです。あの短編の背景とその後を、ぜひお楽しみ頂ければと思います

## プロローグ

たつた二十数年生きてきただけの人生だけど、幸せなんて長くは続かないものであることを、私は身をもつて知っていた。  
まさかそれが日本でも異世界でも通用する法則だったなんて、知りたくもなかつたけどね！

絶体絶命の状況で、私は目の前の男にガンを飛ばしながらそんなことを考えていた。

「王妃様、立派にお役目を果たされたこと、国民を代表してお礼申し上げます。心おきなく、元の世界にお帰り下さい」  
目の前の男、祭司長のグレッドが恭しい手つきで、王妃 つまりこの私 の後ろを指した。

背後の大理石の床には、魔法陣が紫色にぼんやりと光っているはずだ。さつき聖堂に入った瞬間に見たからね。

私が日本からこの世界に召還されてきたときの魔法陣とは、微妙に色が違つだけでよく似ている。それに気づいた時にはもう遅くて、数人の僧兵を従えたグレッドが聖堂の入口を封鎖していたのだ。

「世継ぎを生んだら、私は用なし？」

魔方陣を背にした私は、隙をうかがいながら言葉をぶつけた。  
くつそお、こいつ初めて会つたときから、なんか企んでるとは思つてたのよ。日本での逃亡生活で磨いた直感を信じればよかつた、あれから一年経つたとはいえ私もヤキが回つたわね。

「これは……私は僭越ながら、王妃様のお悩みをお察ししたままでです。生まれ育つた場所にお帰りになりたいでしょう？」

聖堂の、夜空を透かした水晶の天井に、グレッドの低い声が反響する。

じょおつだんじやない、も「日本なんかまつぱり」めんー。

両親も健在、犯罪者でもない私が、なぜ日本脱出にそんなに喜んだのか。

それは、父が大物政治家で母は有名女優といつ生に立ちに原因がある。そう、私はいわゆる隠し子で、日本ではマスクで隠されていたのだ。

そんな中、この国ハーヴェステスに召還されて穏やかな生活を手に入れて、私がどんだけ喜んだと思つてんの？

「祭司長殿は私に、国王陛下と愛する王子を置き去りにして、帰れとおっしゃるの？」

馬鹿丁寧に尋ねる。

アレ、今「愛する」が「王子」にしかかかつてなかつたよつた。まあ細かいことはいつか。

「（）安心下さい、幼い王子様は私が後見して、立派な王太子にお育て申し上げます」

しゃあしゃあと言い放つグレッドは、紫の祭司服に銀の鳴杖めいじょうづを手にしている。理知的な瞳が、意味ありげにこちらを見つめていた。王子を操つて、自分が実権を握るつもりね。ハツ、なんて分かりやすい悪役つぶりなの。それにしても、私が邪魔なだけなら何で殺さな……はつ！

「まさかこの陣に入ったとたんに私、死ぬとかじゃないでしちゃうね！　だいたい帰還の陣があるなんて、聞いたことないわ」

「それは王妃様が、歸る方法について一度もお聞きにならなかつたからです」

ハイソーでしたー！

「でも、なんでこん」

「（）心配には及びません」

理由を聞こうとした私の言葉に、グレッドはおつかぶせるように言った。

「王妃様は産後ウツのために、私に頼みこんで魔法陣を発動させ、元の世界にお帰りになる。お優しい陛下だ、そんな理由なら納得して下さるでしょう。後顧の憂いなくお発ち下さい、さあ」

僧兵たちとともに一歩踏み込んできた、その準備万端のドヤ顔がムカつく。ピンヒールのかかとで踏みつけてやりたい、ていうかやる、いつか絶対やる！

私はそう決意しながら、さらりと言った。

「あらそう。それじゃあ、アレは何なのかしら？」

聖堂の入り口の方を指さすと、グレッドはとっさにそちらを振り向いた。

その瞬間、私はぐるりと魔法陣の方へ向き直ると、数歩の助走で一気に 魔法陣を飛び越えた。

これでも学生時代は、幅跳びでインターハイ出場したんだからね！

「シーザ様！」

グレッドがあわてた声で、こっちでの私の名前を呼ぶのを背中で聞きながら、祭壇の後に回り込む。指先が床のわずかな引っかかりを探し当て、私は隠し扉を引き開けると飛び降りて扉を施錠した。この王城の中の王族用逃走経路はとっくに確認済み！ 日本での逃亡生活をなめんなよ！

私は太股にベルトで巻いてあつたジッポ（日本から持参した品の一つ。あ、こっち来てから禁煙したけど）に火をつけると、暗い石造りの通路を一気に駆け抜けた。えーっと、右・左・左・もつかい右。つ。

突き当たりの壁に寄せて、用意しておいた大きなショルダーバッグが置いてある。その中からごく普通の綿シャツとスカートを引っ張り出して着替え、ポンチョみたいな外套を羽織つてフードをかぶ

つた。

バッグを肩にひっかけると、頭上の上げ蓋を押し上げる。

そこは王城の裏手の森だった。口の出のいとま、グレッドは知らないはず。

黒々とした梢の隙間から夜空を見上げ、星に方角を尋ねて、私は走り出した。

くわわ、絶対に王妃の座に返り咲いてやるから覚悟しどけ！  
息子よ、ミルクは飲んでもグレッドの言ひとは鵜呑みにするな！  
夫よ、あんたもだ！

……つて、いつの世界でも結局、逃亡生活か！

## 1 王妃召喚（前書き）

1話目と2話目は国王視点です。

# 1 王妃召喚

「妃が『帰つた』？」

帰城早々、祭司長から内密の話があると言われて人払いした執務室。余は、平伏するグレッドの言葉に思わず立ち上がった。

「余が城を空けている間に、何があつたのだ」

「は……昨夜、王妃様が私の部屋へ、供もつけずにおいでになつたのです」

グレッドは、床に着けていた額を少しだけ浮かせて言った。

「そして、『やつぱり國母なんて無理。もう帰る。帰還の陣を開いて』とおっしゃりながら……短剣を首に

「わが身を盾に、そちを斬したのか」

「いえ、短剣を私の首に」

であろうつな。自分が死ぬより相手を殺す女だ、妃は。

「他にも、『ここにいたら一人目産む羽目になるかもしれないじゃない。あんな痛いの一回だけでたくさん、もづヤダ』とおっしゃつて」

うむ。確かに先日王子を出産する真つ最中に、「一人目なんか絶対産むもんかー！」といつ叫び声を城中に響き渡らせていた。

「しかし……にわかには信じられぬ。妃はニッポンには帰りたくない」と常々……」

逡巡する余に、グレッドは再び額を床にすりつけた。

「他にも『世継ぎを産んだら私は用なし』とつぶやかれ……お心を病んでおられたのかもしれません。それに気がつかなかったのは私の不覚」

その言葉に、余は一瞬言葉を失つた。グレッドは続ける。

「しかし、帰還の陣に入る直前には、陛下と王子殿下の今後を心配なさつておられました。申し訳ありません、お止めすることができず……」

余は執務机の椅子にもう一度深く腰掛けると、額を押された。

「……少し、一人で考えたい」

「は……」

グレシドはゆっくりと立ち上がると、

「私は聖堂で謹慎しております。いかようにも御処分を……」

と言い残して執務室を出て行つた。

おかしい。何かがおかしい。妃らしくない気がするのだが……。

余は、妃と初めて出会つた頃のことを思い返した。

たつた二十数年生きてきただけの人生だが、人間しょせん打算で生きていることを、余は身を持つて知つていた。

それは、我がハーヴの地でも異世界ニッポンでも通用する法則であつたらしい。

余は、ハーヴェステス王国の当代国王である。

我が國の王室には、節目の代の国王が王妃を異世界から迎えると、その子孫が国を栄光に導く、というカビの生えた言い伝えがあつた。百一十代目の曾祖父が召喚を行つてから八十余年、次は百二十三代目の余が召喚を行うことになつていた。

異世界の女性を妻にするといふことは、この国の高貴な身分の女性を妻にしてその実家の後ろ盾を期待する、というようなことができない。そのため、節目の代に国王の座に就くことを「はずれくじ

を引いた」などと揶揄する輩がいることも知っている。

しかし、実は余は、この召喚制度を心中密かに歓迎していた。年頃になつたら召喚が行われると決まつていたために、余の周りでは正妃の座を巡つての争いが起つたことがないからだ。

側妃についても、正妃を召喚した後で選定するか否かを決定すると告知してあつたため、水面下では色々あつたやもしれないが、表立つては平穏なものだつた。

余は、父親である先代国王の妃たちの、醜い争いを見て育つた。実の母である第二側妃が早死にしたのも、その精神的な負荷のせいだと余は思つている。

年頃の女たちは「張り合ひがない」「女を磨く氣概が薄れる」などと顔を合わせてはこぼしているようだが、余は父のように女たちの争いさえも利用して貴族どもの手綱を取る手腕も持たなかつたし、誰か一人の女を愛して「妃は彼女でなくては嫌だ」などという波乱を巻き起こすような情熱家でもなかつた。

後ろ盾を持たない妻を王妃として迎え、平凡な人生を送るという打算を実現できるなら、相手は異世界の人間でも全く構わなかつた。ただ、故郷のすべてから切り離されて、この世界へやつてくる女性の悲しみだけは心配であつた。どんな女性でも、せめて何一つ不自由ない状態で出迎え、希望を聞いて劳わつてやらねばなるまい。祭司長や近衛騎士団長、女官長らと準備を進めながら、余は淡々とその日を待つた。

そして、吉日を選んでついに召喚が行われることとなつた。

聖堂は、建物の半分が水晶で作られている。磨かれ透き通つた天井を見上げると、夜の闇に少しづつ朝の色が混じり始めていた。そんな、世界の清冽さを感じられる時刻。

射し始めた朝の光が祭壇に届き、さらに空になお残る明けの明星の光を鳴杖に戴く呪を唱えたグレッドが、祭壇の前で杖を水平に伸ばしてゆっくりと回転した。

最後に立てた鳴杖で床を一つ突くと、シャン、という澄んだ音とともに夜明けの冴え渡つた空気が振動して、魔方陣が渦を巻くように光りながら開いた。

余は自ら指先に傷をつけると、陣の中へ手を差し出した。  
ひとしづくの血が陣の中に落ちた瞬間、魔方陣が強い光を放つた。

光が収まつたとき、召喚陣の中央に、余と同じ年頃の女性が立つていた。

化粧氣のない顔はしかし整つていて、黒い瞳が賢そうな光をたたえている。黒髪は無造作に後ろで一本にまとめられていたが、素早くあたりを見回したその動作で、腰までの長さがあるのがわかつた。地味な服の頭巾を後ろに垂らし、ズボンを履いている。

もう一度こちらに向き直つた彼女の固い視線に、余はようやく我に返つた。

すぐに祭司長が、魔精靈であるイルフレートを飛ばした。薄く柔らかい羽が何枚もある、書のような蝶のような形のそれは、言葉の通じない他国人との交流の際に、通訳としての役目を果たす存在だ。一人の言葉の意味をもう一人の意識に働きかけて理解させる、文字通り『意思を疎通させる』能力を持つている。

彼女の髪の結び目あたりにふわりととまつたイルフレートは、異世界人との間の意思も滞りなく疎通させてくれた。

「余はハーヴェステス国王、フェザリオン・ハーヴェス……」

余が説明し始めるのを遮つて、彼女は「話は聞くから匿つてくれ」という。しつこい男につきまとわれている所だつたそうで、もう追われることはないと言つてやると、いぶかしげにしていた。

聖堂の応接室に場所を移し、この国の召喚の伝統を説明する。

「えーと……まあそういうファンタジーを読んだことがないわけじゃないけど……」

彼女は視線を宙にさまよわせ、しばらく黙りこじってから、「まあ、夢なら夢でもいいか。覚めるまでひたつてねば」と妙な納得の仕方をしていた。

一応話を進めるとして、余が国王であつて、十三代目であることをもう一度説明すると、彼女は片方の眉を上げて「なにそのキリ番イベント」とつぶやいてから、うなずいていた。

「うん、でも、もし夢だとしてもすげー夢だわ。いいよ、王妃になる」

## 2 王である証拠は“城”？

私と祭司長のグレッド、そして近衛騎士団長と女官長は、顔を見合わせた。

そもそもこの四人しか儀式に立ち会わなかつたのは、召喚された女性が取り乱すこと前提で、その様子をむやみにさらわないためだつたのだが……この落ち着き様は。

「わかつておるのか？ 有り体に言えど、世継ぎを生めとこつことだぞ？」

余が念を押すと、彼女は少し表情を緩め、もう一度どこかことかない仕草でうなずいた。

「うん。私、その……ちょっとすんだ生活を送つてたから、自分は結婚して子どもを生むなんて生活はできないと思ってたのよね。保護してもらひえて、しかも普通の結婚生活を送れるなんて、嬉しいくら……」

国王との結婚を『普通』で済ませるか。

剛胆にもほどがある……いったいどんな生活を送つていたのだろう。

とにかく、彼女はその口眠つていないとじだったの、一晩経つてから改めて気持ちを聞くことにして と言つてもすでに朝陽が昇つていたが 聖堂に付属する塔の密室を下えて休ませた。

夕刻、聖堂に適当な用事をつけて、一いちから彼女の元へ出向いた。

国王自らが出向くのはあまりないことではあったが、彼女から余に王城に会いに来させると目立つてしまつ。この世界の人間はみな、

髪の色は白かそれに順ずる「く淡い色、瞳は紫に属する系統の色。彼女のような黒髪黒目は存在しないのだ。

壮年の近衛騎士団長とともに客室に入ると、窓辺に立っていた彼女が振り向いた。服装は召喚時と同じ。着替えなかつたのか？少し憔悴した様子に、奇妙な話だが余は安堵した。彼女もやはり一介の女人、やつと今の自分の状況を悟つて混乱しているに違ない。

「具合が悪そだが、大丈夫なのか」

余が先に長椅子に腰かけると、部屋にいた女官長が彼女を向かいの椅子に促す。彼女はこちらに近づきながら、軽くため息をついた。  
「あまり眠れなくて。ここ、非常階段とか避難ハッチとかないわけ？」逃走経路確保しないで眠るなんて無理だわ、私

「ひなんはつち？」

イルフレートがおおよその意味を伝えてはきたが……バルコニーに、穴？

彼女は余の様子には構わず、向かいに腰かけると余をまっすぐ見つめた。

「さつきは混乱して、簡単に王妃になるなんて言つちゃつたけど、その前に聞きたいことがあります」

やはりな、と余は思つた。

あんなに簡単に、余の妻になることを了承するはずがないのだ。まずは何を尋ねられるか……元の世界への帰り方か、それとももつとしたたかに、交換条件として何かを要求してくるか。

彼女は言つた。

「あなたが王様だという証拠は？」

「……何？」

聞き返すと、彼女は『ぐ真面目な口調で言った。

「口ではいくらでも言えるものね、自分は王様だなんて。証拠を見せて下さい、証拠を」

一瞬呆気にとられてしまったが、それも確かにいつも……か。

「そう、だな……王家の人都には、肩の後ろに十字のアザが」「だから、それを見せられたところでアザが本物かどうかもわからぬし、そもそも王家の人都にアザがあるって言うそれすら、余所からきた私には事実なのかわからない。王家の人都一列に並べて『ほら全員アザが』って言われても同じ」

「無礼な……！」

思わずと言つた風に近衛騎士団長が口を挟んだが、彼女はちらりとそちらへ流し目を送つた。

「だつて、お互困るでしょ。もしも王様の偽物が現れて、『余が本物の王様である、ほらアザもある、余の妻になれ』って言われて、私がそれ信じてそいつの子ども妊娠しちゃつたりどつするのよ。お家騒動もいいところじゃないの」

団長が詰まるところを、余は初めて見た。

「まあ、窓からの景色を見る限り、さすがにここが王城なんだろうつて言つるのは信じます。すうすぎるもん、こここの建物群。あとは、あなたよ」

確かに、余は凡庸ゆえ、一日で王と分かるほどの威厳をまとつているとは思わないが……人間より建物を先に信じるか。

「どうしようと？」

興味深く思つて尋ねると、

「ここが王城であるという前提で、だけど、きっと王族専用の隠し通路とかあるんじゃない？ それがあなたが知つていて、教えてくれたら、信じられるわ」

彼女は挑戦的に余を見た。

「私が王族の一員になるなら、教えてもかまわないでしょ？」

聖堂に連れて行き、祭壇の裏の隠し通路を教えると、彼女はようやく納得したようだつた。

「本当に王様なのね。じゃ、よろしくお願ひします」

彼女はその時になつてやつと表情を和らげ、初めて笑顔を見せた。この女性は、美しい妃になるだらう、と思つた。

しかし同時に、余は少しほんの少しだが、落胆していた。先代国王の妃の座を争つていた、女たちのことが頭をよぎる。結局、彼女も、余が国王だからこそ、保護と引き換えにこうして打算で結婚するのか。

こちらが一方的に召喚したにも関わらず、余は勝手に夢を見ていたのかもしれない。

余のためだけに召喚され、余だけを見てくれる女性を。

椅子を回し、窓の外を眺めた。彼女が一目で城と信じた、いくつもの尖塔を抱えた白い王城、それに付属する建物や庭園が、どこまでも広がる。

そう、余と妃は、本当の意味で心が通つてていたわけではなかつたのだ。

彼女が余に一言の相談もなく帰つてしまつたのだとしても、責められるものではない。

「シーゼ……」

余は、彼女のいぢからでの名を、静かにつぶやいた。

### 3 王妃様の黒歴史

はー、情けないけど何だか懐かしいよ、この逃亡生活。

私はせつせとオールで舟を漕いでいた。

城を脱出した後、いつたん城下街に出た私は、貸し馬屋のおっさんを叩き起こして馬を一頭借りるという目立つ行動を取つた。そして馬のお尻をひっぱたいて街道に放し（ごめん）、逃げたように見せかけておいてから、川に出て小舟で城を離れたのだ。

即座に多方面に追手がかかるようなことはないだろうと踏んでの行動だつたけど、当たりだつたかな？ だって王妃が元の世界に帰つたつて見せかけたいなら、あまり大騒ぎにはできないもんね。犯罪者を追いかけるのはわけが違う。

いやーしかし、王妃が手こぎボート漕いで逃げるなんて、きっと誰も思わないだろうなー。

そう……一年前に日本からハーヴェーステス王国に囚還されたときも、私はやっぱり逃亡している真つ最中だったのよね。

私は日本での生活を思い返した。

生まれてすぐに母方の祖母に預けられた私は、両親は死んだものと思いこんで育つた。ところが十六の年、祖母がこの世を去る時に、とんでもない出生の秘密を言い遺したのだ。

私の父は大物政治家で、母は有名女優。私は、隠し子なのだと。自分は両親の若いころの過ちでてきて、そして捨てられた子だったのだ。それは、思春期の少女には重すぎる事実だった。

祖母の死後、寂しさも相まって私は非行に走った。煙草に酒は当たり前、男女問わず知り合いの家を転々とし、夜の街をフラフランしては補導される。

当の両親はどうしてるかって？ 毎日テレビで見かけてたから、生きてるのは知つてたけどね。

「ああ、今日も元気に汚職つてるな」「ああ、今度はお色気系の新境地開拓したのねオメデトウ」って、まあそんな感じ？

もしも今、自分が子どもだと名乗り出ても、父は党首選の真っ集中で足の引っ張り合いに利用されるだけだろうし、母は若いころのスキヤンダルなんか封印したいに決まってる。

はいはい、もう勝手にやつてちょうどいい。むしろ表舞台から姿を消すような何かをやらかしてくれないかな、そうすれば私みたいな隠し子なんか、世間的にどうでもよくなるし。

そんな風に荒んでいた私が、からつじて犯罪にだけは手を出さなかつたのは、祖母の「親はどうあれ、あんたは何も悪くないんだから、自分を貶めちゃいけないよ」という遺言が胸にあつたからだ。

おばあちゃん、大好きだったおばあちゃん。

でもね、一つ突っ込ませてもらうなら、私が静かな人生を送れるよ！ つけて『静子』って名前をつけてくれたけど、そりゃ無理だわ！

ある日、夜の街で酔い潰れた私は警察に保護された。その時に優しく諭してくれた警察官にほだされ、私は涙ながらに自分の素性をしゃべってしまった。

そしてその警察官は、うつかりだかわざとだか知らないけれど、雑誌記者に私のプライバシーを漏らしやがった、らしい。

翌朝警察署を出たところを、記者につかまりそうになつたから。

警察官でさえ信用できなくなつた私は、もうグレてる場合ではなくつた。このまま身を落としたところをフラ デーされて黒歴史

が暴露されたら、私みたいな小娘一人、簡単に社会的に抹殺されちゃうじゃないの。

高校だけは友人の助けもあってどうにか卒業したけれど、それは同時に私のギリギリな逃亡生活の幕開けでもあった。

名を変え仕事を転々として、数年の月日が流れた。

ある日の明け方、私は疲れた身体を引きずつてアパートへの道を歩いていた。その頃は深夜のオーニギリ工場で働いていたので、帰りはいつもそんな時間。

何でこの仕事を選んだかつて、世間の人と違う時間帯に行動できて、さらに食品関係は仕事中に帽子とマスク着用だから顔が隠せるじゃない？ 他人に顔の印象を残したくなかったのよね。

アパートが見えたあたりで、私はいつもの癖で、あたりにさつと目を走らせた。

そして、向かいの公園の植え込みに、首からカメラをぶら下げた人影があることに気づいた。

さりげなく一本手前の道を折れる。ちつ、とうとう家がバレたか。

こんな時間じゃ知り合いの家に転がり込むわけにも行かないし、ひとまず漫喫かファミレスにでも……と思いながら、尾行を警戒して工事現場の中を突っ切ったのがまずかった。地下駐車場か何かのための空間を掘っていたのだろう、大きな穴の上に足場が組んであるだけの不安定な場所に踏み込んでしまったのだ。

いきなり足下がぐらりと傾いだと思ったら、奇妙な浮遊感があつて

次の瞬間には、いきなり足が床についてずつこけそうになつた。

ほらアレよ、ぼーっと階段を降りていて、てっきりもう一段ある

と思つて足を降ろしたらもう床だつたつていう、あの時みたいな感じ。  
じ。

おかしいな、もつと落ちそつた感じだったのに。

そこは天井のめちゃくちゃ高いガラス張りの建物の中で、私は薄暗い中、ぼんやりとピンク色に光る不思議な文様の描かれた円の上に立つていた。

目の前には四人の人間がいて、そのうち三人は私を見た瞬間、一歩下がつて恭しく頭を垂れた。

何だか全員、服装がおかしい。テーマパークの従業員みたい。

そして一人残つた、一番立派な身なりだけど無表情な男が、ハツと我に返つたようにこう言つたのだ。

「あー……なんだつたかな」

おい。

「ごほん……異世界からの花嫁よ、よくぞ我がハ  
「悪いけど、急いでるから簡潔に。あなた誰」

「……余はハーヴェステス国王、フェザリオン・ハーヴェス。そなたは余の花嫁となるべく、今この場に呼び寄せら

「話、長くなりそうね。聞いてあげるから、ちょっと匿つてくれない? こんな広々とした場所じゃまずいんだわ、私

私はハラハラしながらあたりを見回した。建物がガラス張りじや丸見えじやないの、あいつ追いかけて来てないでしょ? うね。

そう、私はまだ自分が工事現場付近にいると思つていたのだ。暗いし建物あるし空が見えてるし。

フェザなんとかという男は、女がうらやましがりそうな大きな瞳を瞬かせた。いまいち頼りにはならなさそうだけど、いい男の部類

には違いない。

「追われてあるのか」

そう聞かれ、犯罪者だと思われたくないで、私は当たらずといえども遠からずな理由を付けた。

「変な男につきまとわれててね」

「それなら、心配ない。そやつは追って来れぬ」

彼は、カツラなのか何なのか、白銀の髪をさらりと揺らして口の端を少し上げた。

「そなたは、別の世界に逃亡したのだからな」

正直、変なのに関わっちゃったな、と思つた。

思い出に浸りながら機械的にオールを漕いでいると、やがて朝陽が昇つて朝もやが晴れ、前方の川べりに町が見えた。

さて、これからどうしよう。フェザリオン フェザーは今、新しくできた港の開港式典に出るために海沿いの町に出張していて、今日城に戻るはずだ。帰つてくるところをどこかでどうにか捕まえて、一緒に戻れば……。

「うん、悪いけどフェザーはあてにならない。実質、お城で一番偉いのは王太后様（つまり先代王妃ね）で、王様であるうちの夫ではないっていうあたりがすでに情けない。」

そういえば、祭司長のグレッドは王太后様のお気に入りなのよね

……思い出したらまたムカついてきたので、それは置いといて。

いくら王妃だとはいえ、私の立場なんか部屋の隅のホコリみたいなものだ。何で日本に強制送還されることになったのかわからないことは、城に戻つてもまたそのうち今回のよつに掃いて捨てられるだけだろう。今回のこと訴えてもグレッドはびくせしらを切る

だろうし、また産後ウツだなんだって言われて病氣扱いされたら  
まったくもんじやない。

生まれたばかりの可愛い息子、ワインガリオンを思い浮かべる。  
フューザーにそつくりだと思うんだけど、フューザーは田つきが私に  
そつくりだと言っていた。時々睨まれるって。

息子に会えないのは辛いけど、王太后様が優秀な乳母をつけてく  
れだし、再会の時まであの子が大事にしてもらえるのは間違いない  
だろう。

親子の明るい未来のためにも、今は雌伏の時。まずは今後の対策  
を練らないとなき不得、私一人では心許ない。

こんな時に、たった二年前に異世界からやつてきた私に、頼れる  
人なんかいるわけがないよ……。

……なーんて。いないこともないんだな！ これがな！

#### 4 名誉の負傷

季節の変わり目になると、左の膝が痛む。

いつもの飲み屋の、いつもの席にどっかりと座り込み、俺は膝を伸ばしてさすりながらいつも酒を注文した。

狭い店内の喧騒と人いきれの中、酔いが回つてくると脳裏に浮かぶのは、かつて仕えていた主 ハーヴェステス国王妃、麗しきシーザ様の黒い瞳。

怪我で退役した今でも、お守りしたいと願うのはシーザ様ただ一人だ。

異世界から女性が召喚されたという発表があつた翌日、俺はその女性専属の警護職に着くことになった。

たぶん、俺がそれほど職務に熱心でないから、選ばれたのだろう。異世界人の女性は、世継ぎを生む大事な身体ではある。しかし、彼女はこの世界に降つてわいた、良い意味でも悪い意味でも唯一の存在。その身にさまざまな職務や因縁を背負つ王太后や国王とは、警護の意味合いが違う。そういうことだ。

女性はまだ婚儀を上げていないので、王妃ではなく仮に「栄妃」と呼ばれている。国を栄えさせる存在という意味だろう。本来の名ももちろんあるのだろうが、何故なのか本人が言いたがらないと聞いた。

その栄妃の真新しい居間に、着任のあいさつに赴いた。黒髪黒目の栄妃は俺を見ると、新芽のような淡い緑のドレスの裾を気にしながら立ち上がった。着慣れないのだろう。

「御身をお守りさせていただく栄誉を賜りました、メイラー・セリ

クスと申します」

型通りの言葉を述べて膝をつき、騎士の礼を取つて、王妃の手を額に戴く。ひんやりとした細い指。

反応がないので、そのままの姿勢で戸惑つていると、横から女官長が声をかけた。

「栄妃様。栄妃様？……固まっておいでだわ。栄妃様！」

それを聞いてうつかり顔を上げると、栄妃は頬を夜明けの雲のような薄紅色に染め、口をパクパクさせていた。

そして言つた。

「王様や祭司長の上から目線より、ひざまづく騎士の下から目線つて、破壊力デカつ！」

瞬間、周りの景色が消えて、彼女だけしか見えなくなつた。異世界に召喚されて堂々としているのに、このような小さなことで恥じらつてゐる。強く、そして纖細な、この女性。騎士になつて初めて、『心からの忠誠』という言葉の意味を知つたその日から、俺は仕事にも訓練にも精を出すようになつた。

彼女はとにかく色々と規格外な言動の女性なのだが、昨日のことのように思い出せる印象的な出来事が一つある。

婚儀も間近に迫つたその日は、王城に宝石商がやってきていた。栄妃は国王とともに商人に会い、卓の黒い布の上に広げられた宝石類を眺めている。自ら、「自分の身を飾るものは自分で選びたい」とおつしやつたのだ。

普段あまり贅沢なことを好まれない妃なので、宝石を見たいとおつしやつた時は意外だった。今も、それほど日の前の輝きに熱中しているようには見えないのだが……。

「気に入ったものはあつたか」

国王が隣の栄妃に声をかけ、商人が上品な微笑みを浮かべて、一

つの箱を差し出した。

「こちらはいかがでしょう。隣国から取り寄せた、大変珍しい一点ものの首飾りでござります。女性の頂点に立たれる方でいらっしゃる栄妃様に、ふさわしいかと存じます」

俺もちらりと目を走らせた。

あの馬鹿馬鹿しいほどでかいのが宝石か。ふん、芋か卵の間違いじゃないのか。

しかし彼女は、その首飾りに関しては何も言わず、ちよつと首をかしげてこう尋ねた。

「あなたはこの後、城の他の女性たち向けにも商いをするんでしょう？」

かつぶくのいい商人は、目を瞬かせた。

「はい。午後に、応接室の一室をお借りして、店を開かせていただくなっています」

「侍女や女官や、街の女性たちは、どんな宝飾品をつけるの？ 良かつたら、見せてもらえないかしら」

なぜそのようなことを尋ねるのか、その場の人間はみな思ったことだろうが、商人は快く傍らの箱を引き寄せて卓の上に載せた。開くと、細い銀の鎖に小さな宝石が三つ、等間隔で揺れている首飾りがいくつか入っていた。

「こちらはかなり以前から、街の女性に人気ですね。この国で多く産出される石ですので、本物でありながら値段もそう張りません」

「ふーん……なら私、これが欲しいな」

国王と商人が、同時に栄妃を見る。俺もつい、そちらへ目を走らせた。洒落た首飾りではあるが、とても彼女の胸元を飾るにふさわしいとは思えない。

栄妃は、星の瞬く夜空のような瞳で国王を見つめながら、ふと眼を伏せた。

「さっきの一点物も素敵だつたけど、何だか寂しくて」

「寂しい？」

「私は異世界から来た人間……皆さんは優しく私を受け入れてくれたけど、黒髪黒目の中は一人だけ。そんな私が、一つしかない宝飾品をつけても、寂しさが増すだけのような気がして……。できれば、この国の大勢の女性たちと同じものを身につけて、少しでもこの国の一員になつたような気持ちを味わえたらな、つて」

俺はぐつと下唇を噛んだ。

なんと……なんと健気なお方なのだ！

商人も思わず目を潤ませている。

「栄妃様……そのようなお気持ちでいらしたとは」「けれど恐れながら、やはりお呑しものとの兼ね合いもござりますし」

侍女が口を挟む。もつともな意見かもしれないが、少しは空氣を読め。

国王がわざかに栄妃の方に身体の向きを変えながら、商人に言った。

「それで寂しさが和らぐのなら、余は妃の意見を尊重してやりたいと思うが……その方の意見はどうか」

「は」

商人は少し考え、

「それでは、お望みのこの首飾りを、いくつか重ねてつけた形に見えるものをお造りるのはいかがでしょうか。それなら、国の女性たちと同じものをつけられるのと同時に、お呑しものと比較しても見劣りしないものを」用意できると存じます」

栄妃は嬉しそうに、国王と商人の顔を見比べた。

「そうしてもらえた嬉しいな

「なら、そうするがよい」

「ありがとう…」

この逸話はたちまち知れ渡り、男性からは同情を、女性からは親近感を呼んだ。さらに国王との仲睦まじさも表す結果となり、栄妃の人気はいやがおうにも高まつたのだ。

そんな女性をお守りできることが、俺は誇らしくてならなかつた。しかしまさかこんなにも早く、俺がその役目を手放さなくてはならない日が来るとは……。

あれは、婚儀が行われて栄妃が名実ともに「王妃」となり、その御身にお子を宿して体調が安定した、そんな頃。

城下町の劇場での観劇にお供したとき、異世界から召喚された者を悪魔だと狂信的に信じ込んだ男が、給仕を装い貴賓席に侵入した。俺は、王妃に刃物で襲いかかった男ともみ合いになつた末、男とともに貴賓席から階下の客席へ転落。王妃の悲鳴が意識の彼方へ遠のく中、足のすさまじい痛みとともに気絶した。

その時以来、俺は左足を少し引きずつて歩かなくてはならなくなつた。膝の痛みは、その時に王妃を守つたといつ誇らしき勲章。しかし、後遺症が残つた足では、主を万全の状態でお守りすることはできない。俺は断腸の思いで、故郷へ帰つて予備役につくことを受け入れた。

## 5 女王じゃなくて王妃だから

役目を退く報告で王妃の居間を訪れたとき、王妃は俺の手を取りて泣いて下さった。その涙は、どんな宝石よりも、どんな星よりも、美しく俺の心に残った。

「いつか、あなたの故郷に遊びに、じゃなかつた、視察か何かで行ってみたい。その時はきっと会いましょうね」

泣き笑いの顔の王妃に、俺は涙をこらえて頭を垂れた。

「この足がきっかけで王妃様をお招きできるなら、故郷の者は皆、私の負傷を名誉に思うことでしょう。その時は、この足でもお役に立てるところをお見せしとづげざいます」

「ええ。あなたは私の一番の騎士だもの、きっとまた私を助けてくれるわね」

顔を上げたとき、俺は確かに後光を見た。

王妃は、俺の女神。

その時の言葉を励みに、故郷の警備隊の顧問のよつな仕事をして日々を送った。足は朝晩や疲れた時に痛むくらいで、杖も必要ない程度の症状だったから、この程度の仕事など軽くこなせると思っていた。

しかし、かつての仕事との大小の差が日につき、喪失感が心の奥にだんだん重く居座るようになり。

いつしか、酒の量が増えていた。不良騎士に逆戻りか……。

閉店時間になつて仕方なく店を出ると、ゆっくり歩いて自宅に向かう。石畳の道はすでに暗闇に沈み、人通りもほとんどない。

この街は俺の故郷だが、俺は実家には戻らず、職場に近い平屋の

一戸建てに住んでいた。扉の鍵を回して開けたところ、後ろから鈴の鳴るような声で話しかけられた。

「メイラー？」

振り向くと、若い女が立っていた。頭にかぶつた手巾の下から、白い髪のお下げが胸元に垂れている。瞳は暗くてよく見えないが、かなり濃い色。

そしてその顔は、俺の心の女神にそっくりだった。

「シーザさま……」

俺はややられつの回らない声でつぶやくと、そっと女の手を取つた。女はされるがままで、にこりと微笑んで言った。

「中に入れてくれる？」

その時の俺は、感情を取り違えていたとしか言いようがない。

敬愛する王妃。彼女のそばにいたいという、狂おしいほどの気持ち。そんな彼女にそっくりの女が、家に入れてくれと言つ。

俺は女の手を引くと、抱き寄せながら家の中に引っ張り込んだ。

「うわ、あれ？ ま、待ちなさいよコラ」  
唇を奪おうとする、女は顔を振つて避け、ついでにペッシュと俺の額を叩いた。

「私はこういう展開もアリだけど、そっち的こまちんじやないの」「レ。私はあなたの主人でしうが」

「いいね、そういう女王様系の設定……あんた俺の好みだな」  
さわやきながら、壁に押しつける。首筋を吸いながら、手を性急に動かして服の隙間から素肌を探す。

「ちょ……ま、まあ、女王様プレイ好きなら私なんかおあつらえ向きかもね……って、女王と王妃って何か違わない？」

「細かいことはいいだろ？」

もつれるように敷物の上に倒れ込む。その拍子に、白いものが跳ねとんだ。

敷物の上に落ちたのは、女が頭にかぶっていた手巾と、それにくつついた白い三つ編み……つけ毛？

そして布の下から現れたのは、つややかな黒髪だった。

俺は彼女の上から反射的にびすさると、壁際まで下がつて平伏した。

「申つし訳」や「ませんっ！……いかよにも御処分を！」

王妃は肘をついて上半身を起こし　なぜ王妃がここにいる？

俺を見て肩をすくめた。

「もう終わり？　ちえー、ちょっとときめいやったのに」

「その気！？」

「なんかいい雰囲気だつたから、こうなつたらイタシカタないっていうか、イタすしかないっていつか

「なりません王妃様！」

「声が大きいよつ。シーゼつて呼んでいいからー。」

「そ、そんな、恐れ多い……！」

「気に入つて名前だから、そつちで呼んでよ。フュザーにこの名前もらった時は、シーツとガーゼ足したみたいな変な名前だなあと思つたけど、今は愛着わいてるのよね」

「へ、陛下……」存知でしたかこの感想。

イルフレートが伝えてきた意味を受け、俺の脳裏で白い布がヒラヒラとはためいた。

「と言つわけで、私は城から逃亡せざるを得なかつたつてわけ」

簡素な机でパンとチーズを喜んで召し上がっているシーザ様に、俺は質問させていただく。

「王ひ……シーザ様、ここまでどうやっておこでになつたのです」

王城からここまでは、移動し続けて一日半はかかる。

「小舟と、貸し馬。あ、地図はだいたい頭に入つてる」

「代金は？」

「少しは持つてたし、足りなくなつたらこれがあるし」

シーザ様は肩掛け鞄を引き寄せる、中から首飾りを取り出した。あの、俺が彼女を守りたいと強烈に思つかけとなつた首飾りだ。しかし、石が一つ二つなくなつてゐる。

シーザ様は口の中のものを飲み込んで、機嫌良く言つた。

「一点物より、庶民的なものの方が換金しやすいと思つたんだけど、正解だつたわ。足つかないしね」

俺の中で何かが、ガラガラと音を立てて崩れ落ちて行つた。

「…………し、しかし、まさかグレッド様がそんな」

「私はあつたことをそのまま言つただけよ」「よ

重くため息をつくシーザ様に、俺はあわてて言つ。

「いえ、疑つたわけでは。驚いただけです。とにかくそういうふうに」と

でしたら、むさ苦しいところですがひとまずこの家に一晩滞在下さい。数日中に、もつとくつろげる場所をご用意いたしますので。後のことはおいおい

すると、シーザ様は弱弱しく微笑んだ。

「ありがとう……良かつた、メイラーが城の外にいてくれて」

ついさつと崩れたものが急速に修復され、俺は舞い上がった。

シーザ様が、俺を頼りにして下さつてゐる！

表情筋がニヤニヤ笑いの形に反応するのを必死に押さえ込んでピクピクさせながら、俺はシーザ様の椅子のそばで左膝をついて（ちよつと痛い）頭を垂れた。

「もつたいなきお言葉。しかし、この足でお役に立てますかどうか

「必要なのは兵力じゃないから……」

その言葉に、思わず田頭が熱くなる。こんな俺でも、シーザ様のお役に立てることがあるらしい。

俺はパッと顔を上げてそのお手を取ろうとして……動きを止めた。

シーザ様は、机に突っ伏しておやすみになっていた。

あ、弱弱しく見えたのは眠かったからか……って、え？　俺の目の前で？　安心？　無防備？　って主を机で眠らせるとかどうなんだ？　俺の寝台へ？　ややや役得っ……！？

俺は細心の注意を払ってシーザ様を抱き上げた。ひ、膝に来る……が、俺の胸元に顔が寄せられて長いまつげが……柔らかくて良い香りが……。

そつと寝台に降ろすと毛布をかけ、俺は家の外に飛び出すると、街の共用井戸で冷たい水を汲んで頭にぶっかけたのだった。

## 5 女王じゃなくて王妃だから（後書き）

明日は王城から中継で、国王陛下に結婚前後の思い出を語つて頂く予定です。それでは今夜はこの辺で。

## 6 長き黒髪の花嫁（前書き）

お気に入り登録1111件突破ありがとうございます！

## 6 長き黒髪の花嫁

シーゼが『帰った』と聞かされた、その日の夜。

余はたつた一人、寝台に起き上がりて足を降ろしたまま窓から外を眺めていた。眠れなかつたのだ。

この寝台は、こんなに広かつただろうか。結婚して以来、ここにシーゼがいなかつた夜などほとんどないからな……。

思えば、シーゼは最初からそういうことに積極的だつた。王妃になるのを承諾したと思つたら、もうその口に

「じゃ、今夜フェザーの部屋に行くわ」

と言い出して、侍女たちの度肝を抜いた。

寝室を共にするのは結婚式を挙げてからでよい、と言つて、「えー、だつて世継ぎを生むために呼ばれたんだから、式なんか待つてないでさつさと仕込みを開始してもいいじゃない」と言い放つて、侍女たちの魂も抜いた。

こちらの世界の貞操観念も考えてくれ、と言つたら

「こりゃ失礼」

とようやく引き下がつてくれたが 何を焦つているのか。

そしてそれがきっかけだつたのか、彼女はこちらの世界のことを学んでこちらの人間らしく、そして王妃らしく振る舞うことを中心始めた。

と言つても、彼女がやらなくてはならないことはそう多くない。こいつては何だが、異世界からの王妃は世継ぎ以外の役割は大して期待されていないのが実情だ。彼女もそれは、王妃教育の中で徐々に感じ取つていつたらしい。

「えーと、フェザーには悪いんだけど、このお城で一番偉いのって、王太后様なの？」

午後のお茶の時間に一人きりになつた時、聞きにくい（はずの）ことをスパツと聞いて来た。

まあ、事実なので隠すこともない。余は説明した。

「王太后のレイザ様は、先代の父王とともにこの国の発展に偉大な貢献をなさつた人物だ。夫婦と言つより、戦友だった。余よりも明らかに格が上だ」

「ふーん。……フェザーは何だか、王様業がつまらなさそつね。嫌なの？」

「嫌ではないが、他に適した人間が身近にいるわけだからな。余でなくともいいのだ、という思いはある。国王失格かな」

苦笑すると、彼女はまたもやスパツと言つた。

「失格なんて思うことないよ、王家に生まれたのはフェザーが選んだわけじゃないんだから。あなたは何も悪くないでしょ」

「いや……」この国では、子どもは親を選んで生まれてくると言われておるのだ

そう言つと、彼女は少し顔をしかめた。

「そうなの？」

「そうだ。だから、この場所に生まれた意味を見つけなくては、と両親からよく言われたものだ」

余は、故人である父王と実の母である第一側妃を想い浮かべた。厳しかつたが、優しい両親だった。

彼女は少し沈黙してから、こう言つた。

「ふうん……。いいわね、親にそつやつて励ましてもらえたら。私の生まれにも意味があるのかな？ あんな両親の間に生まれた意味が？」

「…………」

余はこの時にはもう、彼女が著名な両親の元に生まれた隠し子で

あることだけは聞いていたが、詳しいことは聞きかねていた。どれだけ不自由な暮らしを強いられていたのか。

しかし彼女は、旺盛な食欲で菓菓子をつまみながら、さらりと言つた。

「まあ少なくとも私は、あなたがこの国の王様で良かつたわよ」

初めて出会つたころよりも、ずいぶん表情が柔らかくなつた彼女を見て、余は思った。

彼女が余との結婚を喜んで今ここで微笑んでいる、そのことが両親がきっかけだと言つなら、彼らに感謝してもいいのかもしない、と。

召喚から一ヶ月後、結婚式と王妃のお披露目は滞りなく行われた。王城の謁見の間で、余の手から妃の頭に華奢な王妃冠を載せる。顔を上げた妃の手を引いて壇上に促すと、妃はすらりと余の隣に立つて祝福する人々の方を向いてみせた。

もともと整つた顔をしているとは思つていたが、化粧をした妃は歴代の王妃に引けを取らぬほど美しかつた。初めはドレスの着こなしにも苦労していたようなのに、今ではすっかり堂に入つたものだ。身についた、というよりも、それらしく見せる演技が上手いのだ。

白地に金糸の刺繡の入つたドレスは腰の切り替えがなく、彼女の身体に沿つていて、女性らしい腰の線を際立たせながら足元に向けて広がつている。

そして黒髪はわざと目立つように、耳のあたりに少し生花とイルフレートをつけているだけで、後は背中に流れ落ちるままにしてあつた。異世界人の象徴である色を目立たせるための、祭司長の指示だ。その髪も、侍女たちの苦労の賜物か、美しく艶やかに光つている。

髪を見つめていたのに気づいたのか、彼女は拍手を送つて来る人

々の方を向いて微笑んだまま、余だけに聞こえるように言った。

「髪を伸ばしてたのが、こんなところで重要なとは思つてなかつたわ、さすがに」

「何か意味があつて、伸ばしていたのか？」

余も人々の方を向いたまま尋ねると、彼女は答えた。

「うん。 いざ逃げるつて時にバツサリ切れれば、印象が変わつて見つかりにくいと思つて」

また逃亡の話か、と余が苦笑したのに気づいて、彼女は言った。  
「ああごめん、ただ、いつでも逃げられる状態にしておかないと落ち着かないからそうしてただけ。 身に沁みついちゃつてね。もう逃げたりしないよ」

「そう願いたいものだな」

まさか新郎新婦がこんな会話を交わしているなどとは、誰も思わないであろう。

余は内心ため息をつきながら、彼女と腕を組んで大広間へと移動した。

## 7 後朝の贈り物（前書き）

お気に入り登録1234件突破、総合評価3333ポイント突破ありがとうございます！（作品にちなんで数字にこだわってみた（笑））

祝宴が始まると、招待客が次々と我々夫婦の元にあいさつに訪れた。しかし、若い女たちは明らかに妃を踏みしておらず、余に自分を印象付けておこうという言動が鼻につく。もし余と妃が不仲になつたら側妃に……ということだろうか。

妃はわかつてゐるのかないのか、終始微笑みを絶やさなかつた。たくましい女だ。

その夜、夫婦の寝室となつた部屋で、王妃となつた彼女は寝台に腰かけて余を待つていた。

彼女はごく普通の夜着姿で、少々警戒していた余は内心胸をなでおろす。こちらは未だに、妃との距離感を測りかねていたからだ。しかし彼女は上目遣いで一言、

「『疲れただろうから今日は休め』とか言わないよね……？」

と先手を打つてきた。

む……強引に迫つて来られるよりも、この迫り方は逆に惹きつけられるような……。

「そやは言わないが……全身全霊で取り組まなくとも、子どもはできる時はできる、そういうものではないのか？ 何をそんなに急いでおるのだ」

彼女の隣に腰かけながら、気になつていてることを聞いてみると、妃は言った。

「だつて、心配なの。本当に子どもができるかどうか

ああ、そいか……と余は彼女の気持ちを想像した。

子どもができなければ自分の居場所がなくなる、やつ思つてゐるのだろうか？

しかし彼女は、心配そうにこゝへ続けた。

「海外旅行に行くと、日本の電化製品が電圧の違いで使えなかつたりするんだって。異世界人同士の私とあなただって、そういうアレで妊娠しにくいとかあるかもしけないでしょ、変圧器があるわけじゃないんだしさ。うわ、プラグ突っ込んだとたんに故障して使いものにならなくなつたらどうしよう」

「ふらぐ、つっこむ？」

イルフレートが伝えたあいまいな意味を、余はかろうじて咀嚼し飲み込んだ。ある意味、本当に妃を理解しようと思つたら、イルフレートでは追いつかぬ。

「…………そなたの考え方が独特なのはよくわかつた。しかし、過去に召喚された王妃はみな、無事に子を授かつてゐる」

「ならないけど」

さらりと答えた彼女は、少し沈黙した後で言つた。

「ねえ……例えば王妃が、この城から逃げ出さなきゃならなにようなことつて、あるのかな？」

余は一瞬、言葉を失つた。

逃げる可能性を考えることが身にしみついていると言つていたが、彼女は結婚式を挙げた今も、余や周りの人間、それに現在の生活自体を信じていないのだ。召喚されたばかりの頃の、人間より城を先に信じた彼女を思い出す。

お互の必要性があつての結婚だが、余と彼女は心の中に、人間を信じられないという似た部分を持つてているのだ。

そんな男女が身を寄せ合つ 意外と、似合いの夫婦なのかもしれぬ。

「…………そのような不吉なことを申すな」

余は苦笑しながら、彼女の髪を軽く撫でた。早く彼女には安心してほしい、と思つた。

「不吉?」

「王妃が逃げるのは、他国から攻められてこの城が陥りうるであろう?」

妃は肩をすくめた。

「それもそうか」

わざかな沈黙。

余の瞳をじっと見つめていた妃が、唇を寄せて來た。軽く触れ合う。

妃はいつたん顔を離して、微笑んだ。

「こっちって、結婚式に誓いのキスはしないのね。何だか、やつと ! つて感じ……」

それからもう一度、今度は深く。さうして一度。腕を回すと、女性らしい曲線を持つた身体がだんだん熱を帯びて、余の体温と同じであつて行くのがわかる。

「そなたの名前は、結局教えてはくれぬのか

耳元でささやくと、

「隠すつもりはないんだけどね。本当は、シズコって書いつの」

彼女も耳元でささやき返してきた。

「でも私、向こうでも本当の名前は名乗らないで、自分で勝手につけた名前を使ってたんだ。時々えたりもしてたし。今はもうあなたが私の夫なんだし、こひれでの名前はあなたがつけてくれない?」

妃に、余が名前を……。

二人の距離が、一気に縮まつた氣がした。直接肌と肌を触れ合わせながら寝台に横たわると、先ほど妃の言つた「やつと」という感

覚が、余の中にもようやく湧きあがってきた。

「……そなたをもう少し知つてから、名前を考えることじよひ」

言つと、妃は濡れた瞳でこちらを見上げてくすくすと笑つた。

「じゃあ、私をじっくり教えてあげなくちゃね

翌朝、余は妃に「シーザ」という名前を贈つた。「シズコ」という発音から思いついたのだ。

「『シーザ』……？」

妃はかなりいぶかしげな表情をしている。ああ、きっと、イルフレートが翻訳できなかつたのだろう。

「古い言葉で『家』とか『居場所』という意味だ。そなたはここで居場所を得たのだから、と思ってな」

説明してやると、彼女は驚いた顔になつた。

「……今まで、いい人にも何人か会えて、私が見つかりそうになると『早く逃げる』って助けてくれたの。でも、『ここがお前の居場所だ』って言ってもらつたのは、初めてだわ」

そして、余の首に手を回して抱きついて来た。

「ありがとう、嬉しい……んつ」

「ん。い、いや、さすがにそろそろ寝室を出なくては」「だーもーつ、ここには盛り上がるところでしょうがー…?」

そうだ。居場所を得て、喜んでいたではないか。それなのに、『帰つた』……?

余は腕を組んで考え込んだ。そして、小さな疑問点に行き当つたつた。

彼女が帰るために必要だつた、帰還の陣。それを、祭司長はどのようにして開いたのだろうか。

魔方陣を開くには、相当量の魔力が必要なはずだが、現在それを用意することは可能だったのか……？

## 7 後朝の贈り物（後書き）

次話はこの世界の魔法について。王妃視点なのでざつくりいい加減にいつもの調子で語られると思います。

私は、夢を見ていた。  
お城で生活をし始めてしばらく経つて、フューザーと結婚して、ようやく私にもこれは現実なんだということがじわじわと実感できてきた、そんな頃の夢だ。

ある日、私はフューザーとの夕食の真っ最中に、いきなりフォーカを取り落として叫んでしまった。

「魔法！？」

「ぐほっ……ぢづいた、急に」  
むせるフューザーに、私は椅子から腰を浮かして言った。

「いや、今さらで悪いんだけど、異世界から人間を召喚できるってことは魔法があるってこと！？」

普段の生活には魔法の気配が全然ないもんだから、すっかり忘れてたよ！

「本当に今さらだな……一応、魔法はある」

フューザーは口元を拭きながらつづなずいた。そのテンションの低さにこいつも少し興奮をおさめながら、聞き返す。

「なに、『一応』って」

「建国時は魔法大国の名をほしにまことにしていたが、長の年月の間に血が薄れたのか、ほかの要因があるのか、とにかく現在では魔法は弱体化しているのだ」

「でも、召喚なんですか」ことができてるじゃないの。それにイルフレートだって

いろいろ聞いてみたところ、今ではこの世界の魔法っていうのは、例えて言うなら「スプーンなんて手で曲げられるじゃん」みたいなレベルなんだそうだ。ちょっとがっかり。

そして召喚魔法は、例えて言つなら「虫眼鏡で日光集めてまで目玉焼き作らなくても」みたいな、時間も手間もかかるかなり無理矢理感のあるシロモノなんだそうだ。

「九十九代目の国王妃を召喚した翌年に、もう百代目の国王妃を召喚しなくてはならなかつた時など、過労で倒れる魔法官が続出したと聞く……」

「痛ましげにつぶやくフェザーに、

「だからキリ番とかゾロ目にこだわるのやめよつよ

つつこむ私。まあ、じゃなきゃ、百一十三代つていう“連番国王妃”の私は召喚してもらえなかつたわけだけど。

「とにかく、魔法官っていう職業の人人がいるのね？」

「ああ。魔法の研究と保存、それに召喚などの技のため、魔力の蓄積などを行つている者たちだ」

「面白そう、会つてみたい！」

というわけでその翌日、私は魔法庁と呼ばれる場所に遊びに、じやなかつた、視察に行つた。

研究所みたいな場所なのかと思つてたら、意外にもそこはガラス張りの温室だつた。私が召喚された時に出現した聖堂、あれもガラス張りだつたな、と思つていたら、大理石でできた大聖堂を挟んで東側に召喚された時の聖堂（小聖堂）、西側に魔法庁、というつくりになつていて、それらの建物は続きになつていたのだ。ていうか、私ガラスガラス言つてるけど、本当は水晶みたいな貴重な石らしい。さーせん。

魔法庁の水晶の建物は、中央に天井を突き抜けて大きな木がそびえ立つていて、その木の根元に置かれた一枚板の大きなテーブルで、何人かの魔法官が仕事をしていた。書類仕事をする人もいれば、理科の実験みたいにフラスコみたいなものを作れこれしている人もいる。私はそこを、魔法庁の長官に案内してもらつた。

長官は、少しクリーム色がかつた長い白髪をアップにした、四交代前半くらいの女性。政治家みたいにきりりとした雰囲気で、私は一瞬テレビで見た自分の父親を連想して、ちょっとびり苦手意識を持つてしまつた。いかんいかん。

「魔法の力は自然界から少しづつ生まれていて、それを世界中からこの場所に集めています。この建物は、力を吸収しやすいように考えられて作られているのです」

長官は、魔法のない世界からきた私にもわかるようにかみ砕いて説明してくれた。そして、

「ここが、魔力を蓄えておく場所です」

と見せてくれたのが、建物中央にそびえる木の洞うるだつた。洞の中には、ぱつと見て砂時計の形をしたガラス（あ、水晶か）の大きな入れ物がはまりこんでいて、その中で何かがキラキラ漂いながら光っている。

「ここに溜まつた力を使って、召喚は行われたのですよ」

「へえ……何だか綺麗。イルフレートも、この力を使って作られたんですか？」

私の髪に、髪飾りの一部のよつにしてとまつてあるイルフレートを指さして聞くと、長官は赤紫色の瞳を細めながら答えてくれた。

「あれは少し違います。遺跡などから、古代の強い魔法が保存された状態で発見されることがあるのです。それと現在の技術を結びつけて、イルフレートなどの魔精靈を作り出しています」

「へええー。じゃあ、イルフレートってずいぶん希少な存在なんですか？」

すね

私は感心してお礼を言った。

「私のために使わせてくれて、ありがとうございます」

すると長官は、艶のあるほほえみを浮かべて言った。

「そんな、恐れ多い。王妃様を召喚する際は、予定していたより少ない魔力で召喚することができますので、私どもこそお礼申し上げます」

「そうなんですか？」

「これから引く力に、抵抗感があまりなかつたと……むしろこちらに来ようとする力を感じたと、祭司長が

ハハハハハ。笑つとけ。

私はいきなり覚醒すると、寝台の上に起き上がった。

一瞬自分がどこにいるのかわからなかつたけど、朝陽の差し込む殺風景な木造の部屋を見てすぐに思い出した。そう、退役した近衛騎士のメイラーの家にいるんだった。

もう一度、長官に説明してもらつたことを思い出しながら考える。私を召喚するために、まあ少なく済んだとはいえかなりの量の魔力を使ったわけよね。それなのに、残りの魔力で帰還の陣も開くことができたの？ 帰りたがつていない私を無理矢理帰すには、それくらいじゃ無理なんじゃ？ やっぱりあれは、帰還の陣じゃなかつたんじやなかろうか。

いやいや、でも召喚から一年経つてゐるんだから、それなりの魔力は溜まつてゐる……？

ダメだ、私は専門家じゃないからわからない。

「お田代ですか、シーザ様。ゆっくりお休みになれましたか」

気がついたら、メイラーが寝台のそばで膝をついていた。壁際の床に毛布が一枚置いてある……あそこで寝てくれたのかな。でも今はすでに動ける準備万端という感じで、さすがは元騎士だと思つ。

「おはよう、メイラー」

私は寝台から足を降ろして、彼に向かい合つてから尋ねた。

「ねえ、あなたはまだ私の騎士？」

「もちろんです。この忠誠、揺らいだことなどございません」

「良かつた。それじゃ、会いに行きたい人ができたから、付き合つて欲しいんだけど

「は？」

魔法にある程度詳しい人で、今会いに行ける人といったら、一人しか思いつかない。

私は枕元に置いてあつた、白いつけ毛を手にとつて言った。

「これをくれた人。この髪の、元の持ち主に会いに行きたいの」

メイラーは言った。

「人毛！？」

あ、なんか今ちょっと引かれたかも。

## 9 魔法官の見習い

ハーヴェステス王国に召喚されてから、乗馬の練習はかなりまじめにやつたので、妊娠するまでの数ヶ月でかなり乗りこなせるようになつた。だつてやつぱりこちらの主な移動手段だからね、何かあつた時に必要になるでしょ……って本当にそつちやつて残念だけ。

私はメイラーと纏くわいを並べて、馬を駆け足で走らせていた。このスピードならどうにか話ができる。街から街へと向かう道はレンガが敷かれて整備されていて、馬車がすれ違える程度の広さもあり走りやすかつた。

「このつけ毛は、アコルの髪で作ったの。アコルって覚えてる？」  
つけ毛つきの手巾をかぶつた私が聞くと、メイラーはやや長めの髪をなびかせながら　　彼の髪はほんのりオレンジ色がかつた白だ  
返事をした。

「覚えてます、有名でしたから。魔法庁で働いていた、魔法官見習いの少年ですよね」

「あ、やっぱり有名だったんだ、あの子」

私がメイラーに視線をやると、彼は何とも言えない表情をした。

「俺が言つのも何ですが、綺麗な少年でしたからね。侍女たちの噂の的でした」

「私も初めて会つた時は、女の子と間違えたんだ」  
私はその時のこと思い出した。

私が魔法に興味を示したので、魔法庁の長官が何日かに一度、王妃教育の一環でちょっとした講義をしてくれることになった。でも

さすがに長官さんだけあって基本的に忙しい人で、突然的な仕事で遅れることもあるし、来られないこともある。

それで長官が気を遣つてくれて、

「私より話しやすいこともありますでしょ」「  
と、そういう時の話しあ相手に助手をよこして貰うことになった。  
魔法官見習いとして修業中の子なんだって。」

十一、三歳くらいのその助手の子に初めて会つたとき、私はびっくりして声をかけるのも忘れてしまつた。だつて、まるで宗教画に出でくる天使みたいに綺麗な子なんだもん！

こちらの人はみんな白っぽい色の髪をしているけど、その子はほのかに青みがかつた白。綺麗にウエーブして、お尻の下あたりまで艶やかに流れ落ちている。瞳はアメジストみたいな透き通つた紫で、ぱっちり一重に天然のアイシャドウ。透けそうに白い肌はうつすらとピンクに染まり、ふつくらした唇は珊瑚色。

魔法庁の制服のシンプルな白のローブも似合つてるけど、ぜひともドレスアップしてほし！。あつ、め、メイド服なんかもイ、イイかも、つて息荒くして怪しいわ私。

「あ、ごめん、つい見とれちゃつて。よろしくお願ひしますね」

あわててあいさつすると、その子は本当に天使のように神秘的な微笑みを浮かべ、膝を軽く曲げた。

「アユルと申します。ハーヴの民に繁栄をもたらすお方のお役に立てるなんて、とても光栄です。何でもお申しつけください」

あれ、高いけど意外にもハスキーン声。地声なのかな？

「もしかして、風邪引いてる？ 無理しないでね」

そう言つてみると、アユルは困つたように微笑んだ。

「お耳汚しで申し訳ありません、声変わりの途中で」

「えつと、きつと言われ過ぎでうんざりかもしれないけど、アユル

つて男の子なの？」

「はい」

アコルはやはり慣れているのか、軽くうなずいた。

私はすぐにアコルと仲良くなつた。彼も長官のお許しを得て、ちよくちよく顔を出してくれるようになつた。

アコルとは、長官の講義の時よりもずっとだけた雰囲気で話ができる。テラスでお茶しながらのこともあるし、庭を歩きながらのこともあつた。

「アコルもそうだけど、魔法庁に勤務してる人たちって、みんな見事な長い髪をしてるよね」

聞いてみると、

「長い髪は、魔力を受け止めやすいんです。それして受け止めた魔力を、魔法官が体内でゅっくつと練つて、魔法庁の聖樹の器に蓄えていくんです」

と説明してくれた。

聖樹の器つて、あの木の洞にはまつてた砂時計みたいなやつか。

「それつて、誰でもできることじやないんじょ」

「あ……素質のあるなしあるみたいです」

控えめに応えるアコルに、私は感心して言つた。

「アコルは有望株つてことね。素質がないと、髪を伸ばしても何も変わらないの？」

「本人が意識できないだけで、力は宿つていると考えられていますね。だから、何か願い事のある人はよく髪を長く伸ばしていますよ、一般の人でも」

「ふーん。それにしても、本当に綺麗な髪」

アコルの髪を褒めると、彼は素直な笑顔を浮かべて言つた。

「王妃様の髪の方が、ずっと綺麗です」

彼はどうやら本気でそう思つてくれていて、少し頬を紅潮させて私の黒髪をじっと見つめている。

そしてストレートに言った。

「あの、触つてもいいですか」

……うーん、それはたぶん、まずいんじゃない？ かつての私なら全然構わないけど、一応今の私は王妃様で、それなりの対応を求める立場なんだよね。あ、ほら、侍女がたしなめるような目でこっちを見る。

「えっと、アユル」

私が言いかけると、彼は自分で気づいたらしかった。ハッとして一步下がり、頭を下げた。

「も、申し訳ありません。僕、すぐ思つてることをしゃべっちゃつて……いつも長官にも注意されているのに」

はは、じゃあいつもこんなこと言つちゃうんだ。そのうち天然の女たらしになつたりして。

「ううん、いいのいいの。あ、そつそつ、他にも聞きたいことがあってね」

私はすぐに話題を変えたのだけれど……。

10 星降る夜の密談（前書き）

裏切つてすみません（まーま）

結婚して三ヶ月ほど経った、ある夜のこと。フュザーが仕事が忙しくてちつとも寝室に姿を見せないので、私は一人で散歩に出かけることにした。寝室にディスプレイされた壺をずりして、その下から続く王族用の逃走経路を通れば、侍女やメイラーたちに気づかれずに聖堂の裏庭に行けるのだ。

裏庭に出ると、空には一面の星屑。けぶるような天の川は少し紫がかって、そのきらめきのほんの一部を地上に降らせている。花弁を閉じて眠る白い花や大理石でできた白い東屋が、幻想的にうっすら紫に染まっていた。

そうだ、私も居間の外の庭で何か育ててみたいな、日本ではそんなことできなかつたけど今ならできるし。

脳内でガーデニング計画を練りながら、東屋まで歩く。フュザーの居間から果実酒をちゅうまかしてきたので、あそこで星見酒としやれこもう。

「……おっと」

「あつ」

「なんと、東屋には先客がいた。

大理石のベンチの上で抱えていた膝を、あわてて降ろして立ち上がったのは、アユルだった。白の上下のパジャマ（？）姿の彼は、白い髪を星明かりに浮かびあがらせて、憂いを帯びた瞳で私を見ている。まるで一枚の絵のようだ。

「アユルじゃないの……どうしたの、こんな夜中に」

「王妃様こそ」

「ですよね」。

「まあここ座つて。アユルも飲む？ つて未成年か」

掲げた果実酒のボトルをあわてて降ろす。こちらはあまり飲酒に

は厳しくないようだけど、一応成年は十六歳だ。

アコルはくすりと笑って、先に座った私の隣に腰を下ろした。そして、ぽつりと言った。

「ちょっと、家にいづらへつて

孤児院出身の彼は、魔法庁の長官夫妻の住む公邸に居候している。捨て子だったので、両親の顔を知らないそうだ。私は「両親の顔を知っている捨て子」だけど、そんな共通点があることもあって、いつも彼のことは気にかけていた。

「何があつたの？ 良かつたら話してみて」

私はアコルの端正な横顔に話しかける。お姉さんに何でも言つてごらん？

「……いいんですか？」

許可を求めてくるところも可愛いな！ 少年の上田遣いつて凶器だな！

「もちろん」

力強くうなずいて見せると、アコルはちゅうと顔を上げて、ふう、と息をついた。

「長官の御主人が、長期出張先から戻られたんですね、今日」

「ふんふん」

長官の旦那さんは、国境警備を任せている騎士団の団長さん。単身赴任先から戻つて來たのね。

「お留守の間に色々あつたから、なんだか気まずくて」

色々って、何が？

「僕、年上の女の人が好きだし」

「ちょ？」

「長官も寂しかつたんだと思つんですけど」

あれ？

「やっぱり不倫は良くないですよね」

ま？

何だか天使に似つかわしくない単語が出てきた気がするんだけど  
つまりこの子つたら長官と！？

「そりや気まずいわ！」

仰天のあまり私は思わずつっこんだ。こっちの髪が白くなりそう  
だつつの ！

気つけを一杯やつてから、改めてアコルの話を聞く。

つまりあれよ、私の心配した通りになっちゃってたんだ。私に「  
髪に触つてもいいですか」って言つてきた、あの調子で長官に懷い  
ちゃつて、ついそんな雰囲気に……つていうね。

「どつ、どうしたいのアコルは……これからも魔法官見習いの修業  
は続くんでしょう？」

「そなんんですけど、それも考え方かなって」

アコルは悪びれたところなく言へ。「この子一体、どつちの方向に  
天然なの！？」

「僕、どつやら魔力要員としか思われてないみたいなんですよね  
「魔力要員？」

「イルフレートとかの魔法を使った技術を扱う仕事は、貴族出身の  
人たちの仕事。孤児の僕は、魔力を受け止めて器に注ぐだけ。長官  
とごちやじぢやしたまま、魔力を注ぐだけの仕事をずーっとやって  
いくのかと思うと、ちよつとな、って」

この子、意外と上昇志向の持ち主なのかも。

私はアコルの、相変わらず曇りのない瞳を見つめた。

それほど厳しくないとはい、一応『身分』というものが存在す  
るこの国で、自分の望んだ職業につける人は一握り。でもこの子は、  
自分はこの仕事をずっとやっていくだけでいいのか、って考へてる  
んだ。

アユルは笑つて付け加えた。

「それに、どこかに僕の外見だけじゃなくて中身を見てくれる女の人がいるかもしないですし！」

「ふつ、と噴き出してしまった私を見て、アユルが不思議そうに小首をかしげる。

「あはは、『めんね笑つたりして。泥沼不倫してる割に、恋に前向きでいいなと思つたの。うん、そういう風に色々考へてるなら、私は応援する』

するとアユルは、逆に心配そうに言つた。

「ありがとうございます……でも、王妃様はいかがなんですか？ 今ここにいらっしゃるつて、まさか王様と何か」

「ああ、ただベッドで待つてるだけっていうのも退屈だから、散歩に来ただけ。だつて最近ほつたらかしなんだもん、私のこと」

私は憤然と言つた。アルコールの勢いもあつたし、アユルはもう男女のアレコレを知つてゐるんだと思つたらつゝ口が滑つてしまつたのよ……だつて深夜テンションでこんな話できる人、他にいないんだもん。

「ありえないでしょ、三日もしてないんだよ新婚なのに。子作りする気あんのかしら」

「…………み、三日くらには許して差し上げて下さい」

「あ、そう？」

「まあ、フエザーも色々と考えてくれてるんだと思う。きっと、あまりガツガツしたら私が可哀想とか思つてるんじゃないかな」

「可哀想？」

「うん。世継ぎを生ませるために私を呪喚した割には、フエザーは私のこと、子を生むだけの存在にしないように気を遣つてくれてるみたい」

アユルは私をじつと見つめて、そしてまた天使の微笑みを浮かべ

た。白くも黒くもない、透明で素直な微笑み。

「素敵ですね。僕もそういう結婚相手を見つけたいです」

「ええっ、そう…？ なんか私とフェザーってすれ違つてる気がしない？」

「でも、今ごろ探してらっしゃるかも」

「これ幸いと一人でのんびり寝てるかもよ

「もしそうだつたらどうするんですか？」

「日本にはねアユル、『据え膳』っていう言葉があるの。当然いただくわ」

夜空にひそやかな二つの笑い声が広がった。

その数日後、私の部屋にやつて来たアユルを見て、私は仰天した。

「アユル……髪が！」

彼は、お尻まであつたあの見事なウェーブヘアを、あごの線でバツサリ切り落としていた。

彼はもう魔法庁の制服のローブすら着ていなくて、白のシャツに臙脂色のズボンという少年らしい格好で片膝をついた。

「ごあいさつ伺いました、王妃様。僕、魔法庁を辞して修道院で働くことになりました」

マイラーと並んで馬を走らせながら顔を上げると、前方に緑の山が見えてきた。あの山の中腹に、アユルが働いているはずの修道院がある。

まさか王妃が城から逃げ出して自分に会いに来るなんて、アユルはかけらも思つてないだろうな……と思いながら、私は手綱を握り直して馬を急がせた。白いつけ毛が背中で跳ねた。

## 10 星降る夜の密談（後書き）

次話、アユル視点です。

黄昏の女神シャンピの残照が消え、星と夜の神—ユイスが支配する時間が訪れると、僕はいつもあの方を思い出す。夜の庭園に、夜色の髪を背中に流して立っていても、闇に溶け込まずに存在感を放つていたあの方。雄々しいと言つてもいいくらい凜とした王妃様。もしかして王妃様が夜の神の化身だったから、女みたいな僕は黄昏の女神みたいに、夜の端っこにくつついてその力を分けてもらえたのかも。だから今、強くいられるかも知れないな。

僕は窓から離れて、あたりを見まわした。部屋のあちこちには花がふんだんに活けられた花瓶が置かれ、凝った意匠の長椅子や机が上品な雰囲気を醸し出す。

ここが今の、僕の仕事場。僕の唯一の武器で戦うことができて、同時に身を守ることができる場所。

魔法庁に勤めていた頃、そこを辞めることを決めた僕は、王妃様にあいさつに行つた。王妃様は短くなつた僕の髪を見てひどく驚かれて、急いで人払いをして下さつた。

「修道院に行くって！？」

長椅子に並んで座るなり、王妃様は急きにむよつてお尋ねになつた。

「ちょっと、魔法庁の人間関係や男女のこととに倦んでしまつたので、己を見つめ直してみようかと」

用意していた台詞を並べると、「あなた何歳なのよ一体」と王妃様は黒い瞳をくるりと回す。僕は付け加えた。

「あ、王妃様みたいな素敵なお出会いを諦めたわけじゃないです。聖職者や修道士にならなければ、結婚はできますし」

「そ、そり……アユルがそれでいいなら、私はいいんだけどね。長官は、何で？」

「ホツとなさつてました。長官も後悔なさつてたみたいですね。良かつたです、お互い納得して終わりにできて」

正直な気持ちを言つて、僕は笑つた。

子どもの頃から僕は、「可愛い」「女の子みたい」と言われて育つてきた。そんな僕が笑顔を向ければ、たいていの人　特に女の人は笑顔を返してくれた。だから、たとえ孤児院出でも僕は他の子どもとは違う、これからもずっと愛情を向けてもらえるんだと思つていた。

でも、それは子どもだからこそだつた。こんな僕でも成長し、少しずつ大人になつて行く。それなのに僕は、自分に向けられる視線の意味合いがだんだん変わってきていることに気づかない今までいた。甘えていたんだ。

そんな風に今まで來たから、実は年上の女性と付き合つのは長官が初めてじゃなかつた。でも、抱き合つている最中にふと田が合つた瞬間、急にわかつたんだ。今、僕は「愛されていない」つて。

そして僕がそれに気づいたことに、長官も気づいた。瞳つて、気持ちを映すんだね。

「ごめんなさい、アユル」

僕の身体を放した長官の、後悔でいっぱいの瞳を見て、僕も自然と謝つていた。

「僕こそ、ごめんなさい」

甘えてて、ごめんなさい。

そして、これからどうしよう……って裏庭の東屋で一人考えている時に、王妃様に会つたんだ。

僕は、手にしていた細長い箱を差し出した。

「王妃様が色々話して下さったおかげで、僕も今回のことのことを決められたんです。ありがとうございました。これくらいしかお礼ができないんですが……」

王妃様は両手で箱を受け取ると、尋ねるような瞳で僕を見てから開けた。中には、切り落とした僕の髪が入っている。魔法官見習いでなくなつた僕にはもう必要ないな、と考えた時、これは王妃様に差し上げなくては、と思つたんだ。

「これ、アユルの髪……？」

「はい。噂で聞いたんですけど、王妃様は姿をくらます想像をなさるのがご趣味だとか」

「ええ？ 趣味ってことになつてゐるの？ まあいいけど」

苦笑いする王妃様に、僕は髪の束をすくい上げて見せた。

「それならこれ、カツラとかつけ毛に使えませんか？」

すると突然、王妃様は黒い瞳を輝かせて、髪の束ごと僕の手を握りしめた。

「ありがとうアユル！ いやもう逃亡するとしたらいこの黒髪がネックになるのはわかつてゐるのに、『一般女性と同じ首飾りをしたいわー』なんて言つちやつたおかげで『一般の人と同じ髪の色のカツラが欲しいわー』つてのは何だかあからさますぎて言ひ出しつくかつたのよね、いやもう本当にありがとう！」

その時。僕の手と、髪の束と、王妃様の手が重なつた場所が、ふわりと温かくなつた。魔力の反応だ。

「あつ」

僕は目を閉じて、太陽の光を浴びるよつてその波動を受けとめた。手のひらに鳥のヒナをのせた時のような、軽いようで重い命の重みと、小さな鼓動が伝わつて來た。これは……。

「どうしたの？」

動かない僕を心配して、王妃様がもう片方の手で僕の腕に触れた。

僕は目を開いた。いくらこの世界の魔力が今では儚いものになつても、生命の息吹は間違いようがない。

唇を湿して、ドキドキしながら告げる。

「王妃様、もう夜の方、そんなに頑張らなくてもいいみたいですよ

王妃様は少しの間、呆然としていた。そして、ちょっと口を開けたり閉じたりしてから、思わずと言つた様子でお腹に手をやつてから、こう言つた。

「…………それじゃ、しばらくお酒は飲めないわね」

僕は声を上げて笑つてから、ソファを降りて片膝をつき、王妃様の手の甲に口づけをした。

「おめでとうござります。遠くから、ご無事の出産をお祈りしています

ます

実は、修道院に働きに行くというのは、王妃様や長官を心配させないための口実みたいなものだった。

もちろん実際に修道院に行つたし、そこで平和に暮らせたらそれで良かつたんだけど、いくら氣をつけていても自分の外見がこうである以上、俗世間でも修道院でも起こるべき事は起こってしまう。

あつという間に修道院を飛び出でざるを得なくなつた僕は、とある街のある店に行つて雇つてもらつた。以前付き合つた女性から聞いていたその店では、僕のこの外見が商売道具にもなり、また自分を守る鎧にもなつた。

さあ、今日も営業開始時間がやつてきた。

扉から次々と入つて来る女性たちに、笑顔で応対する。席に案内して、飲み物の注文を聞く。

しばらくして、大きなショールで頭と顔を覆つようにして隠した

女性が入ってきた。きっとこういった店に入るのが恥ずかしいのだろう。

僕は近づくと、ニッコリと笑いかけた。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

その女性はハツとこちらを見ると、少し赤くなつた顔で軽くこちらをにらんだ。黒い瞳……黒？

「修道院にいないから、探したわよアコルつ。何なのこのお店、『小姓喫茶』ひたむき『さき』つて！」

僕は仰天して叫びそうになつた。

「お……！」

王妃様！

## 1.1 境天使の受胎告知（後書き）

明日は更新お休みします（逃げつ

## 【闇話】メイラーの分際で

その日泊まつた宿には、客室に温水を引いた小さな浴室があつた。俺は寝台に腰かけて、そこから水音がするのを落ち着かない気分で聞いていた。

現在、俺とシーゼ様は、元魔法官見習いのアコルを探して旅をしているところだ。そして、夫婦のふりをして、この宿に泊まっている。

シーゼ様が突然俺の家を訪ねてこられた、その翌朝のこと。

自分の家にシーゼ様がいらっしゃる そして本来なら同じ卓で食事を採ることなどないシーゼ様と俺が一緒に、とは。一体どういった運命のいたずらなのか。

戸惑いの消えない俺とは対照的に、シーゼ様は当たり前のように食事を終えられると、澄んだ黒い瞳をこちらに向けられた。

「ねえ、もしも私が犯罪を犯して逃げてるんだったら、大勢の追手がかかると思うんだけど、そうじやない場合の追手ってどの程度のものだと思う?」

俺は、城に勤めていた頃の記憶を掘り起こしながら答えた。

「シーゼ様のお話では、祭司長のグレッド様は国王陛下の留守中に、数人の僧兵だけを従えてシーゼ様を聖堂におびき出し、元の世界に還そうとしたということでしたね」

「うん。しかも襟章からして、たぶん一番下位の僧兵が三人だけだった。彼らは何も知らずにあそこにいたと思う」

「ふむ……もしシーゼ様がそのままお還りになつていたら、彼らはそれを証明する目撃者になつっていたわけだ。『王妃様はお心を病ま

れ、祭司長の手で元の世界に還られた』と

しかし、彼らはシーザ様が還らなかつた場面を見てしまつてゐる。それはグレッド様にとつてはばらされたくない事実だらうな。彼らはどうなつたのだろうか。

「グレッドが私に追手をかけよつと思つたら、信頼できる部下をこつそり動かすしかないよね？」

「そうつぶやくシーザ様に、俺は考えながら答えた。  
「その場合は、聖堂騎士団の祭司長直下の隊を使うでしょうね。全員を動かすと目立つので、せいぜい十人弱……。いや、もしかしたら、まったく関係のない傭兵などを雇うといふことも考えられる」「え、そんな外部の人に、王妃が逃げたから捕まえてくれなんてしやべつちゃう？」

「こう言えばいいのです。『王妃様のふりをして髪を黒く染め、王家の権威を失墜させるようなことを企む輩がいるから捕まえろ』」

シーザ様は手をポンと打つた。

「なるほどー。って、感心してゐ場合ぢゃないや、それなら結構大々的に人を動かせるじゃないの！」

「いえ、大々的には無理でしょ。国王陛下にはシーザ様の不在を隠してはおけませんから、おそらくグレッド様は陛下には『王妃様は元の世界に還られた』ということにしてゐるはず。その上でシーザ様を捕えようとなさるのなら、やはり密かに動くしかありません」

「そつか。じゃあ一番あり得るのは、傭兵を何人か雇つて『王妃のふりをした女がいるから、模倣犯が発生しないように密かに捕まえろ』って感じ?」

「御意」

「じゃあ日本にいたころみたいな感じで注意すればいいのかな、基本的に……」

シーザ様はふむふむとうなずきながら立ち上がると、部屋の隅の

寝台に腰かけて黒髪が見えないよう髪をまとめ直し、つけ毛をつけた手巾をかぶりながら頷かれた。

「とにかく、なるべく目立たないようにしないとな。やつぱりメイラーがいてくれて良かつたわ、女一人旅は目立つけど、夫婦で旅をするならそりでもないもんね」

「は？」

「私とメイラーが夫婦のふりをするのが、一番目立たないでしょ？」

「こうわけで、もう一度言ひ。

俺とシーゼ様は夫婦の、そう『夫婦』の！　ふりをして、宿で同じ部屋に泊まっている。

これが心穏やかでいられようか、いやいられるはずがない！

「あーさつぱりした。メイラー、次どうぞ」

シーゼ様が布で髪を適当に拭きながら、浴室から出てこられた。俺は思わず視線を泳がせた。ぬ、濡れ髪……シーゼ様の黒く艶やかな濡れ髪。

城ではシーゼ様の入浴後、おそらく侍女たちがすぐに髪を乾かしていると思う。つ、つまり、国王陛下さえシーゼ様の濡れ髪を目にすることはあるかないか……つ。それを今、俺が！

「どうしたの？」

寝台に腰かけたシーゼ様がこちらを見たので、俺は少し離れた場所で片膝をついた。

「いえ、その……俺は無骨者ゆえ、どのようにシーゼ様のお手伝いをしたらよいか皆目検討がつきません。侍女のようになま至りませんが、俺にできることがあれば何でもお申し付けください」

「ありがとう。でも大丈夫、日本では全部自分でやってたから」

シーゼ様はにこりと笑った。

「むしろ」うちがあ礼したいくらいだもん、もう王妃付きの騎士じゃないのに付き合ってくれて。ここに調理場がついたら、メイラーに美味しいご飯くらい作つてあげるのにな」

「あ、それより足は大丈夫? マッサージとかするなら手伝えるよ  
？」

「ぐはっ。い、いえ、今口は痛みません」

俺はすつと立ち上がりませた。本当は、全く痛まないわけではなかつたが。

「そう? ジャあとにかく、お風呂入るくじうど。……あつ」  
シーザ様は、まだ湯のぼりの残る紅色の類のまま、上田遣いで俺を見た。

「でも何かあつたら怖いから、浴室の扉は少し開けておいてくれないかな……?」

れ、連続攻撃か……つ。

俺は胸の鼓動を意識しながら答えた。

「いえ、俺は拭くだけにしておきます。ただでさえ万全にシーザさまをお守りできない身体ですので、ゆっくり風呂に入るのはせめてアコルと合流してからに」

交代要員もいないのに、無防備な状態になるわけにはいかない。俺なりの矜持だ。シーザさまもそれはわかつて下さったようだ。

「そつか、わかつた。じゃあせめて背中……あ、いや何でもない、  
『めん』

言いかけたことをシーザさまは慌てて打ち消したが、俺はすでに想像してしまつていた。

俺の裸の背中を、シーザ様が優しく拭いて下をついている姿を!  
シーザ様は苦笑いなさり、

「『めん』めん、節操ないこと言つたね。あーもう、これじゃアコルに『こんなことしちゃダメ』なんて言えないよねホント……さて

もう寝ようかなー

と話を終わりになさつたが、俺はさらご想像してしまっていた。

あの美少年がどんなダメなコトをしたって…?

俺は浴室に入ると、まずは頭に冷たい水をぶっかけたのだった。

## 【闇話】メイラーの分際で（後書き）

タイトルが可哀想すぎると思った方、メイラーに応援よろしくお願  
いします。

## 12 それぞれの仕事（前書き）

お気に入り登録2,000件突破、そして前話のマイラーに応援ありがとうございます！

城下街に次ぐ規模の街、エングル。大きな噴水のある広場は彩色されたタイルで美しく舗装され、荷車や馬車が賑やかに行きかっている。広場に面した店はどこも華やかに装飾され、大勢の客が出入りしていた。

俺は道端のベンチに腰かけて公報紙に目を通しながら、とある店の様子をそれとなく窺っていた。あの店に入るには、俺は場違いすぎて目立ってしまう。店の看板には「小姓喫茶『ひたむき』」という文字……男が入つて悪いことはないのかもしれないが、やはり女性客が多いようだ。

「？」

ふと、俺は目だけを動かしてあたりの様子を窺つた。今、俺のようには何かを監視しているような視線を感じた気がしたのだが……気のせいいか？

いや、用心するに越したことはない。怪我をきっかけに故郷に戻つてしまはる経つ俺は、実戦の勘が完全には戻つていらない自分を信頼することができない。少しでもおかしいと思つたら、用心するべきだ。

さりげない動作で読み終わつた公報紙をたたみ、上着の内側の隠しにしまいながら立ち上がつた時、店から一人の人間が出てきた。シーザ様と、そして……。

「あー、本当にメイラーさんだ！」

元・魔法官見習いの少年、アユルだつた。くせのある髪をあごの線で切りそろえた彼は、少し背も伸びて以前のような少女っぽさは薄れていたが、やはり美しい見目をしていた。

「お話るのは初めてですよね、アユルと言います。よろしくお願ひします」

礼儀正しくあいさつする少年に、俺もあいさつを返す。

「メイラーだ。そうか、王……シーゼ様の元で働いていた時期は少ししか被っていらないんだな」

「はい、僕の方が先に辞めてしまったので。でもシーゼ様のお部屋の前で、よくすれ違いましたよね。あ、立ち話も何なのでこちらへどうぞ。僕ちょっと休憩もらってきたので」

アユルの案内で店の裏手に回ると急な外階段があり、三階まで登った。隣の家の壁がすぐそばまで迫っていて窮屈に感じられたが、

シーゼ様は

「ここ逃げやすそうね、屋根とか云つてわ」とあたりを見回している。

たどり着いた扉を開けると、廊下も何もなしにすぐ部屋になつていた。両側の壁に沿つて置かれた一つの寝台の間に小さな机と椅子、棚が一つ……それでほとんど一杯の部屋だ。アユルが小さな窓を開けて風を通しながら、

「僕と同僚が住んでいる部屋です。狭くて申し訳ありません、でもゆつくり話ができるので」

「何、だか落ち着くわ、この瓜さ。どこにでもすぐに手が届くのがいいのよね」

シーゼ様が部屋を見まわして褒めている。本当にそう思つているらしい。

シーゼ様とアユルは椅子の一つと寝台にそれぞれ腰かけ、俺は椅子を一つ借りて開け放したままの入口の扉から外を窺える位置に座つた。念のためだ。

「王妃様、まさか姿をくらます想像を実行に？ 本当にお城から出てこられるなんて」

まさか本当にシーゼ様が逃亡中だと知らないアユルは、面白そうに言った。場所が場所であるし、シーゼ様もごく普通の街娘の格好

なためか、ややくだけた口調になつている。

「でも、お忍びで僕を訪ねて下さるなんて嬉しいです。よくここがわかりましたね」

「あー、うん。一度は修道院に行つたのよ、山道を馬でえつほえつほ登つてさ。それでたどり着いてみたら、アユルはもう辞めたって聞いて」

シーゼ様は何から話していいか迷つてゐるようすで、ちょっと視線を泳がせている。

「院長様に、アユルがこの街にいることを教えていただいたの」

「あ、僕、院長様にはこの街で仕事を見つけたことを手紙で知られてありましたからね……でも、よくすんなりと教えて下さいましたね」

「この髪のおかげ」

シーゼ様がショールを取ると、アユルの髪で作ったつけ毛の三つ編みが現れた。

「院長様つて、魔力を感じ取る力がありなのね。すぐにこれがアユルの髪だつて気がつかれて、『アユルが髪を渡した方になら』って教えて下さつたんだ」

俺は一人の会話を聞きながら、その時のことと思い出す。あの時はひやりとした……つけ毛に気づかれたということは、シーゼ様が髪色を隠しているとバレたということだからな。しかし院長はそのことは触れず、シーゼ様と俺をじっと見つめて微笑んでいらっしゃった。

「後は、このエングルの街で評判の美少年を探せばいいわ、と思つて街の人聞いてみたら、『美少年がお望みならあの店がいいよ』つて勧められちゃつた」

肩をすくめるシーゼ様に、アユルはからからと笑うと寝台から降りて片膝をついた。

「王妃様になら僕、最高のおもてなしをさせていただきます」

芝居がかつた動作で片手を胸に当て、頭を下げるアコルに、シーザ様は両手を胸の前でぶんぶんと振った。

「やめてよもう！　お城にいる時はこんなもんかと思つてみんなにお世話してもらつてたけど、街のああいの店に入るのはすぐ恥ずかしかつたんだから」

アコルははずみをつけて、寝台に座り直した。

「ふふ、そうですか。でもおかげ様で、結構楽しく働かせてもらつてます」

「本当？　辛いことはない？」

「はい。僕、考えたんです」

アコルは素直な瞳でシーザ様を見つめた。この少年、城にいた頃よりも明るい表情をしている気がする。

「この外見に甘えていいないで、まずは他にもう一つ外見をしているの中に混じつてみよつて。そこから僕だけの個性つていうか、僕だけにできることが見つかるかもしねりないし。見つからなかつたらそれはそれで、埋没するのも楽かなつて」

「なるほどね。それで、今のところはどう？」

シーザ様がどこか優しい聲音でお尋ねになると、アコルはちょっと困つたように笑つた。

「それが僕、かなりの売れっ子になっちゃつたんですね」

なんかこいつムカつぐぞ。俺はげつそりしたが、シーザ様は大笑いされている。

「あはははは、それじゃあもう開き直るしかないわね！　強引なお密さんとかいない？」

「そういう人は出入り禁止になっちゃうんですよ、この店。だから今は、一生懸命稼いでます。いつかやりたいことが見つかった時の

資金ですね

「うんうん、お金のために働くのも大事なことだよね」  
うなずいたシーゼ様は、何かを思い出す表情をされた。

「私も日本にいた頃は、いつかバーツと使ってやろうと思ひながら  
お金のためにだけ働いてたなあ。やりたい仕事はできなかつたから」

「王妃様がおやりになりたかつた仕事って、何ですか?」「

アコルが興味津津に尋ねると、シーゼ様は含み笑いをなさつた。  
「内緒……」「

「うわ、よけい気になりますよそれ」

「え、いやー、恥ずかしいな。まあいいか、あのね  
ちょっと小首を傾げた動作に照れを滲ませて、シーゼ様はおっしゃつた。

「絵本作家。えへ」

俺とアコルは素早く視線を交わし合つた。

シーゼ様はギロリと俺たちを見た。

「ちょっと。今の視線の意味はイルフレートなしでもわかるわよ。  
『こいつの書いた絵本なんか子どもに見せられるか?』『無理だね』  
つて意味でしょ、ふん」

「そ、そんなんでもない!」

「きっと斬新なものを書かれるのでしょうかー」

あわてて表面を取り繕う俺たちに、シーゼ様はもう一度鼻を鳴らしてから、パンと手を打ち合わせた。

「さて……と。アコル、実は私、聞きたいことがあつてここに来た

の

帰還の魔方陣についてアコルに聞くためには、事情を話さないわけにはいかない。巻きこむように心苦しかったけど、私はあつたことをそのままアコルに話した。

「感じ悪いと思つてたんですよ、あの祭司長」

話を聞いたアコルは、さつくつと言つた。口調はさつきまでと変わらないけど、あらり、田が笑つてないよ。

「いくら王太后様に取り立てもらつて祭司長になったからって、フェザリオン陛下よりも王太后！　みたいな空氣作つてゐるのの人じゃないですか？　それに何かと言つと、王ひ……シーゼ様のことちらちら見てて、見張つてるみたいで嫌だつたな僕は」

「そ、そうだつたの？」

珍しく剣呑な雰囲気のアコルに、私はちよつとタジタジ。

「結論から言います」

アコルは私をまっすぐ見て言つた。

「シーゼ様を元の世界に還すのは、今の時点では不可能だと思います。シーゼ様が追い込まれそうになつたのは、帰還の陣じゃない」

「根拠は？」

すぐに戸口の方からメイラーが言葉を投げた。アコルはメイラーと私を交互に見ながら説明する。

「百十代田の国王妃を召喚した数年後に、もう百十一代田の国王妃を召喚しなくてはならなかつた時の話は、どなたからお聞きになりましたか？」

「ん？　九十九代と百代じゃなかつた？」

まあどつちもキリ番ゾロ田が連続で来ちゃつた例だから同じか。

「ああ、『悪夢の一一年間』ですね」

魔法庁ではそんな呼び名で語り継がれているんですか。

「その時はちょっと特殊でしたね。九十九代目の国王妃を召喚した直後、九十九代国王が急な病でお亡くなりになつたので、次の百代国王妃をすぐに召喚しなくてはならなくて悲惨なことになつたんです。ギリギリの魔力で召喚したもの、成人女性ではなく赤子が召喚されたとか」

……それはひどいな。誰にとつても、ひどい。何でそこまでして、「でも百十代と百十一代の時は、『悪夢の一一年間』の教訓もありましたし数年の間がありましたので、準備ができました」

「準備？」

「はい。魔力を受けとめて練ることのできる素質を持つた人間を、魔法庁が数年前から大量に雇い入れていたからこそ、『』く普通に魔力を溜めて召喚を行うことができたんです」

黙つて聞いていたメイラーが、口を挟んだ。

「言われてみれば、その頃は隣国、ダーナ、ディルスとの関係が緊張状態にあつたこともあって、あらゆる不測の事態に備えておこうという空氣があつたようです。極端な話ですが、当時の国王が戦で急に戦死する可能性さえ考えて、次の召喚の準備をしていました。しかし今は……」

「はい。平和ボケして緩みきつてますからね、王家はアユルは腕を組んだ。

「魔力の備蓄なんか、帰還の陣を作れるほど大量にあるわけないんです。それだけの魔法官だつて揃つてない。シーザ様を還すのは、まず無理ですね」

「じゃあ、グレッドは何で元の世界に還すなんて……」

「つぶやく私。アユルも考え込んでいる。

「その場にいた僧兵たちに、シーザ様が還るところを見せようとしたんですね？ それなら、シーザ様をどこかに移動させようとしたのは間違いないと思うんですが」

移動……どこへ？

その時、開け放していた窓から鐘の音が聞こえてきた。アユルが顔を上げる。

「あ、『ソレスの帰還』の鐘だ。すみません、僕そろそろ休憩時間が終わりなんです」

ソレスというのは、この世界の太陽神の名前だ。この世界には四人の神様がいて、“太陽神”ソレス、“星と夜の神”ニユイスが兄弟神。それと、“暁の女神”ドライリと“黄昏の女神”シャンピがいる。

一日の時間はこの四人の神様にちなんで四つに分けられていて、『ソレスの帰還』っていうのは太陽の神様がそろそろ家に帰る時間っていうことだから、だいたい午後の三時くらい。ややこしいな、この世界に来て最初のうちはイルフレートが地球時間に訳してくれてたんだけど、私がだんだんこっちに馴染んできたら訳してくれなくなっちゃって。

「あっ、忙しいのに」めん。休憩時間使わせちゃったね」

私が急いで立ち上ると、アユルは二口二口した。

「休憩時間にシーゼ様とずっとお話できるなんて、嬉しかったです。まだこの街にいらっしゃいますか？」

言われた私がメイラーを見ると、彼は

「まだお聞きになりたいこともおありでしょ？ 事態の急変がなければもう少しここに滞在しましよう」とうなずいた。良かつた、そうしたかったんだ。

「今日は何時に仕事終わる？」

聞いてみると、アユルは

「うわあ、王妃様と待ち合わせですか！」

つて瞳をキラキラ。うわー、そりゃあんた、売れっ子にもなるよ。

「夜、私たちの泊まってる宿に来れない？ メイラーをお風呂に入れてあげたくて」

「？？？」

疑問符を飛ばしているアコルに、私はメイラーが私の警護のため  
にゆっくりお風呂に入れていないと、彼がお風呂に入ってる間ア  
コルに私のそばについて欲しいことを説明した。メイラーは後ろで「  
あ」だの「う」だの言っている。まーまー、照れるなよ。

「僕なんかで警護の代わりになるかな……まあ、誰もシーザ様のお  
そばにいないよりはいいですよね」

アコルはうなずいてから、何やらニヤニヤしてメイラーを見た。

「そうですよね、ずう一つとシーザ様と一緒にきりだつたんでも  
んね。大変でしたねメイラーさん」

メイラーは苦虫をかみつぶしたような顔をして、黙り込んでしま  
った。なんであんな顔してるんだろう？

「それじゃ、後で宿の方に伺いますね！」

一緒にお店の前まで行くと、アコルはそう言つて元気よく仕事に戻つて行つた。私とメイラーも、宿に向かつて歩き出す。

エングルの街はメインの通りにモザイクタイルが敷かれていて、華やかですごくきれいだ。ここはさつき話にも出た隣のダーナディルス王国との交通の要衝になつていて、通行手形の発行を待つ旅人を当て込んだ商売人がたくさん集まつてゐるんだって。そんな街で小姓喫茶とかやつちやう『ひたむき』の店長、思い切つたことするな。

赤ちゃんを抱いた女人を見かけて、ちょっと目で追う。　ウ  
インガリオン、元氣にしてるかな。私なんかより、よっぽど乳母さんが上手にお世話してくれてるとは思うけど。

少し物思いに沈んでいたら、メイラーに軽く腕を引かれた。そのまま道の端に避けると、前方からガツチャ、ガツチャという音。力一キ色の制服を着た警備兵が歩いて来つて、腰に佩いた長剣が重そうな音をたててているのだった。

そう言えば、とメイラーに目をやると、彼の腰にも長剣がぶら下がつていた。こっちの世界では、彼みたに私服姿の人々が往来で剣を持つて歩いていてもおかしくはない。休暇中の兵士か、何かの用心棒かと思われるだろう。

この街では中の上といったランクの宿屋に到着して、客室に入つた。メイラーは窓を開けてあたりを見まわし、もう一度閉めてから、帯ごと剣を外してテーブルに置いた。

「剣つて、結構重たいんでしょ？　足に響かない？」

聞いてみると、彼は苦笑いしながら剣を鞘から抜いて見せた。剣は、鞘の半分の長さしかなかつた。

「申し訳ありません、靴はハツタリです。おっしゃる通り長剣はかなり重く、ただでさえ左の靴の方が右よりもすり減るほど左足に負担がかかる。しかし追手になめられるわけにはいかないので、見かけだけはこのようにしてあります」

「へえ、工夫してるんだ」

私は思わず、剣を持たせてもらつたり靴をのぞいたりしてしまった。メイラーはニヤリと笑つて、

「これを補う武器はちゃんとありますので、ご安心を」  
だって。足を痛めていても、メイラーは頼もしいボディーガードだと思つわ。

「ところでシーザ様、これを」

彼が上着の懐から出したのは、公報紙だった。数日に一回発行されるそれは警備隊が無料で発行していて、自警団の詰め所や小聖堂など公的な場所で配られている。わら半紙にガリ版刷り　あ、謄写版つて言うんだつけ。そんな感じの新聞だ。

文字はだいたいわかるので、私は目を通した。日本にいた頃、外国人人が日本語学校で勉強すると約一年半で生活に困らない程度に読み書きできる、と聞いたことがあつたので、一年半だなよし負けるもんかー！　と思つて勉強したんです。負けず嫌いなもので。

「あ、私のことが書いてある。『王妃が体調を崩したので、しばらく公務は控える。王太子のお披露目式も延期』……あーっ、そうだワインガリオンのお披露目式やる予定だつたつけ！」

忘れてたよ、せっかくハーヴの民の皆さんに息子を見てもらおうと思ったのに。つて問題はそこではなくて。

「王妃が元の世界に帰つた、とは書いてないね。対外的には隠すつもりなんだ」

「ひとまずは、ですね。どう発表するか協議中なのでしょう。……もしかしたら、国王陛下かどなたかが、祭司長の言い分を疑つていらつしやることも考えられますが」

メイラーの言葉に、私は夫の顔を思い浮かべた。

フェザーはあんまりやる気のない王様だけど、物事をよく見ていい  
る。……疑つてくれるかなあの人。

そう考えた時、私は初めて気がついた。私、「夫とグレッドがグル」つていう風には考えたことがないな、って。  
あり得ないわけじゃないよね。夫は国王なんだから、世継ぎが生まれて用なしになつた異世界の女をどこかへ片付けて、妻にするメリットのあるどこかの美姫を正妃にしてウハウハ、つていう可能性も。

ふつ、と笑いだした私を見て、メイラーが不思議そうな顔をして  
いる。

ないわ、ないない。あのフェザーが。私は、ウインガリオンが生  
まれた時のことを思い出した。

陣痛にパニックになつた私が、

「もうやめる、もう逃げる！ ギヤー！」

つて叫んでるのを別室で聞いていたフェザー、自分も青い顔をして  
お腹を抑えてたつて、後で聞いたんだ。そんな纖細なフェザーが、  
この私に隠れて陰謀をめぐらせられるわけがない。

ちなみに私はその時、国家体制批判（「これやらせるために召喚！？ ふざけんなー！…」）やら国王に対する暴言（「こんな目に遭うのフェザーのせいだ、一生恨んでやるーーー」）やらも叫んだらしく、フェザーだけでなく医者も産婆も青くなつてたそうな。私は覚えてないんだけど、まあこれも済んでしまえば楽しい笑い話よね。

宿の食堂で簡単に夕食を済ませ、再び客室に戻る。鐘の音が聞こえて窓の外を見ると、ずっと遠くの山の端に夕陽の残照が残るばかりで、夜空には星が瞬き始めていた。今のは“黄昏の女神”シャン

ピの帰還の鐘だから、だいたい夕方の六時過ぎってところかな。これからは“星と夜の神”ニユイスの支配する時間になる。

「そろそろ、アユルが来るかな」

私が言つた時、廊下から足音が聞こえて部屋の前で止まつた。トン、とノックの音。

「こんばんは、僕です。お約束もないのに、すみません」

アユルの声に、私はメイラーと顔を見合せた。『お約束もないのに』？ ちゃんと約束したじやん。

一瞬の後、はつとした。アユルはおそらく誰かと一緒にいて、その人物に気づかれないように私たちに警告してくれているんだ。約束もしていない、不躾な客人がここにいるよ、と。

メイラーがテーブルの上の剣を手にしながら、扉に向かつて言った。

「ちょっと待つてくれ、今彼女が服を着るから」

どういう設定よ、と思いつつ、私はスカートをはいでいるのも構わずそつと窓を開けて窓枠に足をかけた。何かあつた時のためにメイラーが隣の客室も取つておいてくれてるので、私は窓からそちらへこつそり移つて身を潜めればいい。メイラーを置いて行くのは心配だけど、相手が私を狙つた追手なら、私が姿を消してしまうのが一番だからね。

でも、残念ながらこの手は使えなかつた。私は上げていた足を元に戻して言った。

「メイラー。外にも誰かいる」

ちつ、とメイラーの舌打ち。しそうがない、見つかっちゃつたら人數ではどうしたつて負ける。

私は開き直ると、彼に言つた。

「アユルが心配だわ。扉を開けて」

メイラーが抜き身の剣を構えたままレバー式のロックを外し、私の斜め前まで下がつた。

向こうからゆっくりと扉が開くと、そこには悔しそうなアユル。

そして、そのすぐ後ろに背の高い男が一人立っていた。逆立てた短い白髪、そしてごく薄い紫の瞳の男は、あごから肩にかけて大きな布を巻きつけたような格好をしていて口元が見えない。

男は無表情のまま、アユルを押して中に入つて來た。たっぷりした袖口の手をアユルの肩というか首の近くに置いているのは、たぶん何か武器を持つてるんだろう。でも、殺氣どころか緊張感さえない様子……さつと、唸り声を上げる獵犬よりも、爪を隠した鷹の方が怖い。

彼はそのまま軽く目礼すると、低くこもつた声で言った。

「お迎えに上がりました、王妃様」

「先ほど、陛下が小聖堂にお見えになつていらっしゃいましたよ」事務仕事をしている修道士の言葉に、私は立ち上がると祭司長室を出た。石畳の回廊を行く歩調が、自然と早くなる。

すでに“一コイスの目覚め”の時刻で、等間隔で壁に穿たれた燭台用の穴から明かりが広がっていた。その先の階段を上りながら見上げると、聖句の刻まれた小聖堂の扉が見える。両開きの扉は片方が開いたままになっており、水晶で作られた壁は外気との差で少し曇っていた。中に灯された燭台の火で、あたりはぼんやりと明るい。声が天井に反響して聞こえてくる。私は中からせこちらが見えない位置で立ち止まると、耳をすませた。

「ここから、妃は元の世界に還つたのだな」

陛下の落ち着いた声に、おそらく僧兵の誰かの声が答える。「はい。祭壇の前のこのあたりに、陣が開かれていざこまして」

「妃の様子はどうだった」

「動搖していらっしゃるようでした。無理もないことですか……」

「帰還の瞬間は見たか？」

「王妃様が陣の中へ飛び込まれ、陣が強く光りました。一瞬何も見えなくなり、少しして皿を開くと、王妃様はすでにいらっしゃいませんでした」

「そうか。わかった」

私は身をひるがえして階段を少し下り、暗がりに身を潜めた。複数の足音……おそらく陛下とそのお付きの者が小聖堂から出ていったのだろう。石畳を踏む足音は、すぐに遠くなつた。

小聖堂まで確かめに来るとは……陛下は、疑つていらっしゃるのか？ 王妃が本当に、元の世界に戻られたのかどうかを。

しかし今の話では、王妃の行動に気づいた私が急いで陣を発光さ

せて僧兵たちの目をくらませたことは、疑いこそそれ確証は持てまい。まさか祭壇の奥に王族専用の逃走経路があったとは思わなかつたが、そして陛下はその経路をじ存じだらうが、確証をお持ちになれなければ同じだ。

王妃の逃亡後、密かに私一人で祭壇の下へもぐつて通路を探索した。そして、いくつかあるつきあたりの一つに王妃のドレスが打ち捨てられているのを見つけて愕然とした。

ドレスを脱いだということは、着替えが用意してあつたといふことになる。何と周到なのだ。

あのお方は予想外の行動をお取りになる……見つけ出すことはできるだらうか。私は再び祭司長室への道をたどりながら、王妃のことを思い出していた。

王妃が私をお呼びになつてゐる、と聞いて、ある暖かな日の午後に王妃の部屋へ出向いた。結婚式のしばらく後のことだ。

彫金によつて蔓草の模様を浮かび上がらせた豪奢な扉にたどり着き、中に入ると、そこは控えの間になつてゐる。すぐに侍女に取り次がれて次の間に入った。

王妃は、出窓に腰かけて本を読んでいらした、らしい。よいしょと床に降りて、靴を履いているところだつた。

「早かつたのね、祭司長」

「……王妃様。本は椅子でお読みになつて下さる」

一言言つと、

「さつそくお小言來たー。だつてこの部屋だと、あそこが一番落ち着くんだもん」

とドレスの裾を直しながら受け流された。

「窓から逃げやすいですから」

私が少し呆れて言うと、王妃は両手の人差し指で私を指さして「言つよねー」とニヤリと笑つてから、「いやいや、祭司長考え過ぎ。単に、本を読んだり窓から外をぼーと見たりできるのが幸せなだけ」とおっしゃった。勘ぐりすぎるのは私の悪い癖だ。

その王妃の手の片方、人差指以外の指で持つていた本に見覚えがあつた。それは王妃を召喚してすぐ、この世界のことを知っていただくために私が差し上げた、神話をわかりやすく描いた絵本だつた。「私、絵本好きなんだよね」

王妃は私の視線に気づき、両手で本を軽く持ち上げる仕草をした。脇の小卓で茶の準備をしていた年かさの侍女が、

「多くの方から数々の贈り物が届きますのに、王妃様はその絵本ばかり手に取つていらっしゃいますわね」

と笑う。思わず王妃の顔をまつすぐ見ると、王妃は「だつて」と絵本を開かれた。

「こっちの神話つて、可愛らしいから」

「可愛らしい……ですか」

「太陽神”ソレスと“星と夜の神”ニユイスの兄弟は、大昔に大喧嘩をしたせいで昼と夜に分かれて会わなくなつちゃつたんだけど、実は仲直りしたいと思つてゐるところとか。それで、朝と夕方に“暁の女神”ドイリちゃんと“黄昏の女神”シャンピちゃんが入つて、昼と夜、兄と弟の仲を取り持つてゐんじょ。この女神様も、女神つて言うより妖精っぽくてきやらきやらしてて、なんか可愛い」

……王妃は元の世界では、特に信仰している宗教はなかつたそうだ。その視点でこちらの神話を眺めるとななるのか。

「それに、こっちの神話つてすゞく一般の人には寄り添つた内容だと思つ」

王妃はお続けになつた。

「一日のうち、ソレスの時間とニユイスの時間は長いけど、ドイリ

の時間は明け方から陽が昇るまでだし、シャンピの時間は陽が暮れて沈むまでだから短いよね。ドイリとシャンピは、起きてから短い時間で色々な事をして、次の神様に世界を譲る。朝と夕方が忙しいのって、まさに庶民の生活だよね

私は舌を巻いた。確かに朝夕の城下では、「急がない」とドイリ様がご帰還になるよ」「もうシャンピ様がお目覚めだ」などといった表現が人々の口に頻繁に上る。王妃はその感覚を、私が差し上げた絵本からすでに読み取られていらっしゃるようだ。

「他にも色々と裏読みできて面白いんだ。ありがとうございます」「急に気安げに礼を言われ、私は黙つて目礼した。どうもこの王妃と話していると、調子が狂う。

「ところで王妃様、今日はどのような用件で……」

言いかけたその時、先触れがあつて、国王陛下が部屋にお見えになつた。近衛騎士団長も一緒だ。

「祭司長も来ていたのか。シーザー、何か用があると聞いたが」「うん、あと一人来たら……あ、来たかな」

王妃が扉の方を見ると、女官長が「遅くなりまして」と急ぎ足で入つて来て礼を取る。侍女が茶の準備を終えて部屋を出て行つた。これは……召喚の時にその場にいた四人か。

王妃はいきなり立ち上がると、こう言つた。

「本日はお忙しい所をお集まりいただきまして、ありがとうございます。召喚という国家的大事業の中心を担つた方全員に、この報告があります」

「全員に?」

陛下が聞き返すと、王妃は笑つてうなずき、何やら片手の指を一本お出しになつた。

「できたよー、赤ちゃん」

それはやはり優先順位として夫に最初に申し上げてはいかがか!

!!

とその場の全員が思つたことだらうが、とつあえず陛下以外の二人はその場に膝をついて  
「おめでとうござります」

と口を揃えた。めでたいことに違ひなく、女官長などは頬を紅潮させている。

陛下は「うむ……そつか」「よくやつたな」などと口の中でおっしゃつていたが、後に

「余もそれなりに、妃が妊娠したらびつ言葉をかけるか考えていたのだが、出鼻をくじかれたな」と苦笑していらっしゃった。少々お氣の毒だ。

それはともかく、この懷妊報告の際に王妃が付け加えた一言を、私は覚えていた。

「最初に気づいたのはアコルなんだけれどね……あ、いやいや」

……「アコル」？ 聞いたことがあるような気がするなだが……。

王妃が姿を消してしまわれ、逃亡先を考えた時に思い浮かんだのは、王妃を守つた際の負傷で退役した男のことと、王妃が口にした「アコル」という名前だった。調べるとすぐに、魔法院で働いていた魔法官見習いの少年だと知れた。

祭司長室の前まで来て立ち止まつた時、廊下の奥で闇がかすかに動いた。私はそのまま動きを止めた。

「発見しました。仲間も一人おります」

闇の中から、短くひそやかな声。

「わかった。言つた通り手荒な真似は決してせず、例の場所に案内

せよ。私も明日には合流する」

指示するとは是の返事があり、再び闇は静かにわだかまる。私は扉を開こうとして、手のひらに汗をかいているのに気づいた。

明日、王妃は私に、どのような視線をお向けるに違うだろ？

。

私は黙つて、木の椅子に腰かけていた。私の右にもう一つ椅子を置いてメイラー、足元の薄い絨毯の上にはアユルが膝を立てて座つていて、二人ともやはり黙つている。

私たちが連れてこられたのは、小さな修道院だつた。アユルが働いていた方の修道院は、大きな街にも近くて大勢の礼拝者・巡礼者が訪れるようなところだつたけれど、私たちがいるのは辺境のさびれた村の片隅だ。修道院と言うより礼拝堂と言つた方がふさわしいような建物の、司祭さんが寝起きするための部屋にいる。

入口のすぐ横の椅子には、あの色素の薄い男が相変わらずあごを布に埋めるようにして腰かけている。

エングルの宿屋でアユルを人質にした男は、低い声で淡々と「外に馬車が待つております。お乗りください」と言った。

「わかった」

私がさつさとドアに向かうと、

「シーザ様っ」

アユルとメイラーの制止の声がハモつた。

「……私つて大概、自己中心的だけど」

私は一人を振り向いて、苦笑した。

「でも、私のために誰かが怪我したり死んだりするくらいなら、元の世界に帰るわ。だからじつとしてて」

それは、逃亡生活を始めてすぐに決めていたことだつた。大事な人が傷ついてまでここに居座るくらいなら、日本に帰つてまた逃亡生活に戻る方がずっとマシ。

メイラーが私を守つて劇場の貴賓席から転落した時の、あの身体の中が引きちぎられるような感覚は忘れられない。せつかく仕事を楽しんでるアユルが、こんなところで怪我するのも嫌だ。

「ありがとう、メイラー、アユル。巻きこんで、悪かつたわね……」震えそうな声で一人に別れの言葉を言つたのに、

「お前たちも一緒に来い」

と男が言つて「ハア？」と顔を見てしまつた。私が捕まればそれでいいじゃないの。……ますますわけがわからない。

戸惑つていろいろうちに、アユルは「良かつた」と笑顔になるし、長剣を置くように指示されたメイラーはためらいなく剣を放り出して駆け寄つて来るしで、胸が熱くなつた。

世継ぎを生んで「あなたの役目は終わつた」と言い渡された私は、この世界にとつて自分はもう必要のない人間なんだと思つていた。だから、こうやって彼らが危険を顧みずに守ろうとしてくれると、申し訳ないと嬉しいのとどうしたらいいのか混乱してしまつて

ひんやりした空氣に我に返つたら、全員で外に出でいた。宿賃は前払いだつたので、問題なく裏口から。

宿の外壁の数か所に吊るされたランプが、街路に佇む二頭立ての馬車を照らしている。御者席には誰もいない。

馬車はシンデレラみたいに綺麗なものではなくて、いかにも荷馬車という感じだつたけど、後部の出入口から幌の中に入つてみたら床に毛皮が敷き詰められていて、座り心地は悪くなつた。前部は幌が引き絞られていて、外が見えない。

続いて入つて来た男は、アユルを離すと後部出入口の前に座り込んで、それきり黙つて動かなくなつた。

「アユル、大丈夫？ 無理矢理連れてこられたの？」

アユルを引つ張り寄せ、肩やら腕やらを軽く抑えて怪我の有無を観察していると、彼は申し訳なさそうに微笑んだ。

「宿屋の廊下を密室に向かう途中で、いきなり後ろから捕まえられたんです。とつさにあれしか言えなくて、済みませんでした……」

「俺の失態です。昼間、視線を感じた気がして……すぐにこの街を離れるべきでした」

メイラーも悔しそうにしている。

「ううん、もうその時には見つかっちゃってたんだよ。きっとお店を見張つてたんだ。私とアコルのつながりはまあ祭司長にバレてるとして、何でアコルの居場所がわかつたんだろう?」

修道院長だつて、私がアコルの髪を持つてたからこそやつと教えてくれたのに……と私が首をかしげると、アコルはまたまた申し訳なさそうに眉を下げた。

「ごめんなさい、そう言えば僕、生まれ育った孤児院の院長には、現住所を知らせてます……」

「アコルは悪くないって。そっか、前の職場じゃなくてそっちから辿ったか」

そんな話をしているうちに、前方の御者席の方でギシッという音がした。さつき庭側にいた誰かだろうか。そして馬車はゆっくりと動き出した。

馬車に揺られて浅い眠りを繰り返しているうちに、空が白み始める頃。“ドイリの目覚め”的時間あたりにこの礼拝堂に到着した。それ以来ずっと閉じ込められている状態のまま、もう“シャンピ”が起きちゃいそうな時間だ。いい加減退屈だし、簡素な食事は出たけど小腹が空いたしで、私は自分の荷物を探った。宿に置いて来たはずの荷物、御者がいつの間にか持つて来ていた、ここに着いてから渡されたんだよね。中身はチェックされたみたいだけど。

ショルダーバッグから取り出したお菓子（お城で適当な理由をつけて作つてもらつた逃亡用非常食）を一人に勧め、メイラーには丁

重に断られたのでアユルとかじつているうちに、外から馬車の車輪が小石を踏む音が聞こえた。メイラーが静かに立ち上がり、動けるよう準備をしている。

やがて、IJの居住用の部屋のドアを開けて入つて来たのは……。

旅姿の、祭司長グレッドだつた。

奴は私を見て、何やらホッとしたようにため息をついたけど、私はお構いなしに椅子を鳴らして立ち上がり、奴にびしっと人差し指をつきつけた。

込もうとしてくれたわね！

いために大事！

返してきました。

「王妃様こそ、なぜすんなりと陣に入つて下さらなかつたのですか」

「せっかく逃がして差し上げようとしたのに上

「何それ、こっちはもう逃げ飽きてるんですーーっだ！」

「信じていませんね?」

「しておつません」

後日は繰り返ながらせんべつして言つた。うが!!

「そのような事実は」「ございません。お役目を果たされた」とにお礼申し上げると言っただけです

「言つた言わないの水かけ論はいいのよつ、壁つこて聖堂に呼び出

卷之三

子どものケンカか、と思つたらちょっと頭が冷えた。

落ち着き払つているグレッドはマントを外してあの男に渡し、部屋の隅からもう一脚椅子を持つてくると、ため息をついた。

「説明申し上げますから、おかげになつて下さい」

私はもう一度腰かけると、腕を組んで奴をねめつけた。こちらから仕掛ける。

「あれ、帰還の陣じゃないのね」

グレッドは座りながらちらりとアユルを見て、私に視線を戻すとうなずいた。

「そうです。あの陣は、私の生家に移動する陣でした」

「……は？ グレッドの実家？」

わけがわからずにいる私に、グレッドは膝の上で指を組んで言った。

「最初からお話します。王妃様がお世継ぎをお生みになつてすべく、私は王太后レイザ様に呼び出されたのです」

王太后様が、からんでくるの？  
私はぐくりと喉を鳴らした。

王太后レレイザ様は先王の崩御以来、王城の最も奥まった所にある白陽宮という小さな宮にお住まいになつてゐる。しかし現在もレレイザ様が国政に与える影響は大きく、その小さな宮を訪れる者は後を絶たない。

私がレレイザ様の居室に入つて行くと、レレイザ様は書き物机に広げた書類を前に、本を広げて調べものをしていらっしゃるようだつた。華やかなカーテンや優美な家具がなかつたら、大きな書棚の並ぶそこはまるで執務室のようだ。

「ああ、グレッド。忙しいのに呼びつけてごめんなさいね」

装飾の少ないドレスの裾をさばいて立ち上がり、レレイザ様は書類を手にソファの方へ歩いて来られた。多少ふくよかになられたとはい、剣術を修められた身体は機敏な動きを失つてはいない。

「王妃はどんな様子？ 出産の直後に見舞つた時は、何だか精根尽き果てた感じだつたけれど、もう起き上がるようになつたかしら」  
「は。こちらへ伺う途中、庭にいらつしやるのを見かけしました」  
レレイザ様は苦笑された。

「そう。いえ、私が自分で王妃に会いに行けばいいのだけれど、懷妊前後に色々と口を出し過ぎてしまつたかしらと思つと行きにくくてね」

確かに……と私は思わず口を曲げた。懷妊前に王妃教育の時間にお会いした時、侍女に茶を淹れさせた王妃が、

「このお茶、『これから子どもを産む女性にいいんですつて』って王太后様が下さつたんだけど、苦手な味なんだわ。パクチーみたい。捨てるわけにいかないから協力してよ」

と男の今まで飲まされたのを思い出したのだ。あれは……きつかつ

た。

「行きにくい理由は、それだけではないのだけれど」  
レレイザ様はため息をおつきになると、手にしていた書類を私の前へ滑らせた。

「拝見します」

手に取つて目を通すと、それは隣国のダーナデイルス王国に潜ませた間諜からの報告だつた。かの国の物流の様子が、数字を挙げて細かに書かれている。

「ハーヴェステス側の国境にあるいくつかの砦に、補給が増えている。軍事訓練の回数も増えていると報告があつてね」  
まるで戦争の準備だ。私は眉を寄せた。

「国王陛下はご存知なのですか？」

「いえ……これは先王陛下がずっと以前から使つてゐる間諜からで、まず私は報告が来たところ。まだフェザリオン陛下にはお知らせしていません。陛下は陛下で情報を得てらっしゃるかも知れないけれど」

レレイザ様は背筋をまっすぐ伸ばしたまま、私をご覧になつておつしゃつた。

「それともう一つ。ダーナの聖樹が、復活したらしくと聞きました」  
魔力を溜めておく聖樹は、かつてはハーヴェステス王国だけなくダーナデイルス王国にもそびえていた。しかし数百年も昔の戦争の混乱の中、燃えてしまつたと聞いている。

「私が恐れているのは、もしもダーナに魔力を戦争に使う技が存在するとしたら? ということなの。今のハーヴでは、とても対抗することはできない」

「しかし、それは」

「わかっています。ハーヴでも昔から、魔法を戦力にする研究はされてきたものね。武器を上回るほどの効果的な方法は、ついぞ見つからなかつた。でもダーナが同じとは限らないでしょ? う?」

レイザ様は背もたれに身体をお預けになると、少し視線を落としておっしゃった。

「それで、ね。グレッドに聞きたいのだけれど……王妃の召喚のこと」

召喚？ どういった関係があるのだろうか。私は続きを待つた。「魔力というのは使用すると、一部は空へ昇り、それ以外は私たちの世界に再び散らばる。それは、召喚に使われた魔力も同じなの？」

「同じですが、その魔力は召喚の際に、あちらの世界の方へ散らばつていると考えられます。いわば、魔力と交換で王妃をこちらに呼び寄せるのですから」

「交換。やはりそうなのね」

レイザ様は一つうなずかれた。

「それでは、王妃がもしもあちらへ帰還したら、その魔力はこちらへ戻つて来るのかしら？」

のいざこかへと消えてしまうかもしれません

そもそも王妃の身に何が起こるかわからない。本当は、私はそれを一番恐れたのだ。

「そう言つたの？ 王太后様は何て？」

「王太后様は」

私は唇を湿らせた。

「『魔力が戻つて来るのが一番良いけれど、失敗しても結果的に正妃の座が空けば、後はどうにでもなる』と……」

王妃と、そばに控える予備役の騎士、そして元魔法官見習いの少年の三人に、不穏な空気が立ちこめた。

「……どういう意味でしょーか」

王妃様の声も低くなつた。

「詳しいことはお話し下さいませんでした。ただ、王太后様は国のために第一に考えて動かれる方で、そのためなら非情にもおなりです。王妃を正妃の座から外すと言つのは、相当の不穏なことが行われると言つこと。王妃様の身に何が起こるか……」

私は視線を外さずに続けた。

「それならば、帰還には成功したけれど魔力は戻らなかつたということにして、いつたん王城からお逃げいただこうと思つたのです。安全な場所として、私の生家を選びました」

お子のそばで過ごされて情が湧いてからよりは、今すぐの方が傷も浅いと思つたのだ。それで例え正妃でなくなつても、同じ国に生きていればいつかはまみえることもあるだろう、と。

私が元の世界に送り返されそうになつたのは、私を送り返すことで大量の魔力を取り戻すためだつた？ 用なしだから、じやなかつたんだ……。

個人的な理由で、私は少し安堵してしまつた。いやいや、この男のこと信じるなら、の話だけね。

グレッドが、何度目かのため息をつく。

「それなのに王妃様はまんまと脱走なさつて……もしも私の手の者ではなく、王太后様の手の者に見つかっていたらどうなつていたか。寝覚めの悪いことは勘弁していただきたい」

「あんたの寝覚めなんか知つたこつちやないわよ。だいたい、そつちの言つことが本当だつて、どうやつて信じろつていうの？」

今までの経緯からも、素直に信じる気にはなれない私。そこへ、マイラーが静かに口を挟んだ。

「……お聞きしてもよろしいでしようか。祭司長様は、王太后様のお考えには賛同されていないということですね？」

グレッドは目線だけ動かしてマイラーを見た。

「そもそも、ダーナディルスが不穏な動きをしたから即戦争というわけではない。相手方の望みを知つて双方にとつて納得のいく道を探す、それが外交というものだらう。その道を探らずに、急に片方が大きな力を手に入れると言うところに、納得がいかないのだ」

「これ以上話が難しくなると、学のない私にはついていけなくなりそうだと思つたけど、グレッドはそれだけ言つていったん口をつぐんだ。

「……グレッドの言つてることが本当だとして」

私はしぶしぶ前置きをすると、聞いた。

「公報紙を読んだんだけど、私は病氣で人前に出られないことになつてゐるよね。フェザーは、王太后様のお考えや、あなたがしたことを知つてゐるの？」

「……いえ。陛下にはただ、王妃様が元の世界に戻つたとだけお伝えしてあります」

「何で言わないのよ。自分が王妃を匿つてるから安心してくれつて」とグレッドは、初めて目をそらした。

「国王陛下、だからです。国を守るためになら王太后様の言つ通りになさるかもしれない。そうなさらないと、言ひ切れますか？」

私は黙つた。

そう、フェザリオンは国王だ。一番に国のことを考えなくちゃいけない。……異世界から連れて來た女のことなんかじやなく。

部屋に沈黙が落ちた。

やがて、グレッドが口を開いた。

「王太后様が何を焦つていらつしやるのかはわかりませんが、まずは今後、ダーナ・ディルスとの関係がどうなるか経過を見守つた方が良いと思います。脱走などなさらず、しばらく身をお隠しなつて下さい」

そして、入口の横に立つていたあの色素の薄い男のことを手で示した。

「彼は私の手の者で、ゾガと申します。腕が立ちますので、護衛として置かせていただきます。そしてこの修道院ですが、司祭が他の地へ移つたため現在空き家になつており、一時的な隠れ家として使用できます。村で何かあつた時は、ゾガが新任の司祭として対応いたします」

……祭司長のグレッドにとっては、各地の修道院はこんな使い道があるわけか。

「しかしここでは、仮に滞在が数年にも及ぶ場合は」「不便でしょう

から、近いうちに当初の予定通り私の……」

私は話を遮るように、首を横に強く振った。

「……シーゼ様？」

アコルがはつとしたりように、足元から私を見上げる。

「数年なんて嫌。私はなるべく早く、お城に帰りたいの。何年もかかつたら、帰れなくなると思う。だって……」

私は窓の外に目をそらして、苦笑した。

「久しぶりに会った自分の子どもに『誰?』って聞かれたら、私たぶん、この世界さえ自分の居場所じやなかつたんだって、感じそうだから」

外は曇り空で、そろそろ帰還するはずのシャンピの残照は見えなかつた。きっと今夜は、星明かりもない暗い夜だろう。

私は短いため息をつくと、グレッドとゾガの方を向いた。

「まあ、今の状況では何もできないし、しばらくはここで大人しくしてゐ。ゾガ、ね。よろしくお願ひします」

無口なゾガは、黙つて目礼した。

私は椅子を引きずつて窓の所まで行くとそこで腰かけ、窓枠にかけた両腕の上にあごを載せて、視界が窓でいっぱいになるようにした。少し疲れだし、外を眺めながら一人で考え事をしたかったのだ。後ろで、グレッドの抑えた声がした。

「メイラーと、アコル、だな。聞いての通りだ。ここでゾガとともに王妃様をお守りするなら、メイラーに武器を返す。そなたたちも望むところであるうし、こちらも動かせる人員が少ないのでな」

少し間があつて、メイラーとアコルが了承の意を返したらしい。人の動く気配に続いて、金属音がした。エン gland の宿からメイラーの長剣もちゃんと運んであつたんだろう。私を守らせるために二人を連れて來たんだ……と、頭の片隅で納得した。

翌日の真昼 “ソレスの睥睨<sup>へいがい</sup>”と呼ばれる時間あたりまで、グレッドは修道院に滞在していた。でも、私が何も彼に質問しないし、

彼にも色々と仕事があるのだろう、

「数日後にまた時間が取れますので、こちら伺います。何かありましたら、ゾガを通して連絡を」と言い残して王城に帰つて行つた。ここは王城からだいたい馬で半日の距離にあるらしい。

「ねえ……ダーナデイルス王国とハーヴェステス王国つて、大昔は戦争をしていたけど、今は普通に国交があるのよね」

私が聞くと、メイラーが答えた。

「はい。戦争があつたのはもう数百年も前、十代国王の頃ですね」「どちらかが勝つて終わつたの？」

「ハーヴェステスが勝つた形ではありますだが、終戦時にはどちらの国も疲弊していて、復興にはかなりの歳月がかかつたそうです」「そういえば」

アコルがお茶を淹れてくれながら言つた。さすが小姓喫茶の人気小姓だけあって、彼が淹れるお茶はとても美味しい。

「初めて異世界からの王妃召喚が行われたのも、その頃ですよ。確か十一代国王が最初じゃなかつたかなあ」

「ええ？ 最初がピンゾロ？ まさか、最初がそうだつたからその後もゾロ田とか変なキリ番で召喚やつてるんじゃないでしょうね」

「さ、さあ。その頃の記録は戦後の混乱であまり残つていないそうで……」

「ふうん」

私はショルダー・バッグを探ると、お茶菓子代わりに例の非常食のお菓子を取り出した。缶にいつぱい詰めてあります。

「何で召喚が伝統になつたんだろうね。最初に呼ばれた異世界人が、戦後の復興に何か貢献したのかな……まあ、それはともかくとして

お菓子の缶をメイラーに差し出す。今度は彼も一つつまんだ。

「王太后様が、ダーナ・ディルスの聖樹復活を警戒なさってる、って話が本当だとして。それならダーナ・ディルス側だって、聖樹のあるハーヴェステスをずっと恐れて来たはずだよね」

「そうですね。向こうから外交の特使が来るたびに、聖樹を視察して行かれてましたよ、確か」

アコルもお菓子をカリカリ。メイラーはお菓子を飲み込んで、「俺が思うに、ダーナ・ディルスは聖樹復活と同時に、ハーヴェステスと同等の地位に立とうとしてるんじゃないですかね。だとしたら軍事的な動きは、これから外交を優位に進めるための示威行動に過ぎない。まあ、無茶な要求を言ってくる可能性は無きにしも非ずですが」

と言った。

「そつか。即戦争かと思つてちょっとびびつたけど、そうだよね、戦争なんて大」とをそうそう簡単にあがつ！」

私は口元を抑えた。

「ど、どうされました」

「なんか噛んら。…………」

私は口元から手を降ろすと、お茶を飲みながら黙つて物思いにふけつた。

主が不在の、王妃の居室。

余はテラスへ出る窓を開けると、外を眺めた。すでにニコイスの支配する時間で、星明かりが王妃の庭をぼんやりと照らしている。この所、隣国ダーナディルスの動きがきな臭く、軍事や外交、魔法院などの係官との協議に忙殺されていた。それでも今日は早めに執務室を出ることができ、夕食も簡単に済ませてこつしてシーゼの部屋にやって来たのだ。

灯りを調節し、飲み物を置いた女官長が、余に気を遣つて静かに礼だけを取つて出て行く。扉が閉まる前に、無意識にかため息をつくのが聞こえた。女官長は王妃が元の世界に還つたと聞かされているので無理もない……王妃がいないとこの部屋は、いや宮全体が、灯が消えたようだ。

余は居室の中を見まわした。

シーゼが姿を消し、グレッドの言動に疑惑を持つてから、余は密かにこの場所全体を探索したのだ。棚の引き出し、書き物机の中、続きの衣裳部屋。隣の寝室に移つて寝台の下、小卓の引き出しなど細かいところまで。

そして、やはり「あれ」がない、と確信した。

シーゼが懷妊して、しばらく経つた頃だった。

珍しく早めに執務を終えた余は、シーゼと小広間で夕食を取つてから連れだって夫婦の寝室に入つた。

寝台の脇にある小卓の引き出しを閉めた侍女が振り向き、こいつ言った。

「王妃様、フエタロンこちらにお入れしました」

フエタロンとは庶民的な焼き菓子の名前だ。本来は祭の時などに子どもに配られるもので、食べた時に中に宝物を模した陶器の小物が入ついたら幸運が訪れる、というもの。事前に大量に作つて用意しておく習慣があるため、日持ちがするのが特徴で……日持ち？

王妃が侍女に礼を言った。

「あ、ありがと」

「ほどほどになさつて下下さいね、お医者様にしかられますよ」  
侍女が着替えを手伝つてから「おやすみなさいませ」と出て行く  
と、余は寝台に腰かけてシーザを見上げた。

「…………シーザ。なぜ菓子を寝室に？」

「いやー、妊娠したら何だか夜中に急にお腹がすいちゃって」  
彼女は軽く腹をさすつた。そこは最近ようやくふつくらとして  
ている。

「といふことにして逃亡用非常食の用意をするのはやめよ」

余が看破すると、彼女は小さく舌を出してから、大きな動作で腕  
を組んだ。

「だつて！ こっちの人は非常用持ち出し袋を用意しておく習慣はないわけ？ カンパンとか氷砂糖とかレトルトの『』飯とか、そういう系の保存食を。なんかないと落ち着かないのよっ」

「干し肉や干し果物などなら城に備蓄がある。王妃が個人的に用意  
することはない」

「いいじゃない、逃亡準備は趣味よ趣味。美味しいし。たまに食べて新しいのに替えてもらつんだー」

「身『』もつておるのに、逃げることなど考えるのはどうなのだ」

「実際には逃げないって。それに、妊娠はそりやあ幸せなことだけ  
ど、それだけで私の人生できるわけじゃないし」

「そうではなく、身『』もつておる時はもっと心を穏やかにだな」

「穏やかになるからやつてるの」

「生まれた子どもが、母親がどこかへ行つてしまおうとしている」と

思つた'がじゅあるへ。」

「ぐつ……」

詰まつたシーザーに、余はやうに諭した。

「「」の菓子を見るたびに、自分の居場所は「」だと想い出す」とだ

「……そろそろ黙らないと襲うわよ」

余はひとまず口をつぐんだ。まあいい、「」の件は後で侍女に言つて、菓子の中」……。

気配を感じて顔を上げると、シーザーがゆっくつと余に近づいて膝にまたがつて来るところだった。黒髪がやうりと肩から落ちる。

「……なんだかムラッと来た。黙つても襲おうかな」

「妊娠中に……」

「お医者はダメとは言わなかつたよ。します」

余はあわてて彼女を抱き寄せると、身体をひねつて寝台にゆっくりと横たえた。放つておくとどれだけ勇み立つかわかつたものではない。こいつの時は「」が主導権を握らねば。

「え、フローザー？」

「……そのままじつとしていなさい」

「ど、どしたのそっちから……珍しく積極的」

シーザーは目を見張り、急に頬を赤らめた。そんな表情を見せられると、こちらも思わず……。

「放つておくとそなたが無理をするから……そなたこそ珍しく照れているな」

「そんなことないよつ。フローザーだって耳が赤い……」

「シーザー」

「ん」

はつ、と余は我に返つた。思に出で漫つてこいる場合ではない。

問題は、彼女が用意していたはずの『非常用持ち出し袋』とやらないということだ。城内にいくつかある王族用の逃走経路も、何日かけて密かに確認したが、それらしい荷物はなかつた。

あれの存在は、おそらく余しか知らないはず。すると、シーザーが自分の意思で持ち出したことになりはしないか？ 少なくともそれだけの余裕はあつたということだろうか。

魔方陣のあたりで消えるシーザーを傭兵が見ているのだから、彼女は帰還したか祭壇の裏から逃走したかのどちらかだ。帰還してしまつたなら余にはどうしようもないが、逃走したならグレッドが偽りを言つてことになる。魔力の備蓄具合から言つても、その可能性は高い。

仮に逃走したとしよう。その場合、グレッドはどんな立場で偽りを言つたのか。グレッドがシーザーの味方なら、城を出たいと言つた彼女に手を貸したことになるから、無事さえ確認できればひとまずは安心だ。

しかし、もし敵なら……。もつシーザーには追われる辛さを味わせたくない。彼女の居場所であるこの城に戻してやりたい。

そこまで考えた余は、グレッドの謹慎を解き、密かに見張りをつけた。そしてつい先ほど、報告が入つたのだ。

グレッドが過疎の村の外れの修道院に行つたこと、そしてそこに数人の男女がいること。彼らは夜などに時折、外の空気を吸いに出しているようで、無理に監禁されている様子ではないこと。

男たちの特徴を聞いて、余はそのうちの一人が、元王妃の近衛兵のメイラーと元魔法官見習いのアコル少年だとあたりをつけた。それならば、髪の色は確認できないが、女はおそらく……シーザーだ。

無事だったと、そしてこの世界に彼女がいると知つて、余は自分でも驚くほど安堵した。

しかし、探して居場所がわかつたからと黙つてすぐに連れ戻せばいいというものではない。問題はそこだ。

なぜシーゼが城を出たのか、そしてなぜシーゼもグレッドも余にその事実を隠しているのか。必ず理由がある。彼女がこの城にいられない理由が。それなら、余はそちらの問題を片づけなくてはならない。

この城を、彼女にとつて安全な、子どもと平和に暮らしていくける場所にしなくては、彼女は戻つて来られないのだ。

ふつ、と意識が目の前に引き戻される。ずっと王妃の庭を眺めながら考え事をしていたのだが、景色が目に入つていなかつた。

庭には小さな花壇が作つてある。シーゼが「元の世界では庭なんか持てなかつたから、何か育ててみたい」と黙つて、庭師に手伝わせて作つた花壇だ。

しかしやはりあれのやることは大雑把で、大雨の翌日にどこからか折れた木の枝を拾つてきて、「これ挿し木したら根付かないかな」と花壇の真ん中に突き刺していた。王妃が植えたものを枯らすわけにはいかず、庭師が必死で世話をしたのを彼女は知つているのだろうか。

しかも無事に根付いたそれが葉をつけると、庭師はその葉のように青くなつた。その木が、聖樹の枝だと気づいたからだ。

「シーゼ。聖樹の枝が何らかの理由で折れた時は、儀式の際に焚くために魔法庁で保存される。勝手に拾つて来て植えてはいけない」庭師を哀れに思った余が呆れて諭すと、彼女はあわてて庭師を含む各方面に謝りに走つていたな……。

余はため息をついた。

メイラー、アユル、王妃が無茶をしないように頼む。

## 20 王妃様は潜伏中（前書き）

あとがきにひょっとしたクイズがあります。この20話を読んでからチャレンジ

グレッドが王城に戻つて行つてから、一夜が明けた。

小さな修道院での生活は、悪くはなさそうだ。王城の関係者に見つかると王太后にバレる危険があるため しつこいようだけど、グレッドの言い分を信じるとしての話ね おおっぴらには人目のある場所には行けないけれど、建物から出られないわけでもない。この建物はコの字型になつていて、中庭があるんだ。そこに出る分には防風林が目隠しになつて外からは見えにくいし、私も外に出る時はちゃんと変装するようにしている。昨夜は建物の正面側の広い場所に出て、ちょっと身体を動かしたりもできた。夜なら、こっちには赤外線カメラとかはないから見られることはない。

食事は何度かゾガが作ってくれて、そのうちアユルが手伝つようになった。メイラーは買い出し担当。王妃を守るという同じ目的を持つているなら協力し合いましょう、という雰囲気だ。といつても、相変わらずゾガがしゃべらないので、和気あいあいとは行かないけどね。

ゾガは本当に静かで、気配を感じさせない。私が中庭に出て外の空気を吸つて、さあ戻ろうと振り返るとその辺に立つていたりする。最初はびっくりしたけど、空気のように存在感がないので割とすぐに寛れた。

一方、私自身は何もやることがない。何か手伝おうとすれば「恐れ多い」とか言われるし、何もしないでボーッとしていれば気を遣われるし。王妃つて本当に潰しのきかない職業よね。いや、潰れないよ、まだ一応王妃だけどさ。

結局、交渉の末に無理矢理「風呂掃除」の仕事を勝ち取つてみた。私は日本にいた頃から、割と掃除が好きなのだ。私みたいな大雑把な性格でも、失敗が少ないからね。

夕食も済み、入浴（ちなみに薪を焚くタイプのお風呂）も済ませた後、私は居間でアユルに髪をとかしてもらっていた。

髪は日本でも伸びていたけど、こちらの世界でも『異世界人王妃のアピールのため伸びす』ってお城の人々に言われて、常にお尻のあたりまでの長さに保っている。でも手入れが大変で、こんな状況なんだし切っちゃつても……と思つたけど、アユルに

「王妃様の髪にも、やはり多少は魔力を感じますね。切つたらもうたいないですよ」

つて言われたので、ついワクワクしてしまつてそのままにしている。私が魔法を使えるわけじゃないんだけどね。

居間にはメイラーもゾガもいて、それぞれここに置いてあつた歴史書を読んだり、窓から外を見張つたりしていた。

私は瞬きをしないようにして、じつとしていた。

「終わりましたよ、シーザ様。もうお休みになりますか？……シーザ様？」

アユルは私の顔を見て、ハツと息を飲んだ。私が、瞳に涙を溜めているのを見たからだ。メイラーとゾガも振り向く。

私は片手でちょっと顔を隠すようにした。

「ご、ごめん。なんか寂しくなつちゃつて……。メイラー、アユル、今日は一緒に寝てくれない？」

メイラーはポカンと口を開け、アユルは「わかりました」とすぐ櫛を片づけた。私は鼻をすすると、立ち上がって寝室の方に歩きかけて、ゾガを振り返つた。

「何か心配なら、ゾガもこつち来る？」

ゾガは表情こそ変えなかつたものの、返事するまでに少し間があつた。

「……………いえ

だよね。よし。

寝室で三人になると、私はさつたびベッドに腰かけて二人を手招

きした。アユルは心得たように私の足元の床に座り、メイラーは少しだめらいがちにだけど黙つてベッドサイドの椅子に腰かける。

ふつ、トランプの明かりを吹き消すと真っ暗だ。私は一人の肩に軽く手をかけ、顔を寄せると、ゾガに聞こえないようにささやいた。「女の涙を信じるかどうかは個々の判断にお任せするけど、私の涙は信じちゃダメだからね」

「…………本当ですか？」

メイラーの声が聞き返していくると同時に、アユルのぼつそりした手が遠慮がちに私の手に触れた。心配してくれるんだ。

「本当だよ」

私はすぐに答えた。……真つ暗闇で良かつたかも、と思しながら話を進める。

「ところで、そろそろここから逃げたいんだけど」

「はー?」

「『しばらくはここで大人しくして』んじゃ?」

メイラーとアユルが闇の中でさわやかのに、私はびっくりして答える。

「しばらく大人しくしてたじゃないのー 丸一日」

「短っ」

そうかなあ。

「だつて、このままじゃ埒が明かないじゃない。グレッジの言いつことが本当だつて信じていいかさえ分からないんだよ?」

「それはそうですが……祭司長のお話にはかなり信憑性があるのでないかと。本当なら、王太后様の手の者に見つかったら大変危険です」

「それに、眞偽をどう確かめるんです? もしかして策がありなんですか?」

二人がひそひそと聞いて来る。

「一応ある。詳しい人に事情を聞きに行けて、なおかつ王太后様の

思つてもみない場所に行くといつ策」

私は胸を張つた。

「フェザーに聞きに行けばいいのよ。王城に」

「どうやつて!?

メイラーがぐつと身を乗り出す。だんだん目が慣れて来て、二人の輪郭が見えてきた。

「私が逃げた時の王族用逃走経路を、逆にたどればいいじゃん。王城の裏の森から聖堂の祭壇につながるルートを行つて、いつたん聖堂の外に出ると、今度は聖堂の裏庭から城の中へ入るもう一本のルートがあるんだよね」

私が夜に散歩に出た時のルートだ。

「し、シーゼ様、しかし陛下はもしかしたら王太后様と同じお考えかもしねい、と……」

「それなんだけどね。そりや、私たちは愛し合つてる夫婦かつて言つたら微妙かもしだいけど、いきなり手のひら返したりはしないと思つの」

私は左手を伸ばしてそつとカーテンを開き、星明かりを部屋に入れると、右手を開いた。

「これが、お菓子の中に入つてたから」

一人が覗き込む。

私の手のひらで、一センチ四方くらいの小さな陶器のタイルが白く光つた。そこには、可愛らしい赤ちゃんの絵が描かれている。

「これ、たぶんフェザーが厨房の誰かに言つたのよ。フェタロンの中に入れろつて」

「陛下が?」

私はうなずき、カーテンを元に戻した。部屋は再び暗くなる。

「へへ、私が逃げる話ばかりしてるから、母親がどこかへ行つてしまつて子どもが思つたらどうするんだつて怒られたんだ。あの、それを思い出させようつと思つて、これを仕込んだんじやないか

な。自分の居場所はここだつて思い返せ、って言われたし……」

私はちょっと黙つて息を整えてから、笑つてつけ加えた。

「可愛いよね、この赤ちゃんの絵。……似てる」

「……王太子殿下に、ですか。ぜひお会いしてみたいですね」

メイラーが優しく言つてくれて、私はうなずいた。

「そうだよ、メイラーは妊娠中の私を守つて怪我をしたんだから、この子も守つてくれたつてことだもん。必ず会わせるわ

「お名前は何とおっしゃるんですか？」

アユルに聞かれた。

「あ、アユルは知らなかつたんだ。ワインガリオンって言つんだよ。非公式には、日本名もあるんだけどね」

フェザーに言われて日本名もつけたんだ。あれも今にして思えば、子どもに自分で名前をつけて慈しむことで、私が逃げることなんか考えないようになつて仕向けたのがもね。ハハハ。

「王妃様の世界の言葉で？ 何とおつけになつたんですか？」

アユルに興味津津で聞かれたけど、私は笑つてごまかした。

「なーいしょ」

## 20 王妃様は潜伏中（後書き）

遊森の自己満足お遊び企画・連載1ヶ月&20話記念クイズ ウインガリオンの日本名と、王妃がその名前をつけた理由を当てて下さい！

ヒントその1・遊森の名づけ連想…「羽」 フエザー フエザリオン。ではウインガリオンは？

ヒントその2・王妃の性格（逃亡癖）

わかつた方は是非、拍手ボタンの非公開コメントか、なるうメッセで（↙ ↘）twitterのDMでも。正解者には……えっと、こりこり時つて何が喜ばれるんでしょうか！？

次回更新で登場人物一覧を書く予定なので、正解は一覧のウインガリオンの所に載せます 本編もできれば同時更新したいんですが、ちょっとキツいかも（＾＾；）

## 【登場人物一覧】（前書き）

20話までのネタばれを少し含みます（肝心なところは書いてないけど）。

ワインガリオンの項に、20話のあとがきで出題したクイズの答えがあります。さらに詳しい内容は12／3活動報告にて。

## 【登場人物一覧】

召喚時はすべてマイナス2歳です。

### シーゼ（静子）

24歳女性 髪…黒 瞳…黒 一人称「私」

ハーヴェステス王国の第123代国王妃……として召喚された日本人。日本では、大物政治家と有名女優の間に生まれた隠し子としてマスコミに追いかけ回されていたため、異世界への召喚を大歓迎する。追われる生活が身に染み付いてしまい、王妃となつてからも常に逃げる準備をしておかないと落ち着かず、逃走経路確保から非常用持ち出し袋まで抜かりはない。元陸上部（幅跳び選手）なので逃げ足もなかなかのもの。

男前なほど豪快で肉食系、潔くさっぱりした性格だが、やや刹那的に物事を考えるきらいがある。異世界でようやく自分の居場所を得つつも、所詮その幸せは長く続かないという気持ちが残つており、そしてある日……。

旧姓の名字？ 名字は……<sup>くにえだ</sup>国枝。今決めた。母方の祖母の名字で、国枝静子さんです。

### フェザリオン（フェザー）

27歳男性 髪…白銀 瞳…青紫（群青） 一人称「余」

ハーヴェステス王国の第123代国王、フェザリオン・ハーヴェス。「節目の代の国王は異世界から王妃を召喚する」という伝統にのつとり、静子を召喚し正妃にする。父は先代国王、母はその第二夫人で、ともに故人。父の代に王妃の座を巡る争いを見て育つたため（フェザー本人は父の即位よりも前に誕生）、自分が異世界人を妻にすると元々決まっていたことを歓迎している。

淡白で穏やか、国王としては平凡だが、基本的に真面目なので仕事

はちゃんとやつていい。静子に「シーザ」という名前を贈り、故郷から引き離された女性を大事にしなくてはと密かに心を砕き見守る。妻の性格をかなり把握しているようだが、新婚にしては情熱に欠けるところがあり、静子は物足りない様子。

### グレッド

30歳男性 髪：真っ白 瞳：ワインレッド 一人称「私」  
ハーヴェステス王国の祭司長。召喚の儀を取り仕切った人物。聖職者の割に鉄面皮で冷たい印象の言動をし、小言も多い。若くして自分を取り立ててくれた王太后に頭が上がらず、『国王よりも王太后の意見を重んじるところがある。

とある理由で、王太后から王妃を元の世界に還すように指示され、シーザを魔法陣に追い込もうとしたが、実はその魔法陣は……。逃亡した王妃をようやく捕え、また小言攻撃してうざがられる。

### マイラー

33歳男性 髪：オレンジがかつた白 瞳：濃紫 一人称「俺」  
いい加減な仕事をする不良騎士だったが、王妃の近衛兵となつてからは彼女に忠誠を尽くす。王妃のことを、主というよりは『守りたい女性』として見ている節がある。暴漢から王妃を守つた際に負傷、後遺症が残つたため職を辞し、故郷で予備役として警備隊の顧問職をしていた。重い長剣を扱えない代わりに別の武器を訓練したもの、徐々にストレスがたまつて不良騎士に逆戻り……そんな折、城から逃亡した王妃が真っ先に彼を頼つてやってくる。良かつたねメイラー！

### アユル

15歳男性 髪：ブルーがかつた白 瞳：アメジスト色 一人称「僕」

魔法官の素質があつたため、見習いとして孤児院から魔法庁に引き

取られた少年。少女と見まごうのような美しい外見のため身辺にトラブルも多く、本人も仕事に魅力を感じられず辞職する。清濁併せのムタイプの素直さを持ち、いつかやりたいことを見つけた時のため貯金しようと、特殊な喫茶店（笑）に再就職。もうすぐ16歳（成人）なので一人暮らしをしようと思っていたところ。

国王夫妻がお互いの気持ちをわかり合っているのを見て理想化しており、城から逃亡した王妃が自分に会いに来て大喜びするが……。王妃がかぶっているカツラ（つけ毛）はアユルの髪。魔法知識のない王妃のブレーン。

## ゾガ

二十代前半男性 髮…真っ白 瞳…ごく薄い紫 一人称「私」  
グレッドの個人的な命令で動く僧兵。無口で無表情、空気のような雰囲気だが、腕は立つ。アユルを人質にして王妃を捕え、グレッドと引き合わせる。

## レレイザ

50代後半女性 一人称「わたし私」

先代王妃。貴族の娘で、親やライバル貴族の思惑の入り乱れる中、正妃の座に就く。子には恵まれなかつたが、先代国王とは戦友ともいうべき間柄で、数々の政策を実現してきた。ハーヴェステスでは現在でも崇敬の対象になつてている。

## ワインガリオン

0歳3ヶ月か4ヶ月くらい 髮…黒 瞳…黒 一人称不明

フェザリオンとシーザの息子で王太子になる予定。名付け親は王太后レレイザ。生まれて間もないが、目つきが悪いらしい。

非公式だが、静子が「翼」（ひばり）という日本名をつけている。表向きは、世継ぎとして世界に羽ばたく子になるように！ ということになっているが、実は「翼があつたら逃げやすいもんね！」というノリ。

後に、フェザーが日本名をつけるように言つたのは静子に子どもと落ち着いて暮らしてほしいからだとわかり、「やつべ、てへペろ」というわけでアコルに日本名を聞かれても、ついごまかしていました。

遊森的にはフェザーが「羽」なのでそのつながりで考えたんですが、クイズに寄せていただいた解答を見てびっくり！ フェザー「羽」+静子「異」世界人」「翼」！ 全然気づいてなかつた！！！

### この世界の神々

- ・ソレス……太陽神で兄神。正統派オレ様。象徴する方角は南。ソリア
- ・ニュイス……星と夜の神で弟神。腹黒系オレ様。象徴する方角は北ニュニア
- ・ドイリ……暁の女神。委員長タイプ。象徴する方角は東トイア
- ・シャンピ……黄昏の女神。小悪魔系妹キヤラ。象徴する方角は西シャニア

ちなみにこの世界に月はありませんが、星がかなり明るく星明かりで夜道を歩けます。星々はニュイスの眷属。

全て空にまつわる神で、この世界の人々の瞳が紫系なのは暁と黄昏の空をイメージしています。もつと生活のあつこつちに空にまつわる言葉をからませたいと画策中。

## 【闇話】逆ハーレム（アコル案）

僕は手を伸ばすと、ほんの少しだけカーテンを開けた。

「コイスの眷属である星たちが、白い光を投げかけて床に線を描き、寝室の様子がうつすら見えるようになる。」

シーゼ様は寝台で、柔らかな表情でお休みになつている。さすがに眠るときは僕の髪のつけ毛はしておらず、黒髪が枕から流れ落ちていた。右手をきゅっと握りしめ、胸のあたりに寄せている……どんな夢を見ていらっしゃるのだろう。

黙つてシーゼ様に見とれているメイラーさんの腕を、僕は軽くつづいた。彼は我に返つたようにこいつちを見る。しおづがないなあ、このおじさんは。

「で、どうやつて実行します？ シーゼ様の案」

床に敷いた布団の上に座つた僕がささやくと、メイラーさんは寝台の脇の椅子から降りて僕の隣に腰をおろしながら、

「アコルは賛成なのか？」王城に忍び込むといつ案にて

とひそひそ聞いてきた。やや困惑した表情の彼に、僕は肩をすくめて言つた。

「今日メイラーさんが買い出した行つてるとき、これからどうじゆうつて話をしたんですけれどね。シーゼ様、なんておつしゃつたと思ひます？」

「？」

「『はー、私は夫と子どもと一緒に平和に暮らしたいだけなんだけどなー。あつ、そうだ』」

僕はシーゼ様の口まねをして言つた。

「『夫が王様で子どもが王子様なんだから、王様と王子様を取り返そつて考えなきゃいけなかつたんだ。つまり、反逆ね！』」<sup>クーデタ</sup>

ガクンと顎を落としたメイラーさんを横目に、僕はもう一度、肩をすくめた。

「ね、王城に忍び込むだけの方がマシでしょ。シーゼ様、放つておいたら何を思いつかれるかわからないですよ」

あのゾガさんさえシーゼ様の言葉を聞いた瞬間、剣の手入れをする動きが完全に止まつてたからね。

まあその後で、シーゼ様ご本人が

「あつ、そうすると私が女王やんなきやいけないのか。政権はいらないわやつぱり。父親みたいなのは勘弁」

とつぶやかれてたけど。シーゼ様のお父上って、政治家なのかな？

「…………まあ…………実際、グレッジ様のおっしゃる」ことが本當かを確かめたいのもそうだが」

メイラーさんは痛めている左足をのばし、右膝を立てて腕で抱えるようにした。袖をまくった腕は、手首から肘まで筋肉がきれいな線を見せていて、ちゃんと鍛えてるんだな。

「王太后様が隠していらっしゃることも気になる」

「あの、『正妃の座が空けば』っていう？」

僕が聞くと、メイラーさんはうなずいた。

「シーゼ様が正妃の座から降りたら、代わりに誰かがそこに座ると言つことになる。王太后様には、その女性についてのお考えがあるところ」とだらうか

「うーん……フェザリオン陛下なら、おわかりになるのかな」

僕はシーゼ様に目をやつた。長いまつげが影を落とし、肌の白さが浮き立つ。

シーゼ様が陛下に「私の代わりに誰を妻にするのか」と聞いているところを想像して、僕はシーゼ様が可哀想になってしまった。僕なんかがお慰めできるんだろうか……。

メイラーさんは続ける。

「ゾガは、俺たちが王城に行きたいなどと言つたら反対するだろうな」

「たぶん……即反対じゃなくても、グレッド様にお伺いへらには立てますよね」

「グレッド様がもし嘘をついているとしたら、それはまずいな」右膝にあごをのせるメイラーさんに、僕はきっぱりと言った。

「グレッド様信じて打ち明けるとしても、あの人は絶対反対すると思いますよ」

「……そうか？」

「だつてあの人、シーザ様のこと好きですよん」

「はあ？」

メイラーさんが目を見開いてこっちを見る。

「見たでしょ、ここにきて王妃様の無事な姿を見たときの顔。あれでやつとわかつたんだ、この人、王妃様のこと好きなんだって」僕は布団の上にうつ伏せになると、肘をついて星明かりを見上げながら口を曲げた。

僕、もしシーザ様がお城に戻れなくなつても、シーザ様とグレッド様がそななるのだけは絶対反対だからね！

「王城にいた頃、シーザ様のこと見張つてゐみたいにチラチラ見てるのがいやな感じだと思ってたんだけど、好きだからだつたんだ。納得。王妃様を自分の実家に囲つておいたら、そのうちシーザ様もグレッド様を頼るようになつて……とか？ うわあ嫌だ嫌だ。あ、シーザ様に小言っぽいこと言うのは、その気持ちを隠したいからかも」

「し、しかしグレッド様は聖職者で」

「それは僕の経験上、理由になりません。それに、肉欲じやないとしたつて精神的にでも」

「……」

もはや一の句が継げないメイラーさん。僕はため息をついた。「何だかさつきの、王妃様が反逆する話、結構いいなあと思つちゃいました。シーザ様が女王になつたら、祭司長のグレッド様が囲うなんてできないし。女王様が誰か男性を囲うならわかるけど」

「ま、待てアユル」

「小姓つていう職業が、今も実際にあつたら良かつたのにな。侍女だけじゃなくて。シーザ様が女王様になつたら、小姓職を作つてもらつておそばに置いてもらおうかな」

昔は高貴な女性が小姓をそばに置くこともあつたみたいなんだけど、今は少年とはいえ男をそばに置く文化はないんだよね。ま、だからこそ『ひたむき』が儲かるんだけど。

僕はメイラーさんをちらつと見上げた。

「メイラーさんもシーザ様のおそばにお仕えしたいでしょ？　あ、女王様つて後宮持つのかな。第一の夫はフェザリオン陛下だとしても、第一は……」

「ぶつ……！」

「ね、いいと思いませんか？　王城に忍び込んだら陛下と王子様を連れ出して、どこか別の場所で女王政権を宣言…」

僕が笑うと、鼻のあたりを押さえていたメイラーさんはじりりと僕を睨んだ。

「…………」の国にどれだけ王太后派がいると思つてゐる。いい加減にしる

へへ。調子に乗りすぎました。

ぎしづ、と床がきしむ音に、僕たちは黙つた。隣の部屋で、ゾガさんがまだ起きているらしい。

メイラーさんは一度深呼吸すると言った。

「……話が逸れたが、つまりゾガには王城行きを反対される、当然グレッド様には内密に行動する前提で考えるぞ」

彼はすぐに頭の中を切り替えたらしい。さすがは騎士様だ。

「はい。じゃあ？」

「そうなると、打つ手は一つしかないだら」

メイラーさんはちらりと扉の方を見た。

「ゾガを捕らえて、連れていく」

朝食が済んだ後、時間を持て余した私は、テーブルでこの国の歴史書を広げていた。

王妃教育の時にもこんなような本は読んだけど、あの時は本当にただ知識として知つておこつゝ、という程度の気持ちだった。でも今は少し違う。

ハーヴェステスで初めて召喚が行われたのは、第111代国王の時だとアユルが言っていた。自分は第123代国王の王妃。その間には、ざつと千五百年の歴史がある。

いや、厳密に言つとこっちの一年とあっちの一年は長さが違つて、こっちの一年の方がほんの少し長いみたいだ。とすると誤差があるから、初めて召喚された人は西暦で言つと……。

まあいい。電卓ないし。西暦五百生まれとか六百年生まれとか、そんなもんでしょ。

とにかく、私の世界から呼ばれてくる人は、人種も文化もさまざまらしい。九十九代と百代とか、短い間隔で召喚された同士で会つこともあつたみたいだけど、それで何か特別な出来事があつたとは本には書かれていない。

不思議なのは、誰ひとりとして元の世界に還つていないとこの点だ。グレッドは、「理論上は帰還陣もある」と言つていた。誰も試さなかつたんだろうか？

うー、知恵熱が出そう。本を閉じると、私は伸びをした。

昨夜は寝室での話の途中でゾガの気配が気になつて、静かにしているうちに私がぐーすか寝てしまつた。そろそろゾガも私の性格がわかつてきちゃつたから、あまり何度もウソ泣きは使えないな。今夜もう一回だけ一人を寝室に連れ込んで、今後のことを相談

しておかないと。

今、メイラーは農家に買い出しに行っている。もつ買い出しは彼の担当っていう感じだ。ゾガはグレッドの命令で私のそばを離れるつもりはないようだし、アユルは目立っちゃうからね。そのアユルは外で薪割りをしてくれてるみたいで、パン、パン、といい音がしている。ゾガの姿は見えないけれど、必ず近くにいるだろう。ゾガは私の護衛をしてくれてるけど、グレッド派だからね……まだ信用しきるわけにはいかないよね。ちょっと話してみるか。

居間のドアから外に出るとレンガ敷きの外廊下があつて、降りたところが中庭になつている。柔らかな日差しが木々の薄い影を落とし、陽だまりに咲く小指の爪くらいの小さな花をわずかな風が揺らしていた。トカゲが一匹、井戸の石の隙間をちよろりと走つて姿を消した。

今の気候は、こちらでは冬が終わつて春めいて来た所、という感じ。ただ、寒さがあまり厳しくない地方なので、私の感覚ではこのところずっと春みたいな日々だ。

少し中庭を眺め、そして振り向くと、やつぱりいつの間にか背後にゾガが出現していた。白昼のお化けみたい。

「ねえ、ゾガつて普段はどんな仕事してるの?」

「ほん、と尋ねてみる。ゾガは無表情のまま。

答えてもらえないのかな、と思つた頃に、ぼそっと返答があつた。

「聖堂の警備を」

「王城の聖堂?」

聞くと、うなずく。聖堂や修道院に属する人たちは、王城で働く人たちとは別系統で働いていて、王家人間でも安易には踏み込めないところがあるとかフェザーが言つてたな……そこにグレッドを据えた王太后様はさすがつてところか。

「祭司長様のご命令で動いています」

そのことを裏付けるように、ゾガが淡々と言つた。

「うん、わかつてる。私の言うこと聞けーなんて言わないよ」

私は笑つて井戸の縁に腰かけた。

「で、どうよ、あの陰険男。『』を使われてない？ お給料ちゃんと  
もらつてる？ ねちねちイヤミ言われたりしない？」

「…………」

ゾガは黙つている。…………げ、しまつた。

「あつ、ゾガの上司を悪く言つちやつたね。『』めん」

思わず顔の前で両手を合わせる。

いかんいかん、私の感覚では、グレッドの悪口言い合つてゐるうちに“同じ敵を持つ者同士は味方”みたいな雰囲気にならないかと思つたんだけど！ ゾガがグレッド好き好きだつたら悪いことしちやつたよね！

「いや、だつて聞いてよ、あの人つて王妃教育の時に『王妃様、その食堂のおばさんみたいな言動はどうにかなりませんか』って言ったのよ？ 食堂のおばちゃんの前で同じことが言えるのかつづーの、失礼だと思わない？」

言い訳してみたけど、ゾガは黙つて私を見つめ返しただけだった。  
氣まずくなつた（？）その時、修道院の玄関側のドアが開く音がして、メイラーの呼び声がした。

「ゾガ！」

ゾガが目礼してからステップと居間に入つて行き、私も後からついて行つた。ちょうどもう一つのドアからメイラーが入つて来て……。

「ど、どうしたのメイラー！ 足！」

彼は軽く息を切らせ、左足を引きずつている。

「いえ、足はたいしたことありません。ちょっと疲れて

「馬車で行つたよね？ 何があつた？」

「それが、帰り道で馬が急に暴れて。何か動物が前を横切りでもしたのかかもしれません。一頭が逃げ出したのをどうにかつかまえて木につないだんですが、俺の足ではそれが精一杯で……かじ棒が折れ

ただけで馬車は無事なんですが。ゾガ、案内するから馬車につなぎ直してくれないか」

ゾガがちらりと私を見たので、私は答えた。

「私も行こうか？一緒にいた方が安心だし」

そこへアコルが顔を出したので留守番を頼むと、私たちは外に出た。

馬車は一頭立てで、もう一頭の馬はメイラーが乗つて帰つて来ていた。その馬に私とメイラーが一人乗りしてぼくぼくと進み、ゾガは歩いて現場に向かつ。

しばらく進むと村道の脇に馬車が放置されていて、メイラーはそのままの辺りから村道を降りて林の中に入つた。少しして、木々のまばらになつたあたりに一頭の馬がつながれているのが見えた。ゾガが無言で馬の方へ近づいて行く。

先に馬を降りたメイラーの手を借り、私が馬から降りると、ちょうどメイラーの両腕の間に入り込む形になつた。長身の彼が背後から頭を下げ、私の耳元にささやきが降つてくる。

「シーゼ様、ここから動かないで下さい」

思わず振り返ると、すぐそばに濃い紫色の瞳。彼は軽くうなずくと、私から離れた。私は馬の手綱を握つたまま、黙つて言つ通りにした。

それからの出来事は、本当に一瞬の間だった。

ゾガが馬を解き放とうと、木に結ばれたロープに手をやつた。そして、何か気配を感じたのかこちらを振り向く。

私の前に立つていたメイラーの両手が、しなるようになつて動いた。空氣を切る音がして、ゾガの身体がいきなり木の幹に背中から倒れこんだように見えた。

ゾガの服の数か所が、ナイフで木に縫い止められている。彼は即座に振り切ろうとしたけど、それだけの時間があれば十分だったら

しい。サツと近づくメイラー、こもつた衝撃音、低いうめき声。メイラーは素早くナイフを抜いてゾガを足元に抑えつけ、瞬く間に彼を縛り上げた。

「これで、ゾガを連れて、グレッド様に知られずに、王城に行けます……つと」

メイラーが作業を終えると、ゾガは片頬を地面につけたまま、低い声で珍しく悪態をついた。

「悪いな」

メイラーがちらりと彼を見下ろす。

「な、投げナイフ……？」

私が呆然としてつぶやくと、メイラーは微笑んだ。

「足を痛めて予備役にはなりましたが、投げるだけなら座つたままで訓練できましたので」

ふわあ、と私は変な声を出して感心してしまった。

メイラーが言つてたもう一つの武器つて、これだつたんだ。彼の足では、腕の立つゾガとともにぶつかり合つたらたぶん勝てないから、一計を案じたのね。ゾガを警戒させずに背後を壁にさせないと縫い止められないから、馬を使ってお膳立てをして……あ、ロープを結んだ位置も、ゾガをちょうどいい位置に立たせるために計算して？

気がついたら、隣でアコルがちょっと眉をひそめて様子を見守っていた。私の視線に気づくと、ふわりと微笑む。

「今から出発すれば、夜中にお城に着けますね」

荷物持つてきてるよこの子！用意周到なことでー！

「びっくりしたよー。私にも内緒にしてるなんて」

腰に手を当てるといつと、メイラーとアコルがちらりと視線を交わした。

今の視線の意味もわかつたわよ。『事前にこいつにしゃべって余計なことされたら困る』でしょ？ ふん。

## 2.1 一瞬の攻防（後書き）

年の瀬です。押し迫っています。  
更新ペースはなるべく変えたくないんですが、間が開くこともある  
かもしれません。よろしくお願ひいたします。

「コソコソ、といつ音が、夜の寝室の中にやけに大きく響いた。

窓際に立っていた余は振り向くと、部屋の隅に飾られた装飾用の水瓶に近づいた。水瓶を載せた台の下からもう一度、コソコソ、と音が響き、小さな声がした。

「フヨザー」

この秘密の出入り口は、こちら側からしか開かないようになつている。余は台の下に手を入れると、そこにあつた引き手をぐつと引いた。

軽く押すと台は横にずれ、ぽつかりと空間が開く。下から梯子を上つて現れた影に、余は手を貸した。

星明かりが作る光の紗の中に立ち上がったのは シーゼだった。

「久しぶり」  
シーゼが軽く首を傾げると、黒い前髪が揺れた。白いシャツに袖のない短衣、膝下までのスカートという街娘の格好の彼女は初めて見るはすだが、どこかでこの雰囲気の彼女を見たことがあるような気がする。

そして、気づいた。この雰囲気は、初めて会った時の彼女と同じだつた。

「ここには夫婦の寝室なのに、あの時と同じように緊張感を漂わせている そのことが、ひどく寂しく感じられた。

「……少し、瘦せたな」

つないだままの手を軽く握ると、シーゼは微笑んだ。

「そりや、産後ダイエットがハードだったから。……ウインガリオ

ンは元気?」

「ああ。行こう」

子ども部屋に誘つと、彼女はすぐに首を横に振つた。

やはり、まだここに戻れないのか。

「今はこれで我慢しとくわ

彼女が右手を開くと、赤子の絵の描かれた陶器のタイルが載つて  
いる。余が侍女に言つて、菓子の中に入れさせたものだ。

「そなたの絵もあるぞ」

言つと、彼女は「げえ」と変な声を上げて軽く上半身を引いた。  
「え、お菓子に入れたのー? それ誰が食べるのー?」

「そうではない。このくらいの……」

余は、片手で空中に四角を描いて見せた。

「……そなたの上半身と同じ大きさの絵だ。子供も部屋に掛けてあ  
る。ワインガリオンに母の顔が見えるように」

彼女は余をじっと見つめると、手を握り返してきた。

「ありがとう」

余はうなずいた。

「無事で、良かつた」

部屋のランプは点かないまま手を引いて、星明かりを頬りに長椅子へ連れて行つた。こちらが先に座ると、彼女は大人しく隣に座つて来る。

「そなたがここに戻れない理由は何だ? グレッドが関係している  
のか?」

聞くと、シーゼが「おつ」と軽く目を見開いたので、余は付け加えた。

「元の世界へ帰つたと聞かされたが、それが嘘である」とくらいは  
さすがにわかつた。そなたが今、グレッドを含む数人に守られてい  
る所までは知つている。こちらに向かつたこともな

「やるじやん、王様」

シーゼは語りだした。グレッドの話では、王太后が彼女を元の世  
界に還すことで魔力を手に入れ、ダーナ・ディルスを牽制しようとしているということ。それが叶わなくとも、正妃の座が空けば良い、  
と考えてこるらしいこと。

「そうか。王太后様は今の所、シーザが元の世界に戻ったと思つておられるのだな」

「でも一応、私は病氣でひきこもつてゐることにしてあるんでしょ？」

余はうなずいた。

「しかし今日、王太后様から、そなたが城にはいないのではないかと聞かれた。『静かすぎる』そうだ」

ひつどいと憤慨するシーザに、余は苦笑した。

「普段が普段だから仕方なかろう。余も……静かすぎて落ち着かぬ見つめると、黒い瞳が見つめ返してくれる。

「城にいないことを見かれるのは予想していたから、南の離宮で静養していると答えたのだが……そういうことなら、近いうちにもう一度聞かれそうだな」

「ちょっと意外。王太后様、あなたの嘘をわかつてゐるのに、すぐには追及なさらないのね」

確かにそうだ。言い方は悪いが、余が観念するのを待つているのか  
それとも、何かのタイミングを待つているのか。

「それと……王太后様に、シーザがこなすことのできない公務を助ける女性は必要ないか、と聞かれた。今後、妃を勧められる可能性はあるな。ダーナディルスの軍事行動や、聖樹復活の情報も、余の手の者から聞き及んでいる。グレッドの話と一致する」

言つと、シーザはうなずいた。

「そつか。じゃあ一応、グレッドの言つことは信じてもいいのかな。  
……それなら、もう一つ聞きたいんだけど」

頭の中で言つことをまとめているのか、彼女は少し考えるそぶりを見せてから言つた。

「王太后様がしているようなことって、以前にはなかつたの？」

「今までにか？」

「そう。歴代の王家の人々が、魔力を利用することを思いつかないわけがないよね？ どうして今まで、召喚なんかやめて他のことに使おうと考えなかつたのかな。召喚された本人だつて、帰りたがつ

た人がいたはず。試した人はいないの？ その時、魔力は戻ったの戻つてないの？ そこに、現状打開のヒントがあるような気がして、ふと思い出したことがあって、余は立ち上がった。しかし、ついだ手を離すのはためらわれて、そのまま彼女を立ち上がらせる。

「来なさい」

寝室から、余の私室である居間へ移つた。こちらもすでに明かりは落とされ、無人になつている。

小さな金属音が響いて振りかえると、シーゼが小さな銀色の箱に火を点したところだつた。ニッポンから持ってきたものらしい。あまり大きな灯りをつけると扉の隙間などから外に漏れてしまつが、このくらいなら誰も見とがめないだろう。

明かりを頼りに書き物机の引き出しを開けると、余は奥の方から一冊の古い本を取り出した。黒い皮の表紙に金の箔押しで模様の入つた、厚みのある本だ。

「これは、余が国王になつた時に受け継いだものの一つだ。異世界から王妃を召喚したら、これを渡すことになつていた」

「え？ 何で今までくれなかつたのよ」

「『王妃をこの世界に引きとめるためのもの』だと聞いていたからだ。そなたには必要なかつたであろう？」

「ですね」

彼女は肩をすくめた。

寝室に戻ると余とシーゼはテラスに降り、開け放した窓の縁に腰かけた。余が手を離さないので、彼女はちらりとこちらを見たが、結局そのまま片手で膝の上に置いた本を開いた。星明かりに白く浮かび上がつた頁には、異世界の文字が並んでいる。

「五百年ほど前に召喚された王妃が、この世界に持つてきたものだと聞いている」

「絵が入つてゐる……あ、これ、聖書かな？」

「セイショ？」

「こちらで言う、聖典のことだらうか。それとも神話か。

「ずいぶん古い……何語よこれ、英語でもなさそう。英語だつたとしても読めないけど」

「読めぬのか？」

「わ、悪かったわね！ 苦手だつたんだもん英語！」

何を焦つているのか、シーゼは余を横目でにらむ。

ふむ……シーゼは高等教育を受けていたと言つていたが、どうやら外国语を修めるまでは至らなかつたようだな。ハーヴェステスの言語はそれなりに使えるようになつたのだから、できなきことはなからうに。きっと元の世界ではあまり勉強に熱心ではなかつたのだらう。

「イルフレートが文字も訳してくれるなら良かつたのにな。でもどうしてこれが王妃を引きとめるんだろう……別に何も感じないけど」シーゼはパラパラと頁をめくつてみてから、本を閉じた。

「とにかく、これは王妃が持つてていいのね。預かるわ」

沈黙が落ちた。二人で、見るともなしに庭を眺める。

美しく手入れされた庭は、木々に囲まれて外からは見えないようになっている。テラスを降りてすぐの場所に円形の花壇が整えられ、花々が夜の闇に花弁を閉じて休んでいた。シーゼが挿し木した聖樹の枝も、すでに根付いているのでなし崩しにこの場所を住みかしている。

「……あのね、フェザー」

シーゼが花壇を見つめたまま、口を開いた。

「今まで逃げる逃げる言つてたけど、今の私は逃げてるわけじゃないんだ。今の状況をいい方へ変える方法がないのか、確かめたい。お城の外じゃないとできないこともあると思うし」

「こちらを振り向いた彼女と、視線が合わさつた。

「それで本当に、私が正妃じゃない方がいいってわかつたら、私は元の世界に帰るなり他の場所で暮らすなりするよ。だって、私の息子は次の国王なんだから、国の迷惑になるのは嫌だもん」

「いずれ国王になる子のために、揺るがない視線でそう言ったシーゼは 確かに『王妃』だつた。

「必要なら、もう、私が帰っちゃつたって発表してもいいよ」

余は一瞬、息を止めた。

「シーゼ」

「だつて、もし誰かが私を人質にでもして、何かを要求して来たら困るでしょ。私もちょっと最近、似たようなことがあつたから。だからその時は、私を見捨てちゃつて欲しい。フェザーは王様なんだから」

シーゼは少し下を向いたが、また顔を上げた。

「でもね……もしも事態が良い方に進んで、私がもう一度『実は帰つてしませんでした!』つてお城に戻つて来れたとして。その時、別の人気が正妃になつてたら」

「シーゼ」

潜めたままの声で、しかし強く、彼女の言葉を遮つた。

「そなたの居場所はここだと言わなかつたか? 余の正妃はそなただけだ」

シーゼの顔が、夜目にもわかるほど赤くなつた。

「え、わあ、何、不意打ち! ちょっとお、食いたくなつちゃうじやないの。食えるものは食えるうちに食べ、これ野生の捉つ

……誰が野生動物だと? 全く。

余は軽く呆れながらも、笑つて見せた。

「そなたのような女を一度正妃にしたら、他の女では物足りぬぞ?」

「わ、ワイルドフェザー……つ

余の手の中で、シーゼの手が汗ばむ。それに彼女も気づいたのか手を引こうとするのを、許さず握り直した。

「余は、そなたを、何の苦労もせずに手に入れた」

もう片方の手を伸ばし、頬にかかつっていた黒髪をゆっくりと耳の方へ流してから、頬を撫でた。

召喚し、受け入れられ、正妃として寄り添わせ、子を生した。しかし。

「今、初めてそなたが『帰る』と口にするのを聞いたな。そう……本当ならあの時……」

本当なら、召喚した時に言われるはずだつた言葉だ。

「それなら、今から始めるところよ」

「な、何を?」

どこか怯えているように見えるシーザーの、握っていた手を、両手で包みこんだ。

「異世界からの花嫁よ。そなたは余の花嫁となるべく、ここに呼び寄せられた。余を信じ、正妃となつて欲しい」

手の甲に口づけた。

ゆっくりと顔を上げて視線を合わせると、黙つて余を見つめていたシーザーは我に返つたように瞬きをした。その拍子に澄んだ雫が頬を伝い、彼女はあわてて片手で顔を隠すような仕草をした。

自分の言葉が彼女の心に届いているのを感じ、余は自然と微笑んでいた。愛おしさがこみあげ、たつた今口づけた手の甲を親指でそつと撫でる。

「さて、『帰る』という異世界の女性を手に入れるために、余は何をしたらいい?」

優しく尋ねると、シーザーはぐいっと涙をぬぐつてから顔を上げ、いつもの少し挑戦的な笑顔を見せた。

「決まつてゐる。他の女なんかと結婚しないで、あなたの隣に私の居場所を確保しといて」

「わかった」

その場所を守らう。正妃の座はシーザーのものだ。

水瓶の下の出入り口は、開いたままになっていた。余は、シーザーがそこへ降りるのに手を貸した。

通路の奥に、いくつかの気配がある。余はそちらへ向かって、声をかけた。

「王妃を頼む」

暗闇の中から一つの声が、短く「はい」と答えた。シーザーがここへ来てから、ずっとつないだままだった手を、静かに離す。シーザーは手をゆっくり下ろすと、微笑んだ。

「じゃ、また」

余はうなずいた。

彼女の姿が闇に溶け、すぐにその気配は遠くなつた。完全に気配が消えると、余はゆっくりと出入り口を閉じた。

夫婦の寝室は、今夜も静かだった。

## 22 もう一度、あの日から（後書き）

静子の知らない知識を補足……グーテンベルクが活版印刷による聖書を出版したのが15世紀半ば。それ以降に広まつたラテン語の聖書を、召喚された西洋人がハーヴェステスに持ち込んだと思って下さい。遊森は世界史が苦手なので、この話はこれ以上発展しません（＾＾；）

## 23 キーワード

隠し通路から王城の裏手の森に出たときには、一緒にいたはずのゾガは姿を消していた。たぶんグレッドに報告に行つたんだろ？  
あーやだやだ、絶対後でまた皮肉を言われるな。

そう、ゾガはメイラーに捕獲された後、王城に着くまでは後ろ手に縛られたままでいてもらつたけど、隠し通路に入つてすぐに縄を解いて自由にした。王城行きをグレッドに止められたくなかったからゾガの自由を奪つてただけで、彼は私を守つてくれる立場なんだから、目的を果たせたら縛る必要はないものね。

縄を解いたときに両手を合わせて謝り倒したけど、彼は無表情に目を伏せただけだった。顔に出ないからわからないけど、ハラワタ煮えくり返つてたりして。

私とフェザーが会つている間は、メイラーやアユルと通路で静かに話を聞いてたみたい。まあ、騒ぐ理由もないか。

馬車は目立つので王城からは離れたところに置いてあり、そこまで歩いてたどり着いた時にはさすがに疲れを感じた。そろそろ一コイスもお休みになる時間じゃなからうか。

私とアユルが先に馬車に乗り込むと、いつの間にか後ろからゾガが現れて乗り込んできた。メイラーはそれをちらりと見てから、馬車の前方へ回つた。すぐに御者台に上る音がして、馬車は動き出す。

「良かつたですね、シーザ様」  
ガタ「トと揺られながら、アユルがやつとホッとしたように笑つた。

私は微笑み返した。アユルは、王太后関係の人を見つからなかつたことと、フェザーに言つてもらつた言葉の両方を指して言つたの

だろう。

後ろの幌の隙間から、そつと外を見た。満天の星空を背景に、遠ざかる森の黒々とした影、そしてその上に王城のシャープなシリウットがそびえる。

フェザー、もう寝たかな。素敵な言葉をくれたから嬉しかったけど、だからこそこうして離れていくのが切ない。ワインガリオンにだつて会えないままだし……一緒にいる乳母が王太后派の人だから、しうがないんだけど。

また、ここに戻つて来れるだろうか。

何かがこみ上げるのをぐつと押しこめ、私はそこから離れて馬車の中の方に入った。

アユルが何が言いたそうにこちらを見ていて、私はちょっと笑つて見せた。

「フェザーとの話、聞かれてると思うと恥ずかしかった。なんか告白タイムっぽくなかった？」

言つと、アユルはプツと吹き出した。

「ご夫婦で告白、ですか？」

「いや、だつて召還されてすぐ結婚だつたから、恋人期間もなかつたしさ、ほら。ねえ？」

話しているうちに火照つてきた頬を、私は軽くおさえた。

あー、なんかこの時間差告白つて、あれだわ。高校に入学して一年も経つてから、中学の同級生だつた男の子に呼び出されて「ずっと言えなかつたけど好きだつたんだ」って言われた時みたい。ええつそつだつたんだ、ていうか中学三年間同じクラスだつたのに今頃つ！？でも嬉しい、みたいなね！その時はごめんなさいしましたけども！

「と、とりあえず、正妃の座はキープしといてくれるみたいだから、

フェザーが周囲に押し切られる前に何とかしないとね

照れ隠しもあって、私はわざとハキハキ言って背筋を伸ばした。

すると、アユルも笑いを納めた。

「あの、シーゼ様。さつきちょっと氣になつたんですけど」

「ん？」

「お一人がお話してゐる時、窓の方から魔力の氣配がしたよくな……

「魔力？……あ、庭だ」

私はちょっと後ろめたい気分で、アユルに打ち明けた。

「実は庭の花壇に、聖樹の枝を挿し木しちゃつたんだ、私

「あ、聖樹の？なるほど、そんな気配でした。ってええええ！」

？

「てへ」

アユルはまた吹き出した。

「あはは、つい。すみません。……でもびっくりだな、聖樹つて増やせるんですね。じゃあ、その新しい聖樹にも魔力をためることができるんでしょうか？」

「魔力の気配があつたんでしょう？できるんじゃないかな」

私は軽くあくびをした。アユルと話しているうちに、緊張がゆるんで少し眠くなつてきちゃつた……徹夜だったからな。

「あ、シーゼ様、お休みになつて下さい」

「ん……ありがとう」

私は馬車の中に敷かれた毛皮の上に転がると、二つの顔を思い浮かべた。

……おやすみ……。

修道院に戻つたのはその日の午後。そして夕方には、もうグレッドがやってきた。

「…………」

「…………」

気まずう。

テーブルに向かい合つたまま「おをにらんでいるグレッド」、私は素直に謝ることにした。

「ごめんなさい」

「…………何に対しても謝罪して下せつているのでしょうか」「内緒で行動したこと。心配かけたこと。それに一番は」私は顔を上げて、グレッドを見る。

「私を逃がしてくれたのに、あなたを信じなかつたこと。『ごめんなさい』

それを聞いたグレッドは、ちょっと田をそらして何やら口元をもによもによさせていたけど、ややして「」と言つた。

「私は、何かをなさるうとしている王太后様も心配なのです。けれど、王妃様を心配しているのも真実です」

「うん。ありがとう」

思わず微笑むと、グレッドはまた黙り込んだ。

「それで、今後のことを相談したいと思うんだけど。このメンバー全員で」

私はテーブルの上で手を組んだ。メイラー や アユルも椅子を持って来て座つた。ゾガは黙つて、居間の入口近くに立つていて。

「お城の外で動くことになるけど、何が起こつてゐるのかを調べる別働隊つてとこね。まずはこれかな」

テーブルに置いてあつた本を引き寄せる。フュザーからもらつた、召喚された王妃を引きとめるために王家に受け継がれてきたという本だ。

「召喚と魔力の関係が気になつて仕方ないのよね。グレッドは、これがあること知つてた?」

聞くと、グレッドは本に目をやつてうなづいた。

「はい。見せていただいたこともあります。この本には、何か魔法が封じられている気配がします」

「魔法？」

「まだ魔力が今よりも世界に満ちていた頃にかけられたのか、もしかしたらイルフレートのように古代の魔法を使ったのかもしません。しかし、それ以上のことはわかりませんでした。王妃様はこれは」

「何か言いかけるグレッドに、私はすっぱりと言つた。

「読めません」

「読めないのですか？」

「だから外国語は苦手だつたんだつて……」

「くそお、グレッドにまで。今さらガッコの勉強のことを突っ込まれるとは。

「それ、セイショつておっしゃいましたつけ。シーゼ様の世界で良く読まれている本なんですか？」

アコルに聞かれ、私はなんと説明しようか考えた。

えーと、イエスって実在の人なんだつけ？ クリストチャンじゃないので詳しいことはわからないし、ホテルに泊ると部屋に普通に置いてあつたりするあの感覚とか、説明しにくい。

そこで私は、単純にこう言った。

「これは、イエス・キリストっていう超有名人の名言集」

その瞬間、私の耳の横に髪飾りのようにとまっていたイルフレートが、ふわりと光った。

同時に、手についていた本が急に開き、風もないのにすごい勢いで勝手にめぐれた。

あつ……名前がキーワードになつていたの！？ 時代も国も様々な異世界人王妃、その全員が知っている可能性が高い名前。

うろたえる間もなく、今度は本が強く光つて  
「！」  
急に、周りの景色が消えうせた。

私の目の前に、大きな砂時計が浮かんでいる。あの、聖樹の「つる」にはまつていた水晶の砂時計だ。

魔法庁で見た時には、中を小さな光の粒子が漂っているだけだったけど、今私が見ている砂時計はもっと強い光を発している。

それ以外のものは、白くぼやけて何も見えない。椅子に座つている感触はあるのに、目の前のテーブルも、その上に広げられているはずの聖書も、周りにいるはずのメイラーたちも見えなかつた。

「み、みんな……どこ?」

思わず手を泳がせると、急に握られる感触があつてびくりとする。さらりとした大きな手は、ひんやりとしていた。

「シーザ様。私は」

グレッドの声がした。熱くなつた私の手を彼の手がクールダウンして、私は少し落ち着くことができた。

「魔法が発動したようです。私とアコルには、ほんやりとですが幻が見えます。聖樹の器ですね」

「うん……そうみたい」

会話ができることに少し安心して、私は砂時計の方に意識を集中した。すると、やうしたことで時間が動き出したかのように、変化が起つた。ぐうつという圧迫感とともに光が一層強くなり 次の瞬間、砂時計が破裂した。

爆炎が噴き出した。

「！」

思わず片手で顔をかばつてから、おわるおわる手を降ろす。熱さは感じないけれど、視界は炎の色でいっぱいだ。こんな大きな炎を目の前にするのは初めてで怖い。心臓がうるさいくらいバクバクと鳴っている。

炎の中に、ゆらりと何かの影が見えた。私はハツとした。

「木が、木が見える。木が燃える……あれはもしかして、ダーナの聖樹？」

大昔の戦争の時に燃えてしまったという話を、最近聞いたばかりだ。炎になめ上げられたその木は、枝をきしませて焼け落ちようとしている。聖樹が育んでいた魔力があふれ、頭の芯に何かがぶつかつて来るような感じがして、めまいがした。

「魔法の炎で、ダーナの聖樹は燃えたの……？」

戦争の時、ダーナの聖樹が燃えたのが魔法のせいだとしたら？ 誰かが魔法を武器として使う方法を、その時に見つけていたのだとしたら。

唐突に、私は理解した。聖書に封じられた魔法が、王妃をこちらに引きとめるという、その意味を。

召喚された異世界人が元の世界に帰る時、大量の魔力がこちらの世界に戻つてくる可能性がある。

異世界人の王妃が、聖書に キリストの名に託して後世の王妃に伝えたかったのは、このことだつたんだ。元の世界に帰つてはいけない……その時こちらの世界の誰かが、大きな魔力を使って恐ろしいことを引き起こすかもしれないのだから、と。

目を開くと、くすんだ木の天井が見えた。

「シーザ様！ 気がつかれましたか」

アユルの笑顔が視界に入つた。自分がベッドに横になつているのに気づいて、私はびっくりして身じろぎした。か、身体がだるくて動きにくいつ。

「私、倒れたの……？」

尋ねる声が、少しかすれた。起き上がるうとするためまいがするし、胸がむかむかする。

「魔力に当たられたんですね。シー・ゼ様は長い髪をされていますから、受けとめてしまつたんだと思います。数日で治りますから大丈夫ですよ」

魔法庁でもたまにあつたんですねよ」と、トア・ゴルが言いながら手を貸してくれ、私は背中にクッシュョンを入れてもらつてもたれた。

「ううう、一日酔いの朝みたい……と思つたら、本当に朝だ。あれから一晩経つたのね。

ノックの音がして扉が開き、グレッドが入つて來た。開けたままのドアの向こうから、メイラーも心配そうにちょっと顔を出したけど、遠慮しているのかこちらには入つて来ない。たぶんその辺にゾガもいるんだろう。

「シー・ゼ様、失礼します」

彼はベッドの横の椅子に腰かけると、私の額に指先を当てた。ふうっと身体が熱くなつて、汗をかいた時のように何かがにじみ出る感じがしたと思つたら、むかむかが少し楽になつた。何かしてくれたらしい。

「ありがとう」

目を見て言つと、グレッドはホッとしたようにため息をついてから、眉間にしわを寄せて一言一言区切るようにして言つた。

「体調が回復されるまで、今度こそ、しばらく、大人しくなさつていで、下さい」

「わかりましたよう。ずっと動きっぱなしだったしね。……ああ、そろそろ一ヶ月経つちゃうんだな、お城を出てから」私は窓の外に目をやると、静かに吐息をもらした。

「どうどう私もセックレスか」

「…………は？」

「日本の公的な機関が決めた基準だと、夫婦が一ヶ月しないとセックスなんだって」

あ」を落としているグレッドの横で、アユルが興味深げに聞いて来る。

「どうしてシーザ様の故郷では、国がそんな基準を決めて調べてゐんですか？」

「労働環境とか、色々な問題が潜んでるんだよ、じつじつことほね」

私はそれだけ言って口をつぐんだ。ていうか、自分で言いだしといて何だけど、これ以上聞かれてもわからなかつたりして。

氣を取り直したグレッドが、背筋を伸ばした。

「また数日後に、こちらに伺います。それまでに、少し調べてみます」

「何を？」

「ダーナの聖樹が燃えた時に何があつたか、です」

グレッドは膝の上で指を組んだ。

「実は、王太后様のご生家は、代々魔法庁の長官を輩出している家系なのです。王城には記録が残つていなくても、そちらの方には何かしら残つている可能性があります」

「うん……でも、あまり無理はしないで」

私はグレッドを見つめた。

「王太后様に何か気づかれたらいけないし……それにね。高校の社会の先生が言つてたんだけど」

私は授業を思い出しながら言つた。

「歴史つていうのは勝者の歴史だつて。ハーヴェステスが勝つた戦争についての記録がいくら残つていても、それはハーヴェステスから見た歴史でしょう？ 調べても、もしかしたら本当にあつた出来事と違うことしか、わからないかもしれない……」

そう、本当は、ダーナデイルスに残つてゐる記録なんかも調べられたら一番いいんだけど。

グレッドはうなずいた。

「考慮します。私もそうそう失敗は致しません……シーザ様を陥れよつとしたくらいでですか？」

珍しい彼の冗談に、私は思わず小さく笑った。

「もうお辛いでしょ、お休みになつて下さい。私はそろそろ失礼いたします」

「うん……本当に、気をつけて……」

田を覗じると、私はそのまま眠りの淵に沈みこんで行つた。

次に田が覚めた時には夕方で、グレッドはとうにいなくなつていた。多少フラフラはしたけど、ちゃんとテーブルで食事をしようと起き出す。メイラーの手を借りて居間のテーブルに着くと、アユルが一人で食事の用意をしていた。

「ゾガは？」

なんとなしに尋ねると、アユルとメイラーは田を見合せた。メイラーが言つ。

「それが、実は……午後からずっと、姿が見えないのです」「あらあら、何を単独行動してるんだろう。私のそばにいないで、グレッドに怒られないのかしら。

ところが結局、翌朝になつても、ゾガは姿を現さなかつた。

## 25 一人の男

馬を駆り、街道を行く。後ろからついてきている従者の馬の足音が重なる。

帰還陣に見せかけた移動陣でシーゼ様を逃がそうとしたことを信じて下さったシーゼ様は、私が未だに王太后様の意向を重視していることも、そのまま受け入れて下さった。思えば、王太后様が原因で自分が城を出ることになつていて、シーゼ様は王太后様を貶めるようなことを口になさつたことがない。国を守るために行動なされた王太后様の心中を、慮つていらっしゃるようだ。

本の魔法が発動した時、視界を幻に奪われたシーゼ様が、「みんな……どこ？」と伸ばされた手をとっさに握った。安心したように握り返してくる、細い指の感触がよみがえる。しかし直後、椅子から落ちるようにしてくずおれた彼女はいつになく頼りなく、あの溢れるような生命力を感じられなかつた。

もしもこの後、事が上手く運ばず、シーゼ様が姿を消すようなことになつたら 私はそれを想像して、唇を噛んだ。

田を覚ましたシーゼ様に私ができたことは、シーゼ様がまともに浴びた魔力の流れを整えることくらいだった。しかし、それだけでも幾分楽になつたのか、彼女は潤んだ瞳をこちらに向けて「ありがとう」とおっしゃつた。そしていつものように開けっ広げな話をなさり、思わずホッとした私は急いで隠れ家を出た。  
彼女のそばにいると、気持ちが乱れそうになる。

城に戻つた翌日、聖堂にある祭司長室でたまたま雑事を片付けていると、フュザリオン陛下から伝言が届いた。急ぎではないが、時

間が取れたら連絡するように、との内容だつた。

予想はしていたので、私は驚かなかつた。事務方の修道士を通じて陛下の「」予定を伺うと、明朝の謁見の後に時間を取るよう指示があつた。確かに、謁見には私も元々伺うことになつていたので、その後なら陛下と私が話をしていても怪しまれない 王太后様に。二重諜報員のような立場になつてしまい神経が休まらないが、王太后様もフェザリオン陛下も、この国を守ろうというその気持ちは同じなのだ。ただその考えの中に、シーゼ様がいらっしゃるかいらつしやらないかの違い……。

翌朝、謁見の間で大臣たちと肩を並べて陛下の訓示を拝聴してから、私はそのまま近くの小応接室で陛下を待つた。

陛下が一人でおいでになり、扉が閉まる。私は立ち上がり頭を垂れた。

「かけてくれ。……数日おきに城を空けているようだが、大丈夫か」まずはそう尋ねられた。その「大丈夫」は何に対しても……私は、「血縁の者が病気になつて気持ちが弱つていて、数日おきに訪ねて訓話などして励ましている」ということになつていて。陛下もそれは「存じのはずだから、シーゼ様について尋ねられたのだろう。」「はい。しばらくは同様に行動させていただきたく……」

言葉を選び、このままシーゼ様をお守りすることをお伝えする。陛下は軽くため息をつかれると、苦笑いなさつた。

「そなたが独断で彼女を城から出したことを、余は怒るべきなのかもしれぬが……それも余の不甲斐なさゆえ。ひとまずは礼を言つ」私は黙つて目を伏せた。

フェザリオン陛下の側近には王太后派の者もいる。そもそも陛下が即位なさる時、対抗勢力を黙らせたのは王太后様のお力だ。そのような力関係の中で、陛下が自由に動けるとは私は全く思つていなかつた。

「彼女から、余に会つた時の話は聞いたか」

「はい」

「彼女と約束した。城の、彼女の場所を守ると。……そなたにも引き続き、力を貸してもらいたい」

「私などを、信用なさつて良いのですか」

信用するな、と言う意味を込めて陛下と視線を合わせると、陛下は思いのほか強い視線を返してこられた。

「そなたは王妃を」

言いかけて口をつぐむと、窓辺に立つて私に背を向けた。

「…………いや。私情で、また別の心配をするところだった。忘れてくれ」

私は目を伏せた。

そう、私を信用なさらない方がいい。状況によつては裏切るかもしない男だ。

さもなければどうなる？ 全てを捨ててただの男になつて、シーザ様の元へ？ 馬鹿馬鹿しい……が、その可能性を少しでもお考えなら、なおさら私のことを信用なさらないで欲しい。私自身でさえ、自分を信じていないのでから。

本の魔法が発動したことは、申し上げるべきだらうか……しかし、あの魔法は国王に受け継がれるものではなく、王妃に受け継がれるものに、しかも異世界人王妃のみが解くことのできる方法で封じられていた。それなら、ハーヴ王家の人間に伝えて良いものか。少し調べてからでも、遅くはないだらう。

つかの間の沈黙ののち、陛下はこちらを振り返つた。

「そなたが今一番、状況を広く把握できる立場にいるのは確かだ。そのそなたに伝えておこう。……昨日、ダーナ、ディルス王家からの特使が手紙を携えてやってきたのだ」

私は視線を上げた。

「そういえば、そろそろ表敬訪問の時期でしたね」

ダーナディ尔斯からは定期的に、要職にある人間が表敬訪問にやつてくる。おそらく手紙は、その人選が決まったとか、そのような内容だらう。

陛下はうなずくと、肘掛け椅子に深く沈みこんで額に指を当てた。

「今回は、ダーナディ尔斯の一の王女が来るそうだ」

私は思わず目を見開いた。思い当たることがあつたのだ。

ダーナディ尔斯王国には王子はおらず、王女が三人いる。そのうちの一の王女であるセルリア・ダーナディーは十九歳。年頃ながら、大国の姫ゆえ相手もなかなか定まらないまま数年が過ぎていた。フェザリオン陛下の側妃にどうかという声もなくはなかつたのだが、ダーナ国王が「側妃などもつてのほか」と笑い飛ばしたと聞く。

そう、側妃なら。しかし、正妃の座が空いていたら？

「これは……王女様がおいでになると、珍しいことですね」  
目まぐるしく頭を働かせながら答えると、陛下は頷かれた。

「王太后様とダーナ国王妃は親交が深い。お二人の間で、王女にこちらの様子を勉強させようと言う話になつたそうだ」

そして、陛下は口の端を少し上げた。

「シーゼに伝えてくれ。見合いは断る、と」

思わず絶句してしまつたが、私はそのまま頭を下げた。

もう暁の女神ドイリが太陽神ソレスにわざわざかけぬいつな時刻なのに、部屋の中はランプを点さなくてはならないほど薄暗かつた。外は雲が重く垂れこめて、しどとと霧雨が降つている。窓から見える荒れ地も、その向こうにわずかに広がる農地や畠々と佇む農家も、灰色にくすんで見えた。

朝食の卵料理をスプーンですくつて、でも口には運ばないまま、シーゼ様が形の良い眉をひそめた。

「ゾガ、何でいなくなつちやつたんだろう？」

僕は温かいお茶を淹れ終えると、部屋を見まわした。いつもなら気配もなく現れるゾガさんの姿は、昨日の午後からここにはない。「まさか、自尊心を傷つけられて怒つちやつたから、なんていう理由じゃないですね」

メイラーさんの腰にかかるつて捕獲された時、ゾガさんものすごく悔しそうにしてたもんな。その後は普通にしてたけど。

「そのような私情で動く奴ではないだろ。……だからこそ余計気になります。ただ出奔しただけならいいのですが、もし何か企みがあつたら……。俺は、場所を移つた方がいいのではないかと思います」

スプーンを置いたメイラーさんが言った。職業柄か、メイラーさんは食事を終えるのがものすごく速い。

シーゼ様はうなずかれた。

「それなら、グレッドに知らせないと。でも今まで、グレッドと連絡を取つていたのはゾガなのよね……他の連絡方法、心当たりある？」

「そうですね……俺かアコルが城まで走つて、祭司長様に面会してもいいんですが、城で動くとバレそうだな」

「？」

メイラーさんが考え込み、僕もうなずいた。祭司長様がシーゼ様を探し当てた経緯を考えると、僕やメイラーさんが城の誰かに接触するのはやめた方がいい気がする。……あ。

「そうだ、陛下の所にもう一度伺つたら？ それで祭司長様に連絡をつけていただいたら」

それなら隠し通路を使うから、前回みたいに誰にも会わずに済む。いい考えだと思ったんだけど、メイラーさんは唸つた。

「俺が陛下の所に伺うとしても、シーゼ様とアユルだけ残していくのは今の状況では危ない。じゃあアユル一人で行けるかというと、無理だろ？」「うう……」

僕は肩を落とした。すみません、僕、馬に乗れないんです。

「全員で行くには、今はシーゼ様の体調が心配です」

メイラーさんの言葉に、シーゼ様は何か言いかけておやめになつた。うん、今のシーゼ様が馬とか馬車に揺られたら、たぶんまた昨日みたいな状態に逆戻りしてしまうと思つ。せめてあと丸一日、できれば一日は養生していただきたい。

「ねえ、フェザーはこちらの様子を密かに見張つてたって言つてたよね。その見張りを、どうにかして見つけるつていうのはどう？ ていうかフェザーに会つた時に見張りの人相を聞いとけばよかつたよ、私おばか」

シーゼ様はこめかみに手を当ててため息をつかると、やつと食事を再開された。

そうか、今まで祭司長様が敵か味方かわからなかつたから、陛下の手の者も接触してこなかつたんだもんな。でも今なら。

「そうですね……見張りがついていたと聞いて、それとなく昨日は買い出しの時に気を配つてはみたのですが」

メイラーさんもどの人かはわからなかつたらしく、結局こう言つた。

「うーむ、かえつてあまり動くのも良くないか……数日中にまた祭

司長様がおいでになるということでしたので、その時に相談しますよ。それまで警戒を強めます。俺もなるべくここにいるようになります

「うん。大変だけど、お願ひします」

シーゼ様がメイラーさんに笑いかけると、メイラーさんも少し目を細めるようにして表情を和らげた。「安心させるよつこ。」「

お邪魔にならないように、僕は静かに立つと台所に食器を運んで洗い始めた。

メイラーさんは足を傷めてはいるけど、シーゼ様にとつては今一番、気を許せて頼りになる人なんだろうな。あーあ、僕も魔法庁で魔力にばかり関わってないで、乗馬の練習くらい何とかしてやつとけば良かつた。

いや、くよくよしてる場合じゃない。乗馬は後で、家の周りを見回りがてらメイラーさんに教えてもらおう。それより、今は僕にできるることをしなくちゃ。

気になることがいくつがある……考えてみよう。まず、陛下とシーゼ様の寝室でのことだ。庭に聖樹の枝が植わってるなんて、びっくりした。

だって、それじゃあ聖樹を増やして魔力をより多く集めることだつて、可能かもしれないよね？ それなのになぜ今までそうせず、折れた枝は集めて儀式の際に焚くという風にしてしまったのか。意図的に枝を処分して、聖樹を増やすないようにしてたのかも思える。

まあ、想像はつくけどね。王家だけが魔力を手にできるという風にして、王家の絶対性や神秘性を増そうとしたんだろう。こういうの、魔法の中核集権っていうのかな？

あれ、でも、聖樹はハーヴェステスには一本だけで、今や魔力はどんどん衰退してる。それじゃあ将来的には中央集権も何もないか。うーん。

とにかく僕には、聖樹を増やすことで何か新しい可能性が見つかるような気もするんだけど……今はそれどころじゃないよね。

それと、もう一つ気になること。これは本当に漠然としてるんだけど、ゾガさんのことだ。ゾガさんの行動で何か、これを見たことがある、聞いたことがある……と思ったことがあつたんだけど、どうしても思い出せない。一体何だつただりう……。

その日は何も起こらないうま終わり、翌日ものうのうと時間が過ぎて行つた。やうに翌日になるとさすがに食材が底をつき、メイラーさんが一度買い出しに出かけた。

やつと体調の戻つたシーゼ様と、魔法の話をしながら盤上遊戯をしていると、メイラーさんが戻つて來た。

「ただいま戻りました」

「お帰りなさい」

一人で声を揃えて迎えると、彼は麻袋やら籠やらの荷物を台所に降ろしてからこちらへやつて來た。

「シーゼ様、これを」

彼が懐から取り出したのは、公報紙だった。このあたりは寂れてしまふけれど、王城から半日という距離が幸いして情報はそれほど遅くはない。

シーゼ様は受け取ると目を通し、うつわあ、と机に突つ伏された。

「フェザーがお見合いするんだつて」

「何ですかそれ！？」

びっくりして僕も読ませてもうひ。そこには、近々ダーナディルス王国からやってくる表敬訪問団についての詳細が書かれていた。

「第一王女の、セルリア……様？」

「王太后様の『正妃の座が空けば』つていうのはこれのことだつたのね。フェザーの正妃にダーナディルスの王女がなれば、ひとまず戦争は回避できる」

「それにダーナティルス側にとつても、研究の進んでいる魔法についての情報を王女を通して得られれば、色々と有益でしょう」

メイラーさんは眉をひそめた。

「どうか……ダーナの聖樹が復活したなら、その魔力を使って何かしてやううと言つ野心家があちらの国にいるのかもしね。僕の脳裏に、『セイショ』の見せた幻の炎が浮かんだ。」

「で、でもいきなり結婚なんて話にはなりませんよね！？」一応表敬訪問なんですから、ただの顔合わせでしょう？」「うん？」

僕があわてて顔を上げると、メイラーさんはきつぱりとうなずいた。

「シーゼ様が『病氣』ということになつてはいるのに、婚姻の話が進むわけがない。例えばこれからシーゼ様が『元の世界に帰つた』と発表されたとして、婚姻の話が本格化するにしても、それは政略結婚だ。両国の間で様々な条件についての話し合いがなされた末にようやく、ということになる。当分今の状況は変わらない」

メイラーさんがシーゼ様を見つめ、僕もその視線を追う。シーゼ様は僕たちの顔を見てうなずかれた。

「そうね。フェザーも私の居場所は守るつて約束してくれたし、多少は粘つてくれるでしょ」「多少はつて。

シーゼ様は二コリと笑つて付け加えた。

「まあ、いざとなつたら結婚式に乗りこんでやるわよ。で、王女様に『この泥棒猫！』って言つてやろうかな」

泥棒猫？　えーと、つまり恋人を横取りする女人のこと？

イルフレートが伝える意味に苦笑いしていると、シーゼ様が「一度言つてみたかったのよねーこのセリフ。言われたことならあるんだけど」

なんて言つから、僕とメイラーさんは仰天してしまつた。

「言われたことあるんですかっ」

「うん。日本の、とある喫茶店で働いてた時、マスコミに見つかり

そうになつてね。常連のお客さんが家に匿つてくれるつて言つから、  
とつさに転がりこんだら彼女さんが来ちゃつて、『この泥棒猫！』  
つてわけ。彼女がいるつて知つてたらそれなりの対処をしたのにな  
ー

……僕、思うんだけど、シーザ様は絵本作家じゃなくて小説家か  
劇作家を目指した方がいいんじゃないかな。

雨こそ降りはしなかつたけれど、その日も一日中ソレスの姿が見えない曇り空のまま終わろうとしていた。

居間でパラパラと聖書の絵を眺めていた私は、窓の方を見た。さつきアユルがランプを点して室内を明るくしたので、窓ガラスには私の顔が映っている。顔をぐっと近づけると、やつと遠くの暗い森や農家の明かりが見えた。窓枠にあごをのせたままため息をつくと、ガラスが白く曇つて外は見えなくなる。

あーあ、やっぱり私なんかより役に立つ正妃を、つて話になっちゃったよ。フェザーはああ言つてくれたけど、「国のために」つて言われたら、国王として断れるの？　このお見合い。

「こちらの世界に召喚されてから、フェザーと結婚式を挙げるまでの短い間で、自分の立場はよくわかつていたつもりだつた。キリ番イベントでやつてきた、イロモノ王妃。みんなが珍しそうに私を見る。それでも私にとつてはこちらの方が居心地が良かつたし、だんだん周囲の人々のことを知り、私のことを知つてもらつてつれて、受け入れてもらつてるつていう実感もわいて幸せだった。

でも落ち込むなー。離婚もしてないのに（これからさせられるのか？）、本当にフェザーが再婚しちゃつたらつて想像すると、やっぱりショックだ。王女様が、ウインガリオンの新しいお母さんになるんだらつか。

「シー・ゼ様」

振り返ると、メイラーがすぐそばで片膝をついていた。

「あ

何か言おうとしたけど口ひきに言葉が出ず、私は口をつぐんだ。

あー、今ので落ち込んでたのがバレる。

メイラーは私の目を見上げて、じつ尋ねて来た。

「さつきの、結婚式に乗りこむお話、失礼ながらシーザ様らしいなと思つたのですが……シーザ様のお国では、離婚なさる時はどうに事態が動くのですか？」

「離婚する時？」

私はちょっとじびっくつしつつも、本やドラマで聞きかじった知識を思い出して並べてみた。

「そうね……弁護士に相談したり、感謝料請求したり、子どもの親権争つたり、裁判所が出てきたり……？」

「女性側も権利をきちんと主張するのですね。では、もし今後事態が「こじれたら、シーザ様もそつなさつたりよろしいかと」

「ええ？」

びっくりして身体「」とメイラーの方に向き直ると、彼は真面目へさつた顔でうなずいた。

「王家に慰謝料をご存分に請求なさり、お子様の養育に意見する権利を主張し、ついでに関係者全員に一発平手打ちなど验らわせて、領地の一つも奪い取つてもうとマシな夫君を迎えられて、豊かに暮らしなればいいのです」

「ちょ、メイラー」

「というくらいのことが、シーザ様には許されてるといふことです。シーザ様は、王妃なのですから。第123代国王と結婚したと

いう事実は変わらないのですから」「はつきりと言いつた彼に驚いてしまつたけれど、私は思わず笑い出した。

「ふふ……そうね。」Jつちは悪くないんだから、遠慮することなんてないか」

「その通りです。シーザ様の思ひがままになさつて下せ。俺と、たぶんアユルも、どこまでもお供しますから」

優しく微笑んで、メイラーはうなずく。

彼は半分本気で、「二番田に幸せな未来」を考えてくれたんだろう。でも残りの半分は、私を奮い立たせるため。落ち込んで堂々巡りばかりしていいないで、考えを開かせるため。

「一番田の未来なんていらない。私は王妃、まだまだできることがあるはず。」

諦めるな！

「ありがとうメイラー、私の一番の騎士」

背筋を伸ばして『王妃らしく』言つと、メイラーは私の手を取つて口づけた。

も、もうこのくらいでうひたえたりしないもんね！ わわわ私は王妃なんだから！

「あの……夕食、『用意できましたけど」

ぎやー！ あ、アコルか……どきどき。

ここはダイニングキッチンという感じでテーブルが置かれていて、隅の方に鉄のストーブがある。上に載つたお鍋の中では、スープがコトコト煮えていた。

このあたりに住んでいる人たちって、一度に大量のスープを作つて朝昼晩食べるんだそうだ。具を足して畠田も、とかね。最後には野菜なんてドロドロに溶けちゃうんだけど、これがとても美味しくて、私はすっかり氣に入つてしまつた。

部屋に漂ついい匂いを吸い込みながら、私はスプーンをテーブルに並べて言った。

「ストーブで料理してるのを見ると、昔おばあちゃんがストーブで黒豆を煮てたのを思い出すわ。鏽びた釘をガーゼに包んで入れると、色が綺麗になるのよね」

「鏽びた釘ですか！？」

アコルはスープの入つた椀を並べながらびっくりしている。

「うん、何でだっけな……鉄と黒豆の色が反応して、とか何とか。ああ、でもこちらのお鍋つて鉄製が多いから釘はいらないのか」「では、シーぜ様のお国では、鍋は銅製か何かで？」

メイラーも不思議そう。

「それもあつたけど、ステンレスつていう鋳びない便利な材質があつてね……」

雑談をしながら食事を始める。メイラーは相変わらず食べるのが早くて、真っ先に食べ終えた。アコルも食べ方が上品な割に、結構早い。私はちょっと猫舌なので、ふうふうと冷ましながら少しづつスープを口に入れていた。

カラーン、という音がした。

顔を上げると、食器を流しに置きに行つたメイラーが膝をついていた。床の上で、落ちた木の椀がくるくると回っている。

「メイラー？」

呼びかけた私の目の前で、今度はアコルがスプーンを落とした。

「……あれ？」

つぶやきながらテーブルについた腕からカクンと力が抜け、彼はそのままコトンとテーブルに突つ伏した。

「ちょ、一人ともじう」

思わず立ち上がつたとたん、くらりとめまいがして私はたたらを踏んだ。とつさにテーブルに手をつく。

メイラーが流しにつかまつて立ち上がりつつしながら、顔をゆがめてこちらを見た。

「シーぜ、さま。お逃、げ」

どつ、と彼の身体が肩から床に沈んだ。

「やだ、何で……」

視界がかすむ。アコルの所までじうじうか歩き、しがみつくようにして顔を覗き込むと、アコルは穏やかな顔で瞳を閉じていた。眠っている……睡眠薬？ スープに？ 鍋、ストーブにかけっぱなしだ

つたから、台所に人がいない時を狙つて誰かが……。

私はまだあまりスープを食べていないと、症状が軽いのかもしない。とにかく助けを呼ばないと。馬には乗れそうもない……一番近い農家まで歩けるだろうか。早く、早く。

一步一歩踏みしめるようにしてドアに近づく。開けようとしたらドアが向こうから開いて、私は前のめりになつた。がつしりした誰かの腕が、私を受けとめる。

グレッド？

顔を上げると、朝焼けの雲のような薄い紫の瞳が、無表情に私を見つめていた。

「ゾガつ」

床に肘をついたメイラーが唸る。私を軽々と抱き上げたゾガは、メイラーの方を見て口の端を上げた。初めて、ゾガが笑つてるところを見た。

ゾガは身をひるがえすと、外に出た。星もない闇夜の中、窓から漏れる灯りをたよりに歩く。

防風林の陰に、馬が一頭つないであつた。ゾガは私をいつたん馬の背に押し上げてから自分も乗り、もう一度私を腕の中に抱き直した。

「どこに……行くの」

聞いたけれど、ゾガは答えないまま馬の腹を軽く蹴つた。見張りを警戒しているのか、目立たないよに闇にまぎれてゆっくりと移動しているようだ。

メイラー、アユル……。修道院の明かりが少しづつ遠くなつていのを眺めながら、とつとう私の意識も闇に沈んだ。

28　目覚めた場所は（前書き）

今回短いです。

久しぶりに、日本にいた頃の夢を見た。

ゲームセンターや風俗の多い繁華街の裏路地で私を補導し、話を聞いてくれた警察官。そいつがまさかの裏切りで、私をマスクミーに売ってくれて。

混乱しながらもどうにか記者を撒いて逃げ帰ったのは、死んだ祖母と暮らしていた古い家。疲れきって居間に入ると、閉めっぱなしの雨戸の隙間から細く朝の光が射し込んでいる。仏壇の花はとっくにしおれて、でもおばあちゃんの遺影は明るく笑っている。

逃げることに慣れていなかつたから外に出るのが怖くなつて、數日引きこもつてびぐびくしながら過ごした。トイレで水を流す音さえ気になつたし、お風呂も同様なので入らない。当然、ドアチャイムが鳴つても電話が鳴つても出なかつた。

部屋の電気はつけず、テレビはミュートにして字幕を眺める。毎のバラエティ番組。離ればなれになつていた親子を引き合わせる企画らしく、再現VTRが流れている。母親の口がパクパク動いて、字幕が出る。

「お腹を痛めて産んだ我が子を、大事に思わないわけないでしちゃう。

そういう人もいるね。でも、お腹を痛めて産んだ我が子を、捨てる親もいるよ？

そして、自分の子どもじやなくとも、慈しんで育てくれる人もいる。

『痛み』は必須じやないんだな、と、ぽんやり思った。何かを守るために必要なのは、痛みじやないんだ。

目が覚めた時、朝なお暗い、あの雨戸を閉め切った居間にいるのかと思つた。

「じくゅつくりと、衣擦れさえしないように身体を起こす。ほんの少しだけめまいがしたけど、すぐにいつもの調子に戻つた。

板張りの床、壁、天井……私は床に直接、毛布を何枚か重ねて寝かされていたらしい。頭からアコルのつけ毛がずり落ち、その綺麗な髪に触れた時にうつすらと魔力の気配を感じて、まだ自分が『二ちら』にいるんだと教えてくれた。

見上げると、壁のかなり高いところに明かり取りの小さな窓があつて、昼間の陽光が差し込んでいる。でも、その下にある普通の大きさの窓は板で厳重にふさがっていて、外が見えない。窓がこれなんだから、当然ドアも開かないだろう。ドアがもう一つあるのはトイレかな。

枕元を見ると布をかけたかごが置いてあって、そつと布をめぐるトパンと果物、それに何か飲み物の瓶が入っていた。三食分くらいある。

当面は、私は殺されたり傷つけられたり日本に強制送還されたりはしないらしい　しばらくここで一人で過ごせということとか。

静かに気配を探る。ふさがれた窓の外、下の方から、何かざわざわした雰囲気と馬の蹄の音、馬車の車輪の音がする。往来が近いのか。

ゾガは私を、どこか人里離れたところではなく街のまん真ん中の部屋に閉じ込めたらしい。つたぐ、こつちが騒ぎを起こせない身分なのをいいことに、やつてくれるじゃないの。で、ここどこなのよ。ゾガには色々と聞きたいことがあるんだけど、あの様子じゃ素直には教えてくれないような気がする。何か、彼から話を引き出すヒ

ントをつかまないと。それにはまず、彼をここに呼ばなくてはならない。

私は細心の注意を払って、音を立てずにドアの真ん前に移動すると、床に直接横になつた。そしてそのまま、ひたすら待つた。今こそ、日本で逃亡生活に入つて最初に身に付けた特技を使う時だ。

忍法！『居留守』の術つ！

ゾガはきっと、この近くにいる。もしもこの部屋から、いつまでも私の起こす物音　ドアを開けようとする音、トイレや食事などの生活音、ゾガを呼ぶ声　が何一つ起こらなかつたら。つまり、修道院で眠らされてから私が一度も目を覚まさないという状況が疑われたら、彼はどうするか。きっと、様子を見にやってくるはずだ。それまではひたすら待つ！　トイレに行かなくていいように、飲み食いもなし！　とりあえず限界まで頑張つてみる！

待つた。ひたすら待つた。メイラーやアコル、それにグレッドはどうしたかなとか、いつか城に戻れたら何をしようかなとか、想像をめぐらせながら。

明かり取りの窓から差し込む光が午後のそれになつた頃、うとうとしていたら、ミシリ……と床板のきしむ音がした。ドアの鍵が外れる。

やっと来たよ！

開いたドアのすぐ下の床に倒れている（ようく見えるはずの）私に、誰かがががみこんで触れようとした。私は跳ね起きると、その誰かに身体ごどぶつかつた。

一瞬だけ見えたドアの外。廊下の窓から見える屋根の色、一瞬鼻

をかすめた何かを調理する油と香辛料の匂いには、覚えがあつた。

すぐにドアは後ろ手に閉められ、私は腕を強くつかまれて薄暗い

部屋の中に押し戻された。

ゾガの色の薄い瞳、その上の細い眉が少しだけひそめられているのを見て、私はちょっととしてやつたりな気分になつた。

そして、彼を逃がさないようにしてしつかり袖を捕まえたまま、ささやいた。

「無理矢理拉致しなくても、エングルの街だったら私自分から来たのに」

## 29 聖樹の示す方角

修道院に着いて馬を降り、扉を開ける前から、メイラーの声が聞こえていた。

「アユル！ おい、分かるか？」

そのただならぬ様子に背筋が寒くなり、私は急いで台所に入った。卓のすぐそばの床で、アユルの上半身を抱え起こしたメイラーが殺氣を向けて来た。すぐにハツと息を飲む。

「祭司長様」

「何があった？」

つかつかと近寄り膝をつくと、メイラーは目を閉じているアユルの鼻のあたりに小瓶をさしつけながら低く答えた。

「昨夜、シーゼ様がゾガに誘拐されました」

「！」

「薬を使われました」

短い報告の間に、アユルが眉根を寄せて身じろぎする。強い酒の匂い……気つけか。

シーゼ様をゾガが腕に抱いて連れ去る様子が、勝手に脳裏に浮かぶ。

なぜゾガが。彼は私が祭司長になつた数年前、地方の祭司から推薦されて王城の聖堂の僧兵になつた。戒律を良く守り、僧兵としての訓練も怠らず、そこそこの学識もある模範的な男。

企みがあつたことを見抜けなかつたとは……！ まさか、王太后様の？

「ゾガはもしや、王太后様のご命令で動いているということは考えられませんか」

同じことを考えていたのか、メイラーが鋭く尋ねてくる。

今ごろシーゼ様がどんな状態でいらっしゃるのかという不吉な想像を抑えつけ、私は必死で頭を働かせた。

「いや……それにしても、ゾガ一人だけで行動しているというのがおかしい。もつと確実な方法がいくらでも」

言いかけた時、くつ、と外套の袖を引かれた。

目を覚ましたアユルが、こちらに瞳を向けていた。

「シーゼ様は、ゾガに、連れていかれたんですか」  
かされた声で尋ねると、顔をしかめて頭に手をやる。気分が悪いのだろう。

「そうだ」

「行き先は？」

メイラーが首を振ると、アユルは自分で身体を起こしながら挑むような目で私を見つめた。

「王城に連れて行つて下さい」

「王城に？」

彼も、王太后様の仕業だと疑っているのか？ もし王太后様がシーゼ様を再び元の世界へ返そうとしているとすれば、帰還陣は王城の大聖堂でしか開くことができない。それなら王城へ向かうべきといふことになるが……。

「シーゼ様は僕の髪をお持ちです。僕なら、魔力さえあればシーゼ様の行き先を追えるかもしれない。魔力のある所に連れて行つて欲しいんです」

アユルはメイラーにつかまつて立ち上がった。

「魔力……聖樹のか？ しかし聖樹は厳重に警備されている。魔法庭を辞めたお前は近づけぬ」

私の言葉の途中から、アユルは首を振った。

「隠し通路から、陛下とシーゼ様の寝室へ。あそこに、もう一本の聖樹が」

そこまで言つて彼は言葉を切り、唇を噛んだが、耐えきれないようすに口を強く閉じた。

「くそお……つ、シーザ様……！」

メイラーが、アコルの背中を大きく一つ叩いた。

深夜、ランタンの明かりに照らされた石造りの通路に固いノックの音が響く。

「陛下、グレッドでござります」

「メイラーです」

「アコルです！」

ややして天井の一部が持ち上がり、横にずれた。向こうからも明かりが差し込んでくる。

「上がれ」

お許しを得て、私は梯子を登った。疑っていたわけではないが、そこは本当にフェザリオン陛下の 国王陛下ご夫妻の寝室らしかった。そして、アコルの言つたとおりかすかな魔力の気配がある。

「シーザがあらぬな。何があった

すでに寝着姿だった陛下は厳しい表情で私たちをご覧になつた。端的に報告する。

「陛下、申し訳ありません。昨晩、私の手の者のゾガという男が、シーザ様を連れ去つたようです」

「何だと」

「行き先も目的も不明。アコルが行き先を追う方法があると申したため、こちらに伺いました。その……聖樹があれば可能だと」アコルが一步前へ出て、片膝をつく。陛下は聞き返すことなく、身を翻された。

「庭だ」

窓を開けると、星明かりに照らされた円形の花壇に一本の若木が見えた。葉は青に近く、葉裏が白い まさか本当にここに聖樹が植わっているとは。

近づくと、さらに魔力の気配が濃厚になった。いや……それだけではない、これは。

「シーゼ様の気配だ……そうか、シーゼ様お手すから植樹なさったことを、聖樹が記憶している……？」

アユルも気づいたのか、つぶやく。そして、

「失礼します」

とほかの花を踏まないよう花壇に入り、若木のそばに膝をつくと、両手でそっと幹を包むように触れた。

「すごい……魔法を使うって、こういう感じなんですね。自分の身体の中を、血と一緒に魔力が巡ってるみたいだ……近くじゃない。シーゼ様は、王城にはいらっしゃいません」

アユルの顔から表情が消え、瞳が細められた。ややして、腕が上がる。

「こっちの方だ」

指さした方角は、東。<sup>ドイア</sup>陛下はまたさつと身を翻されると、寝室から隣の居間へ移られた。私は後を追う。

居間の壁には、ハーヴェステス王国とその周囲の国々を含む地図が掛けられている。

「デイルボー、イセラ、ラウダ……」

陛下の指が地図の地名をたどる。すぐにメイラーとアユルが追いついてきた。

「……コクール、エングル。その向こうがダーナディルス王国だな」

「あっ！」

アユルが短い声を上げ、

「あ

と片手で自分の髪をぐしゃっと握つた。

「どうか、エングルの街で聞いたことがあつたんだ！ 僕が気づかなきやいけなかつたのに！」

「アユル？」

メイラーが促すと、アユルは情けなさそうな顔でメイラーをみた。「メイラーさんがゾガさんを捕まえた時、あの人、一瞬地が出たじゃないですか。悪態をついて。その時の言葉を、エングルの街などで聞いたことがあったのを思い出しました。ハーヴ人とダーナ人がけんか騒ぎを起こした時に」

アユルは陛下を見上げた。

「ゾガさんのその時の言葉、ハーヴ人は使わないものだつたんですね私はこぶしを握り締めた。」

「ゾガはダーナデイルスの間諜か！」

こちらがダーナデイルスに間諜を潜ませていいように、ダーナデイルスも当然ハーヴエステスに間諜を潜ませているだろう。ゾガの正体はそれか……シーゼ様は、ダーナデイルス王国の手に落ちただ。

陛下の反応は素早かつた。

「ダーナとの国境は現在、警戒が強まっている。そう簡単には越えられまい。メイラー」

「は」

「すぐにアユルとエングルに向かい、シーゼの安全を確保。余の配下の、お前たちを見張っていた者たちもすぐに向かわせる。エングルで合流し、そなたの下に入れて使え」

「御意」

「グレッド。表敬訪問団をお迎えすると言つ名目で、エングルまでは無理でも近くまで出られるか」

「二日、いただければ」

「メイラー、事態の推移によつてはグレッドに指示を仰げ。アユル、シーゼを発見するのに何か必要なものはあるか」

「大丈夫です。近くまで行けば『わかる』と思います」

「よし。シーゼを人質扱いして何か要求してきた場合、余は城から動くわけにはいかぬ。頼んだぞ。……シーゼは、自分を見捨てろと

言つたが

陛下は視線を下げ、少し沈黙なさつたが、すぐに私たちを見渡した。

「しかし、彼女には事態を変える力があると余は思つてゐる。……異世界から彼女を召喚する時、余は神に祈つたのだ。異世界に連れてこられても心折れない女性、逆境を力に変える女性をと」

私は、召喚されてきた時のシー・ゼ様の、瞳の強い光を思い出した。

「あれはおそらく、ただ大人しく捕まつているだけの女ではない」

陛下は苦笑すると、もう一度表情を引き締めた。

「シー・ゼの元へ行き、彼女の行動を助けよ」

## 29 聖樹の示す方角（後書き）

暁の女神ドイリの方角が東。<sup>ドイア</sup> 同様に、黄昏の女神シャンピが西、<sup>シャニア</sup> 太陽神ソレスが南、<sup>ソリア</sup> 星と夜の神ニユイスが北<sup>ニュイア</sup>です。登場人物一覧にこの呼称を追加しました。

【リクエスト小説福袋】（前書き）

あけましておめでとうございます！ クイズ正解者にいただいたり  
クエストSS、時系列順に三本詰め合わせでお届けします。拍手小  
話も1／1更新しました。こちらもリクエスト版。

## 【リクエスト用福袋】

### 【つかの間の逃避行】

「ちょっとと残念で可愛いメイラーの小話」リクエスト。フェザーとシーザーの結婚式直前あたりのお話で、まだメイラーは怪我をしています。

王妃の間の扉が、その豪奢な外観に似つかわしくないすさまじい勢いで開いた。

「メイラー！ 私を連れて逃げてっ！」

「はあ！？」

控えの間にいた俺は飛び出してきた王妃に手を捕まれ、仰天しながらも手を引かれるまま廊下を走り出した。

後ろから、お待ちください王妃様っ、と女官長の声が聞こえる。  
「お、王妃様！？」

俺の手を握る指の細さに胸を高鳴らせながら呼ぶと、王妃は振り返りもせずに一言。

「いいから！ 馬！」

う、馬にお乗りになりたいから俺か。王妃はまだ乗馬に慣れていらっしゃらないから……。

すぐ近くの庭の片隅に仮拵えの馬場と厩舎があり、王妃の練習用の馬がそこで世話をされている。そちらへと全速力で走る王妃の速さときたら……王妃の世界の女性はみんなこのように鍛えているのだろうか。

純白の馬が一頭、馬場からこちらを不思議そうに眺めていた。呆然と見送る厩番を尻目に、俺は王妃にせかされて彼女を乗せると馬の腹を蹴った。

駆け足で馬を走らせ、聖堂のあたりの静かな庭園まで来ると、歩調を緩める。

「一体、どうなさったのですか？」

俺の腕の中、横座りになつた王妃の様子を観察する。息を弾ませ頬を紅潮させた王妃は、とても……愛らしい。その王妃は、こちらをキッと見上げた。

「だつてもう、びっくりよ。今日の王妃教育は陛下の乳母だつた女性が先生だつたんだけど、あれ何なの、『寝所での作法』つて！？」

「は、はあ」

俺は返事に困つた。

「気心の知れた人とエロトークするなら楽しいけど、先生に『セックスの時はこうしなさい』なんて、もつといい大人なのに言われるようなこと！？」

王妃は憤然とこぶしを握る。

「そんなの夫婦の問題じゃないね。極端な話、私と陛下が楽しければどんなプレイしたっていいじゃないの」

「そ、そいつしゃつたんですか」

「言つた。そしたら、真面目にお聞きくださいって叱られた。聞こうとはしたのよ、聞こうとは。でも……」

ぶるぶるつ、と身体を震わせて、王妃は水色のドレスの袖からすんなりと伸びた腕をさすつた。

「あーやつぱりだめ、あんな真面目な雰囲気あんな話、無理っ！ 寒気がして思わず逃げちゃつた！」

俺はとうとう苦笑してしまつた。

「まあ、お相手が国王陛下ですか？」「？」

きょとん、と俺を見上げる黒い瞳に、俺は話しかけた。

「つまり……陛下と寝所で一人きりになる女性を、何もなしに陛下

の元に送り出すわけにはいかないんですよ

「あ……」

王妃はすぐに気づかれたようだ。

「なるほど。つまりこれも、乳母さんの仕事だから仕方ないってことか……」

「そうですよ。形式です」

そつか、と王妃はうなずかれた。勢いで動いてしまわれる」とはあるが、とても素直なお方だ。

悪いことしちゃったなあ、とつぶやく王妃に、

「戻られますか？」

と尋ねると「うん」という返事。俺は手綱を引いて馬首を返し、元来た方に戻り始めた。

「でもね……私もまだまだ信用されてないんだよね、なんて思っちゃったの。別に一人きりになつたからって、陛下が嫌がることしたりしないのに」

独り言のように語る王妃は、そつだ、と声を上げられた。  
「信用されるようにすればいいんだわ。つまりみんなの前で、陛下が大事つ、陛下にラブ！ ってそぶりを見せる！ よしこれだ」  
そぶりって。気持ちの自然な発露ではないんですね。

俺は陛下に「同情申し上げながらも、お答えした。

「そうですね。それと……俺には少し冷たいそぶりをなさつて下さい」

「え？ 何で？」

不思議そうな王妃に、俺はわざと一ヤリとして見せた。

「先ほどの様子を目撃した者がどう思つかを考えると、誤解を避けるためにそつなさつた方が。……「私を連れて逃げて」ですからね

「あ、あっはっは、そうよね」

王妃はくすくすと笑い、また俺を見上げた。

「でも、メイラーに冷たくなんて、できないわ……」

胸が一つ大きく打つ。両腕の間にいるこの存在が、まるで俺のものであるかのような錯覚を起こす。

王妃は晴れやかに笑った。

「冷たくなんてしなくても、『男』扱いしなければいいんでしょう？」

ええまあはいそなんですけどね。

俺はこいつそりとため息をつきながら、王妃の部屋まで彼女を送り届けたのだった。

### 【始まりの日】

「妊娠発覚直後。」出産直前。「直後の小話」「リクエスト。出産直後でお願いします

王妃の寝室に入ると、ドイリの降り注ぐ優しい光が、カーテン越しに部屋の中を温めていた。

静かに寝台に近づき、天蓋から垂れ下がる紗を手の甲でそっと避ける。覗き込むと、闘いを終えたシーザは寝台の中でぐつたりと目を開じていたが、気配に気づいてうつすらと瞳を開いた。黒い瞳がこちらにめぐらされ、余を認めて唇が開く。

「……もつとインナーマッスル鍛えておけばよかつた……」

余は思わず頬を緩めた。彼女が何か文句を言つるのは照れ隠しのためであることに、最近気づいたからだ。

構わずに、寝台の上に手をついて身をかがめる。

「よく頑張ったな。礼を言つ」

額に唇を当ててから身体を起こすと、彼女は口元をわなわなさせている。

「やめり……甘り……人が動けないと思つて……」

余は思わず目を見開いた。どうやら彼女は、身体に力が入らず抵抗できないようだ。この反応はなかなか新鮮だった。

気がついたら、自然と身体が動いていた。もう一度ゆっくりと屈み込むと、今度は唇を重ねる。シーゼの腕が上がり軽く肩を押されたが、羽根が触れたようなものだった。

懷妊報告をえ夫である余が最初ではなかつたのだ、今くらいは余の子どもを産んでくれた妻に、夫らしいことをさせてもらつても構わぬだらう……。

部屋の外から声がかかり、我に返つて身体を起こすと、シーゼは目元を赤くしてふいつとそっぽを向いてしまつた。苦笑しながら返事をすると、乳母が生まれたばかりの赤子を連れて來た。

おめでとう『ゼロ』と差し出されて、うなずきながらひょい、と抱き取る。産湯を使つたばかりの赤子は温かな湿り氣をまとつていて、気持ちよさそうに白い産着に包まれて目を閉じていた。

シーゼがこちらを向いて目を見張つた。

「…………フェザー、ダッコ慣れてる！？ 何で！？」

「何かの用事で誰かの館に招かれると、そこに赤子がいれば『末代までの語り草になります』などと言つて抱かされるからな」

赤子がふと瞳を開いた。微笑みかけてやると、見えているのかいないのかじつとこちらを見つめている。髪も瞳も黒い 王家の記録では、召喚された王妃の持つ色は次の世代には受け継がれるが、その次からはまた白に戻るらしい。どういう仕組みかは知らないが。

乳母がいつたん部屋を出ていくと、シーゼは余をじつと見つめて言った。

「……なんかフェザー、お父さんっぽい感じするわ。意外」

ん？と彼女を見ると、彼女は少し笑つた。

「言葉は悪いけどごめんね。伝統だからっていう理由で異世界から召喚した女に子どもを産ませるくらいだから、王族つてもつと家族に対する情が薄いんだって思つてたの。召喚じゃなくても、ほら、政略結婚とかあるじゃない？」

余は少し考えてから、言った。

「それは『始まり』にしか過ぎぬ。その後は本人次第だな。……余は少なくとも今、そなたを大事にしたいと思っているが？」

げふあ、とシーゼは変な声を上げて、手の甲を額に当てていた。が、ややして肘をつくと、ゆっくりと身体を起こした。余は左腕に赤子をのせるようにして抱くと、寝台の彼女のすぐ横に腰かけて右手で彼女に手を貸し、抱き寄せて余に寄りかからせた。

彼女がぎこちなく手を出したので、赤子を抱かせる。赤子は少し口元を動かしたが、泣くことはなかつた。ホツとしたように、シーゼが余を見て微笑んだ。

「フェザーバッカリ抱っこが上手かつたら、母親の沾券に関わるもん」

しばらくして、赤子はすうっと目を閉じた。眠つたな、とシーゼの顔を見て……彼女も瞳を閉じていることに気づいた。

腕の中で、妻と子どもが眠つている。

これが『始まり』なのだな。余は腕にそつと、力を込めた。

## 【黒と赤】

「H様と王妃様がラブラブしてるシーン」リクエスト。22話「もう一度、あの日から」の雰囲気を一人が自らぶち壊した上で再構

築するところ荒業でするので注意。パラレルか、未来か。

「そなたのような女を一度正妃にしたら、他の女では物足りぬぞ?」「わ、ワイルドフェザー……っ」

フェザリオンの手の中で、シーゼの手が汗ばむ。それに気づいた彼女が手を引こうとするのを、フェザリオンは許さず握り直した。そのまま彼女の身体を引き寄せ。腰をさらつようにして抱き込み、小さな頭をわしづかむよにして口づける。

「フェ……っ、あっ」

身体を引こうとする動きに合わせ、一步大きく踏み込むと、シーゼの身体は背後の寝台の上に崩れた。のしかかるフェザリオンの胸を、シーゼはあわてて押し返す。

「ま、待ってフェザー! 今はダメだつて!」

「何故だ? 久しぶりに会つたのではないか。そしてここは夫婦の寝室だ」

「そ、だけど、下でメイラーとか聞いてて、あっ……アユルなんて未成年だしつ! R16!」

「メイラーが配慮しているだろ? .....嫌なのか? まさかシーゼ、誰かと?」

「ばか.....浮気なんてしてないよ.....ふあっ、声、聞かれちゃう」「構うものか」

「フェザー……」

「といつ夢を見ました」

淡々と報告するシーゼに、余は眉間に当てていた指をよつやく離して顔を上げた。

まだソレスが高々と天空にある時刻。緑の木々に囲まれた庭園に

は涼やかな風が吹いていた。テラスの白い丸テーブルには茶が纖細に香りたち、白いドレスのシーザは気に入りの焼き菓子をつまんでいる。

「……………事細かな報告、毎日中からいたみいる。それで、余にどうせよと?」

「どうつて」

シーザはカップを置くと、ひょいと立ち上がって余の背後にまわつた。しなやかな腕が余の肩にからみつき、柔らかなものが当たる。耳元に甘い声。

「何とも思わない?」

「時と場所が違えば、何か思つたかもしれぬな  
「つまんないのー」

温もりが離れ、シーザは庭に下りると花壇の方へ歩いて行つた。背中に流れる黒髪を眺めながら、余は密かに吐息を逃がした。

「浮氣」という単語に、見抜かれたかと思つたのだ。グレッドが嘘をついてまで彼女を逃がしたと聞いた時に、一瞬心をよぎつた黒い感情に。

視線に気づいたのか、シーザが振り返つて「ん?」と首を傾げる。余は立ち上がると彼女に近づき、隣に立つた。

「ねえ、ここに菜園作るのつてアリ? イチゴとかそういうの育てたら、ひょいって食べられそうだし」

見上げてくるシーザに、余は軽くうなずいた。そして、少し身をかがめると、

「毎間から、柄にもないことを。

と思いながら、微笑む甘い果実を口に含んだ。

私はさつさとパンを食べ終えると、水も飲み干して空になつた瓶をテーブルの隅に追いやつた。

さつきからゾガがこっちをジメーツと見ていて、落ち着かないつたらありやしない。お腹が空いてたから先に食事したけど、早く話を始めよう。

私どゾガは、私が監禁されていた部屋の隣の部屋に移動していた。もうここがエングルの街だつてわかつちゃつた私を、窓をふさいだ部屋に閉じ込めておく必要はないでしょ、と言つたら、意外とあつさりゾガは聞いてくれたのだ。

ここはどうやら宿屋かそれに準ずる場所らしく、今いる部屋はベッドとテーブルと椅子だけの客室といった雰囲気だった。

「えーと、それで、ダーナデイルスに近いこの街に来たといつ」とは、ゾガはダーナ関係者なのよね？ 私をあちらに連れて行いつとしている？

私の確認に、相変わらず黙り込んでいるゾガ。沈黙は肯定とみなして話を進めるよ。

「今は国境は警備がキツそだから、何かを待つてるのかしら。あ、表敬訪問団が出入りする時に紛れこもうとしてるのかな。なるほど」仕方がないので、一人で話して一人でうなづく。

「実はねゾガ。メイラーたちに反対されそだから黙つてたけど、私はダーナに行きたいと思つてました。例の、聖樹が燃えた時に何があつたのがわかれれば一番いいなと思つて。それが無理でも、ダーナのことを直接知りたいと思つて」

私は、テーブルの上に置かれたゾガの指の、硬そうな節々を眺めながら言つた。彼は今、いつものゆつたりした袖の服ではなくじく

普通のシャツを着ている。

「ほら、一応まだ王妃でしょ私。この目と髪を見ればハーヴ王妃だつてわかるから、向こうの偉い人と会えるんじやないかと思つて。つまり、勝手に外交しちゃえってことね。 わかつて、ダーナで捕まつて人質にされる可能性もあるよね」

ゾガが軽く眉をしかめたような気がして、私は笑いかけた。

「進退窮まつたら、『私は髪を染めて王妃のフリをしてただけですゴメンナサイ』って言うわ。王妃でありながら『価値がないこと』が、私の価値だから」

フェザーに「見捨ててくれ」と言つたのは、決して卑屈な感情からだけじゃない。今の私の特殊な立場を利用して動くために、必要だからそう言つたんだ。だってこの件が解決しないことには、私はそもそも王妃としての未来はないもの。

まあ……私はそれでいいかもしないけど、フェザーがあんなに私を大事に思つてくれてるなら……政治との間で板挟みかもしない。

ごめんよ。

はい次。

「だからねゾガ、私をダーナに連れて行くならちゃんと言つこと聞くから、メイラーたちに私が無事だつてことだけは知らせて欲しい。何か心配なら、ハーヴを出た後で……もう戻れないところまで行ってから知らせるのもいいから。お願ひ

これだけは聞いて欲しくて、私はゾガに真剣に頼み込んだ。

ゾガは沈黙していた。どうしたら聞いてもらえるだろう、何か取引材料になるようなものは……と必死で考える。

といつてもこつちは逃亡中の身で何も持っていないし、持っていたとしてもゾガってお金で動くタイプなんだろうか。他にはもうカラダしかないんですけど、どうなんですかゾガさんそっちの方は。……カラダでたらし込まれるタイプだったら、なんかガツカリだなあ。

「シーゼ様」

ゾガの薄い唇が動いた。

あられもない想像をしていた私は、びっくりして彼を見た。ゾガに名前を呼ばれるのは初めてだ。

「……なに？」

何を言われるのかと少々ビクビクしながら聞き返すと、ゾガは淡々と言った。

「修道院を離れた後、私の主あるじに、シーゼ様のことを『ご報告しました』ゾガの主つて、ダーナの偉い人ということでいいのかしら。それつて誰だろう。

聞き返そうかと思つたけど、せっかくゾガがしゃべる気になつてくれたので、話の腰を折らないようにつなぎにとどめる。

あーあ、しかしこれ、ハーヴ何やつてんだつて思われただろうな。異世界から女を召喚して跡継ぎ産ませるつていう伝統行事を果たしておいて、魔力を得るために元の世界に追い返そうとして、失敗して逃げられて。

「魔力が大量に戻った場合、ダーナの聖樹が燃えたときのようなことが起こる可能性も、お話ししました」

ふんふん。そうね、聖書にかかっていた魔法が発動した時までは、ゾガも一緒にいたもんね。もしかして、ゾガも多少は魔力を感じ取ることができるものなのかもしれない。

「そして、シーゼ様がダーナの味方になるかもしないということも」

ふんふん。……ん？

「味方……？  
何の話？」

「『ダーナデイルスは、聖樹のあるハーヴェステスをずっと恐れて  
来たはずだ』と、シーザ様はダーナの立場をおもんぱかって下さつ  
た」

「気のせいか、ゾガの口調がいつもより温かみがある気がする。ま  
さか……私、褒められてる？」

「そして私の知る限り、これまでシーザ様は一度も、ダーナを敵と  
見なすような発言はなさつていらっしゃいません」

「そ、そんなの当たり前じゃないの！」

私は驚いて言い返してしまった。

「私は単に、召喚されたのがハーヴだつたからハーヴ国王妃になつ  
ただけの女よ？ ダーナに何の恨みもないもの。ダーナが召喚して  
たらダーナに行つてたかもしれないじゃない？」

「そうよ、それでダーナ王家の誰かの奥さんになつてたかもしれな  
いじゃないの。」

ダーナは王女様が三人いるだけだから、もしそつちで召喚されて  
たら、現在の国王の側室あたりになつてたのかしら。ダーナ国王は、  
確か四十一歳。射程距離、射程距離。

……何の話でしたつけ。

「いや、でも、それでどうして私がダーナの味方つてことになるの  
よ」

「シーザ様は、ハーヴとダーナの戦争は望んでいらっしゃらない。  
そして今、失礼ながらハーヴ王家には戻れないお立場  
ゾガは静かに言った。

「ダーナにお招きし、両国の平和のために協力していただいてはど

うかと、私は主に申し上げました

「それで私をさらつたの？」

私は「ぐく」と喉を鳴らした。

ハーヴが私を日本に帰還させることで魔力を得ようとすることを、ゾガを通じてダーナは知ってしまった。私を捕まえてダーナに閉じこめておけば、ハーヴは魔力を得ることができない。「協力」というのはつまりそういうことだ。

それで平和になる？ 違うよね。単に、魔力の問題を一時的に先送りにするだけだ。

そのためだけに軟禁されるなんて、たまつたもんじやない。その間にウインガリオンはどんどん大きくなっちゃうよ。そのつちあきらめると思われてるんだろうか。

「強引に事を運んでしまい申し訳ありません。しかし、シーザ様もダーナにおいてになりたかったのならちょうどいい。ハーヴを出るまで、私がお守りします」

ゾガは静かに立ち上がった。

「ここはエングルの下町の宿屋で騒がしいところですが、宿の主人は私どもの仲間です。この階には従業員も立ち入らないように言ってあります。もし何かありましたら私の妻のふりをして下さい」私は目を剥いてのけぞるところだった。今度はゾガと夫婦のフリー！

ゾガはテーブルを離れかけ、ちょっと振り返った。

「いつか、グレッド殿が私の主であることを気にかけて下さいましたね。本当の主は別にありますので、お気になさらないで下さい」そして今度こそ、はっきりと口元だけを笑みの形になると、

「また様子を見に伺います」

と言つて静かに部屋から出ていった。音もなく、ドアが閉まった。

……今の、ゾガの冗談？

私は少し呆然としてしまったけど、すぐに気持ちを引き締め直して考え始めた。

ダーナでいろんなことを知りたいという気持ちは今でもあるけど、向こうへ行つてしまつたら戻つてくるのはかなり難しそうだ。その前にやっぱりどうあつても、メイラーたちに連絡を取らなくちゃ。

私は付け毛を直すと、窓から外をのぞいた。こちらの部屋の窓は、少ししか開かないようにはなつてているものの普通の窓だ。

ここは三階らしい。田の前は細い路地で、向かいの建物の屋根の向こうに中央広場の鐘つき堂が見える。アコルの働いていた小姓喫茶も、あのあたりだ。

ダーナから表敬訪問団が来るから、今この香港の街にはたくさんのお警備の兵がいるはず。私の顔を知っている人がいるかもしれないから、下手に動かないようにしないと。

それにしても、ゾガがダーナのスパイだつたなんてね。グレッドつたらそんな人を私の護衛につけたりして、全然見抜けてないと祭司長としてどうなのよ。

そういえば王太后様も、ダーナに潜ませたスパイから情報を得ているのよね。どこの国でも、そういうことってやつてるんだなー。

そこまで考えた時、あることに気づいた私は、自分のふくらはぎのあたりから頭のてっぺんまで悪寒が駆け上がるのを感じた。

ゾガが私のことをダーナに伝え、そのダーナに王太后様のスパイがいる。

王太后様にも、私がまだこちの世界にいることが、バレてしまふんじやないだろうか。

「明日、ダーナティルス王国のセルリア王女殿下が、ハーヴ入りします」

ゾガが言った。エングルの街に連れて来られて、一日の朝のことだ。

「殿下は明日はこのエングルにお泊りになり、その後で王城へ。三日滞在なさってから、ダーナへ帰国されます」

「ふーん」

軟禁生活にすっかり倦んでしまった私は、窓枠に肘をついて外を眺めたまま答えた。

修道院にいた頃は、どつかからフェザーの手下が修道院を見張つてたらしいけど、その後どうしたのよ。私にどうにかして接触してくれれば、フェザーと連絡が取れるのに。まあきっと、ゾガが私を誘拐する時に撒いちゃったんだろうな。

「帰国の際に、シーゼ様と共にダーナにお連れします」

ゾガはテーブルについたまま、淡々と言つ。これでも以前よりはしゃべってくれるようになつたので、多少とつつきやすくなつた。今日は例の袖がゆつたりしたハーフコートみたいな服を着ている彼に、私は答えた。

「国境越えは、私をトランクかスキーバッグにでも詰めるわけ？」

「……………はい」

ガーン。イヤミで言つたのにマジレス。

スキーバッグはないにしても、国境を越える時に荷物のフリはさせられるつてことね また眠らされるかもしれない。

フンだ、こつちは閉じ込められっぱなしで食っちゃ寝食っちゃ寝、重くなつてますからね！ せいぜい持ち運びに苦労するがいいわ。

「一気に人が増えたわね」

窓から路地を見下ろして言つ。数日前と比べて、人通りが明らかに増えていた。

「先遣隊がすでに入国を始めていますので。……警備が厳しいので、手続きに時間がかかるつているようです」

ゾガが言つた時、部屋のドアをノックする音がして私はビクリとした。この階には他の人は来ないんじゃなかつた？

ゾガがスッと立つてドアに近づくと、向こうからぼそぼそとしだ声がした。ゾガが廊下に出る。

彼はすぐに戻つて来ると、言つた。

「警備兵が来ているようです。建物の中を確認して回りたいと」

王太后様が、私を探してる？

ダーナに王太后様のスパイがいる話は、国際問題になるのでゾガにはできない。だから、王太后様が私の現在の居場所まで割り出してしまった可能性までは、ゾガは考えていないかもしれない。

王太后様に見つかるより、私がダーナに行く方が早いと思つてたんだけど……甘かつただろうか。

「シーザ様は、横になつて目を閉じていて下さい。髪は隠せますが、瞳の色が……。ひとまず臥せつてることに」

ぐるぐると考えている私を、ゾガは軽く押して寝台の方に連れて行つた。私は大人しくベッドに横になりながら、ゾガを見上げて言った。

「警備兵に、私の顔を知つてる人がいるかも……」

「…………」

ゾガは黙つてベッドわきの椅子に腰かけると、すつと私の額に冷たい手を当てた。はたから見ると、夫が妻の熱を測つているような感じだらうけど、直接触れたことで私にはその手の意図が伝わつた。

ああ、そうか。きっと今この腕には、アユルを人質にした時みたいに何か武器が仕込んであるんだろう。王太后様の手の者に見つかって私を渡さなきやならなくなつたら、ゾガは私を殺して一人で逃げればいいんだものね……。

また、ノックの音がした。私は考えるのをやめて、目を閉じた。ゾガが返事をして立ち、ドアを開けた。

その瞬間、澄んだ金属音が一回したと思つたら大きな足音が部屋に踏み込んできて、壁が振動した。

私はビクビクしながら薄眼を開けて様子を伺い、それからガバッと起き上がった。

警備兵の制服の男がいた。兵はドアの正面の壁にゾガを追い詰めていて、二人は剣でつば迫り合っている。その警備兵の横顔は……。

「メイラー！」

「ゾガ、剣を引け！」

メイラーが歯を食いしばりながらゾガに言つ。踏ん張る足が辛いのかもしれない。

「お前とシーぜ様がこの部屋にいることは、アユルがつきとめた。すでにフェザリオン陛下の手の者がここを包囲している。勝ち目はないぞ」

誘拐犯に投降を促す刑事ドラマのワンシーンみたいだと思いつつ、私は急いでメイラーの背中側に回つてから呼びかけた。

「二人ともストップ！ ちょっと相談したいから。ねつ

「シーぜ様、離れて下さい」

警備兵のカーキ色の帽子の下で汗を滲ませているメイラーが言う。彼の手にしているシークレット長剣（鞘だけ長かつたやつね）と、ゾガの手にしているやたらと細身でとがつた剣とが、ギシギシいながら交差している。

私は後ずさりしてドアから廊下に出た。私がいると、ゾガに人質にされるかもしない。

「シーゼ様！　ご無事で！」

ポンチョみたいな服をはためかせてアユルが駆け寄つて来たけど、私はまず指示を飛ばした。

「アユル！　あれ取つて！」

「え、こ、これですか？」

廊下の隅に立てかけてあつたモップを受け取ると、私はそれを持つてもう一度部屋に入つた。メイラーを盾にする位置に立ち、モップの柄をメイラーの脇からゾガの方へ向ける。

「ゾガ、すぐに剣を引いて！　早くしないとこれで……変な所つつくわよつ」

妙な間があつた後で、ゆっくりゆっくりと一人の剣から殺気が消えた。

ゾガは表情を変えないまま、一步下がつて剣を降ろす。メイラーは剣を降ろしこそしなかつたものの、重心をえて足をかばつたようだ。

「シーゼ様……変な所つて」

後ろからアユルの呆れた声がして、私は焦つて言い訳した。

「ちが、えと、ほらアレよアレ、そうー、みぞおちー、みぞおちつて言いたかつたんだけど出てこなかつたのよつ」「つ、焦つてたんだからじょうがないじゃん！」

ゾガはしぶとくチャンスをうかがつている雰囲気はあるものの、私がダーナに行きたがってるのを知つてるので少し様子を見ることにしたようだ。ああもう、「雰囲気」だの「様子」だの、しゃべ

つてくれないから全部憶測よつ。やりにくいつたら。

とにかく彼は部屋の隅に座り込み、私はテーブルに着いてメイラーとアユルから今の状況を聞いた。

「それじゃ、フェザーの手下と合流して私を追つてきてくれたのね。警備兵の服はフェザーが手配してくれたんだ。それにしても聖樹の魔力を使って、私の持つてるアコルの髪の場所がわかるなんて……」

私が感心すると、アユルは微笑んだ。

「シーゼ様が植えた聖樹だからこそ、かもしません。何が役に立つかわかりませんね」

「本当ね」

思わず噴き出す。ああ、数日ぶりに笑った気がするわ。

「あ……それでね」

私はちらつとゾガの方を見ると、一言断りを入れた。

「ゾガ、ごめん。ちょっとハーヴェステス機密の内緒話するから」「ダーナの間諜に、わざわざ断り入れなくとも……」  
アユルはぼそっと言ってたけど、まあ一応ね。

私は部屋の隅にメイラーとアユルを引っ張つていくと、口元を隠して二人に耳打ちした。

「王太后様が、私の居場所をつかんじやつたかも……」

そう考えるに至った理由を話すと、メイラーはうなずいた。

「こちらでもその可能性は考えました。危険ですので、シーゼ様がダーナにお行きになりたいという話はひとまず保留にして、いつたんエングルを離れましよう。俺はダーナ行きは反対ですが」「そうです。セルリア王女一行と一緒にダーナに入るにしても、王女がハーヴでの用を終えて帰国するまでには、まだ何日もあるんですから。僕もダーナ行きは反対ですけど」

アユルも言う。

「うう……わかつた」

私もひとまずうなずいて 私たち三人は、ゾガを見た。ゾガがじろりとこちらを見る。

ここ数日の付き合いで少しだけゾガの表情が読めるようになったけど、今はコレかなり不機嫌ですよこの人。でも、彼にも一緒に来てもらわないと、彼からダーナ側に色々と情報が漏れてしまうわけで。

さて……どうしよう?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1247y/>

---

王妃様は逃亡中

2012年1月8日23時43分発行